第7回大会
せたがや福祉区民学会

「ともに生きる世田谷」をめざして

学びあい、広げよう
せたがや福祉の輪

報告集

日時：平成27年12月19日（土）
　　　12：00～17：30（開場　11：30）
会場：日本大学文理学部　3号館4階・5階

主催：せたがや福祉区民学会
　　　せたがや福祉区民学会第７回大会実行委員会
共催：日本大学文理学部
　　　社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
後援：世田谷区
　　　社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会

目　次

せたがや福祉区民学会第７回大会プログラム.................... 5

会場見取り図.................... 6

全体会Ⅰ

せたがや福祉区民学会会長挨拶.................... 10

せたがや福祉区民学会第７回大会開催校挨拶.................... 11

世田谷区長からのメッセージ.................... 12

基調講演「人生第２トラックを支援する世田谷のまちづくり
～私たちに何ができるか」.................... 13
長谷川　敏彦（一般社団法人未来医療研究機構代表理事・
日本大学文理学部社会福祉学科非常勤講師）

実践研修発表

パネル型発表一覧.................... 20
教室型発表一覧.................... 22
ワークショップ.................... 26

〈パネル型発表〉

第１会場

（1）配食の目指すもの　～訪問介護だから見えるもの、できること～.................... 28
（2）ご利用者Ａ様のADL向上.................... 30
（3）スーパーマーケットと協力し行ったカルシウム摂取量
増加普及活動について.................... 32
（4）インターナショナルスクールに通う幼児の日本食を
通した食育活動について.................... 34
（5）災害に強いまちづくり.................... 36
（6）地域ささえ愛デイサービス　地域とのかかわり合い.................... 38
担当助言者.................... 40

第２会場

（1）在宅介護家族会の近況.................... 42
（2）地域包括ケアシステム構築に向けた深沢地区の課題抽出・分析.................... 44
（3）歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」27年度の取組み.................... 46
（4）五感と右脳の目覚め　～共同研究のお願い～.................... 48

(5) 区民版子ども・子育て会議 50
(6) 野菜摂取量の増加・和食の普及を目指した公衆栄養活動報告 52
(7) せたがや福祉区民学会学生交流会「せたがや Link！」
1 年間の活動と地域調査 54
担当助言者 56

〈教室型発表〉

第 1 分科会　子どもとともに育ちあう／子ども、若者の輝く社会／一人ひとりに向き合った実践

(1) A さんとその家族への支援の取組みから 58
(2) 在宅療養児の家族交流会（レインボーの会）を実施して
～開催から 5 年間の実施状況の報告～ 60
(3) 18 歳で退所後のアフターケア　必要な支援について 62
(4) 母子分離が難しい新入園児 A 君への関わり 64
(5)「子どもの虐待防止推進フォーラムせたがや 2015」
に向けた取り組み 66
(6) A さんの心情理解と出勤への応援 68
担当進行役・助言者 70

第 2 分科会　多世代による文化交流／一人ひとりに向き合った実践

(1) 自閉症の行動特徴を受け止める 72
(2) ホームシェアによる高齢者と若者の暮らしを支える取り組み 74
(3) シニア世代と幼児のつながりづくりの試み（その 5）
保育園での実践経験を生かし地域に拓く活動へ 76
(4) 自立支援にみる家具調椅子の使用と歩行の成果
～椅子 or 車椅子どっちがいい？～ 78
(5) 住民活動と社協事業が協働した実践活動 80
(6) 日大サロン「さくら」の設立とその活動 82
(7) 色カルタで見えた本当のあなた 84
担当進行役・助言者 86

第 3 分科会　生きがいづくり・まちづくり／地域をつなぐネットワーク

(1) 認知症サポート SOS 店　構築にむけて
～認知症カフェから始まった 3 年間の取り組み～ 88
(2) 砧地域ご近所フォーラムのとりくみ
～ひろがってきた「顔の見える関係」～ 90
(3) デイ・ホームが育てる地域ボランティア 92
(4)「世老研」35 周年記念式　～35 年間の歩みと今後の取り組み 94
(5) 男性介護者の会「男の介護を語る会」の活動報告 96
(6) コーシャハイム千歳烏山、地域交流レストランでの取り組み 98

担当進行役・助言者......100

第４分科会　協働・連携／働く・社会に参加する
(1) 生活の回復......102
(2) 地域包括ケアの実現のために　～私たちができることを考える～......104
(3) 世田谷区生活困窮者自立相談支援事業の現状と今後の課題
～モデル事業から本格実施へ～......106
(4) 障害のある方が働くために必要なものは…？......108
(5) 口から食べる機能の維持における専門機関との連携の効果報告......110
(6) お口周りの筋肉を鍛えて、嚥下力UP！......112
担当進行役・助言者......114

第５分科会　一人ひとりに向き合った実践
(1) Aさんとの関わりを通して支援者としての基本的姿勢を振り返る......116
(2) エピソードからAさんをアセスメントする......118
(3) エピソードを通して全体像をアセスメントする......120
(4) 対応困難ご利用者様へ立ち向かえ
～ご利用者様へ何が出来るかその一事例～......122
(5) 心情に着目した捉え方......124
(6) 性の悩みを抱えている利用者への支援......126
担当進行役・助言者......128

第６分科会　認知症とともに豊かに生きる／一人ひとりに向き合った実践
(1) 身だしなみプログラムでいきいきと......130
(2) 社会と繋がる
～認知症入居者と地域住民との関係作りの為の取り組み......132
(3) 主役になり自分らしくいる。
“今”の気持ちを大切にする認知症ケアの実践......134
(4) いらっしゃいませ！お子様たち！
～世代間交流を活用した生きる力の支援～......136
(5) 骨折ゼロに向けた原因分析に基づく取り組み......138
(6) 慢性腎不全を抱えるAさんのグループホームの生活について......140
(7) みんなで一緒にエイエイオー！　～すべてがリハビリ～......142
担当進行役・助言者......144

第７分科会　最後までその人らしく生きる／その他の取り組み
(1) 特養久我山園における暮らしの中での感染症予防......146
(2) 地域包括ケアシステム構築への取り組み......148
(3) 在宅で看取ることのできなかった母......150
(4) 定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービスにおける看取り事例......152

（5）社会福祉実習受け入れ側・実習生側それぞれの立場から 154
（6）移送の安全を考える研究会の活動紹介 156
（7）高齢者・介護者への情報提供、健康管理の方法について 158
担当進行役・助言者 160

〈ワークショップ〉
『何が必要？未来のせたがや福祉のシティ』 161

全体会Ⅱ
大会総括 164
次回開催校挨拶 171
第７回大会実行委員長挨拶 172

資料編
せたがや福祉区民学会役員名簿 176
第７回大会実行委員名簿 177
第７回大会実績 178
団体会員名簿 179
設立趣旨 182

せたがや福祉区民学会　第７回大会プログラム

１　**全体会Ⅰ**　　　（１２：００～１３：００）　　３号館５階３５０７教室

○会長挨拶

○開催校挨拶

○世田谷区長挨拶（高齢福祉部長代読）

○基調講演　「人生第２トラックを支援する世田谷のまちづくり
～私たちに何ができるか」
長谷川　敏彦（一般社団法人未来医療研究機構代表理事・
日本大学文理学部社会福祉学科非常勤講師）

２　**実践研究発表**　（１３：００～１６：３０）

○パネル型発表　（１３：００～１６：３０）　３号館５階（３５０１、３５０２）

【一斉発表時間】詳しくは、Ｐ１１～１２で各発表の時間をご確認ください。

①　１３：５５～１４：１５

②　１６：０５～１６：２５

※１３：００～１６：３０はパネル掲示を、ご自由にご覧ください。

○教室型発表　　（１３：３０～１６：２５）　３号館５階各教室

第１分科会　３５０４教室	第５分科会　３５０９教室
第２分科会　３５０５教室	第６分科会　３５１０教室
第３分科会　３５０３教室	第７分科会　３５０６教室
第４分科会　３５０８教室	

○ワークショップ（１４：２０～１５：３５）　３号館４階３４０９教室

３　**全体会Ⅱ**　（１６：４５～１７：３０）　３号館５階３５０７教室

○大会総括

○次回開催校挨拶

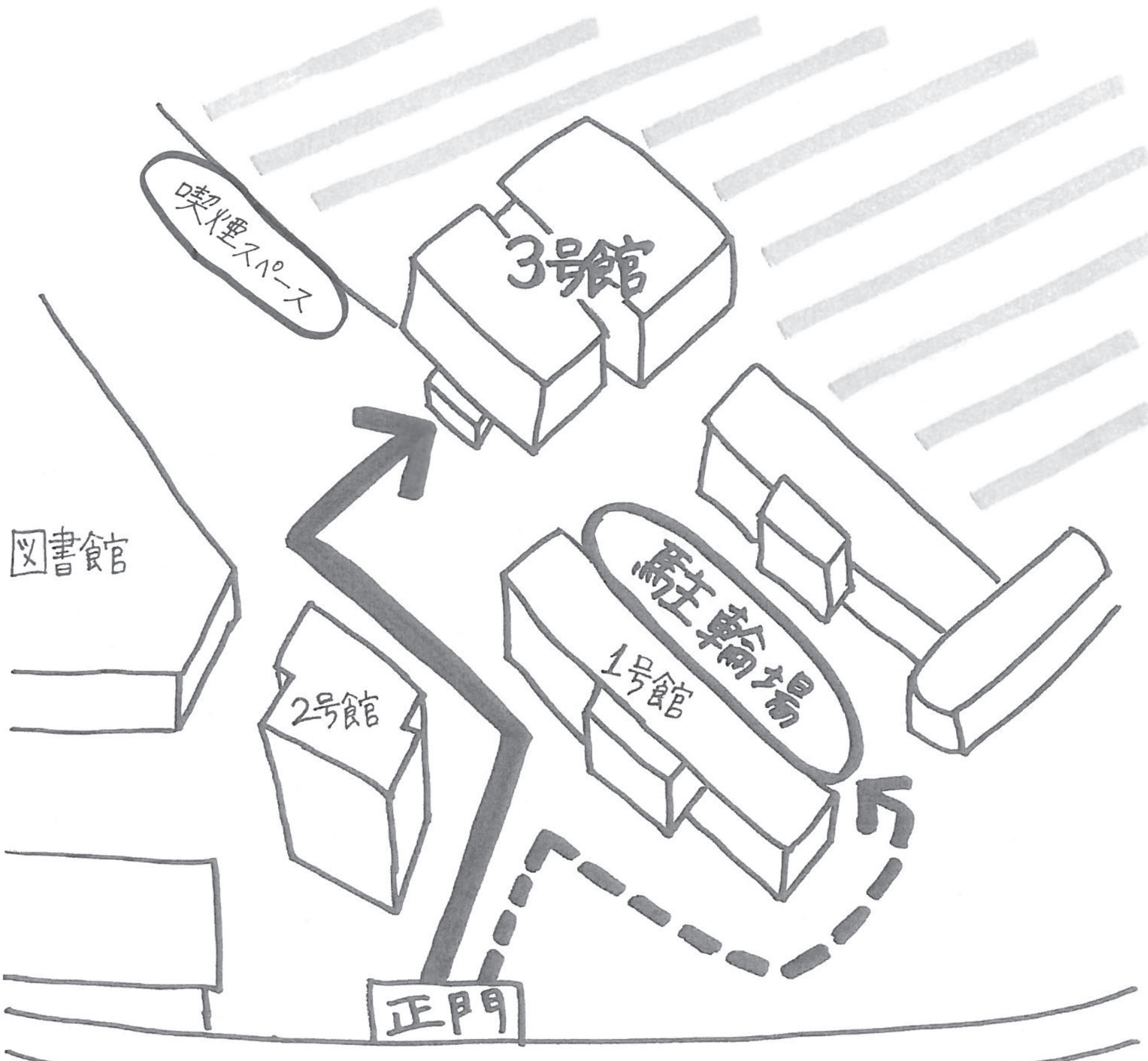
○閉会

※全体会では、ハブネットせたがや（当会会員）によりパソコン文字通訳を行います。
※全体会及びご希望の分科会には、手話通訳が付きます。ご希望の方は大会総合受付にお申し出ください。
※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学からの学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

＊懇親会　（１７：４５～１９：００）　　　３号館１階学生食堂

当日の参加申し込みができます。詳しくは、大会総合受付にお問い合わせください。

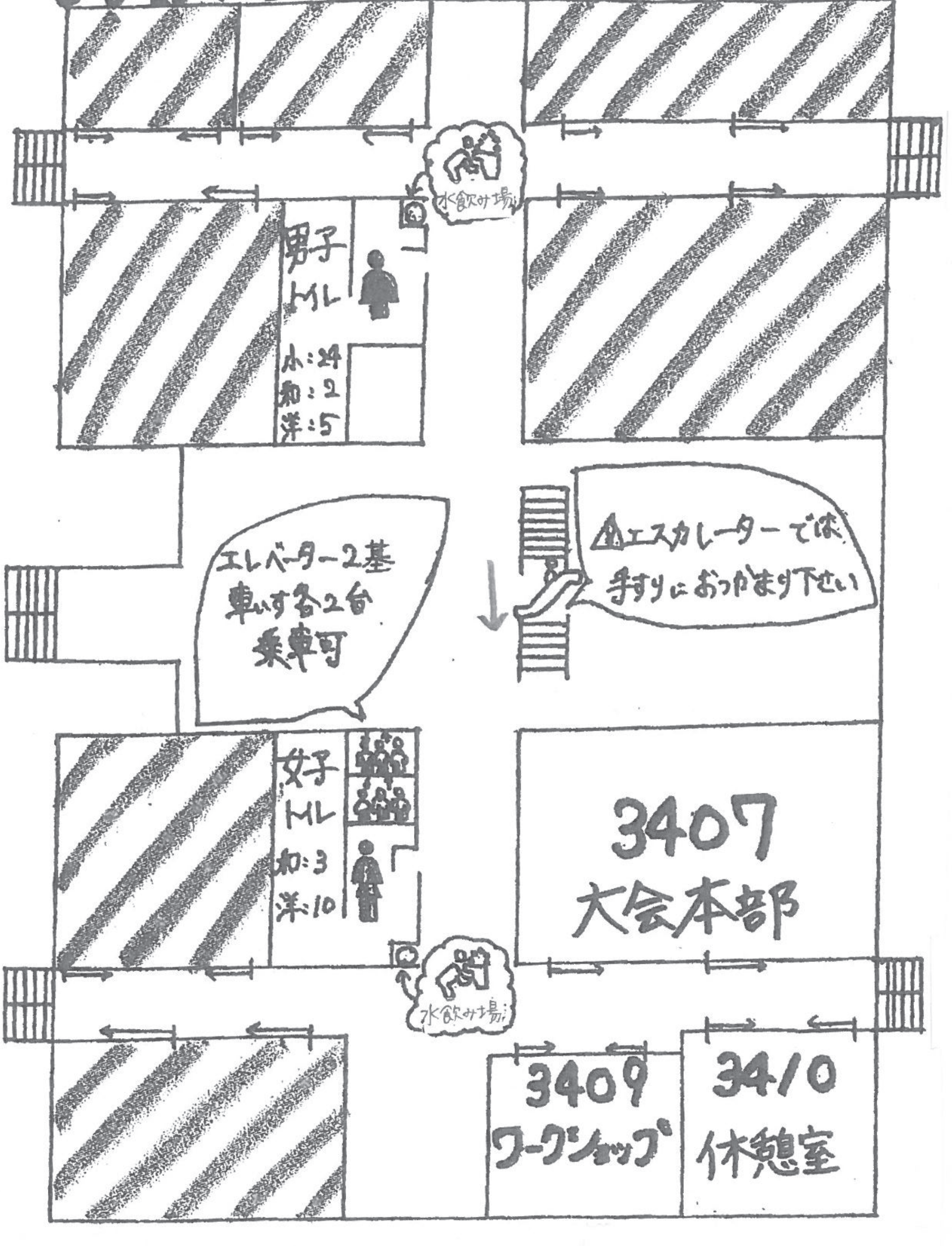
文理学部
キャンパスマップ



は工事中のため、通行できません。

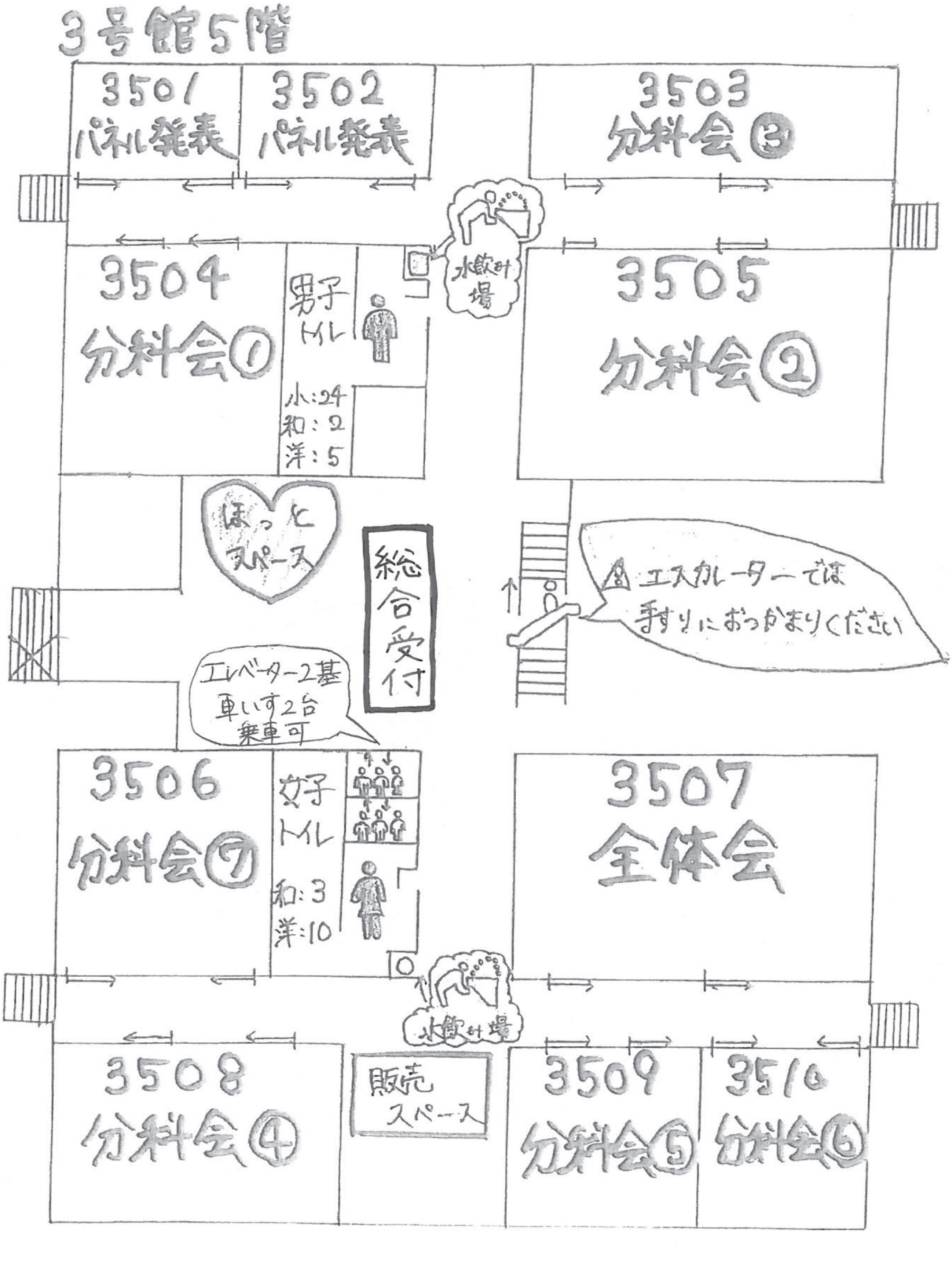
日本大学文理学部社会福祉学科学生作成

3号館4階



は授業を行っております。ご協力お願い致します。

日本大学文理学部社会福祉学科学生作成



※ ごみのお持ち帰りにご協力お願いいたします。

日本大学文理学部社会福祉学科学生作成

全体会Ⅰ

せたがや福祉区民学会会長挨拶

せたがや福祉区民学会会長　　永山　誠

本日は、年末の大変忙しい時期にもかかわらず、たくさんの方にご参加いただきましたことを、心からお礼を申し上げたいと思います。

準備大会から数えまして８回目のせたがや福祉区民学会第７回大会は、せたがや福祉区民学会および第７回大会実行委員会の主催で開催いたします。

開催準備にあたっては、開催校である日本大学文理学部および上之園先生をはじめとする文理学部の先生方に、大会実行委員会の牽引役を担っていただきました。また本日は、貴学の長谷川敏彦先生（未来医療研究機構代表理事）に基調講演をいただく予定です。

大会実行委員会と、ご協力いただいた諸団体、多くの区民の皆さん、区内の大学の諸先生方、および学生の方々、せたがや福祉区民学会学生交流会「せたがや Link!」など、関係者の皆様の大きなご協力に対して、区民学会を代表し、心からお礼を申し上げたいと思います。

さて、もう１２月。1 年を振り返る時期になりました。皆様の心に残ったことは、どのようなことでしょうか。

私はスポーツ分野の成果に注目しました。フィギュアスケートの羽生結弦さんの３３０点を超える世界最高の得点の演技は、世界中が「神業」と評価しました。あるいは五郎丸選手の日本ラグビーは、世界のラグビー界の常識を覆したといわれました。これらの目を見張る成果に、私は非常に爽やかな気分になり、未来が開かれる感じさえしました。私たちはルールにもとづく舞台があると非常に素晴らしい力を発揮できるものだと強く印象づけられました。

福祉のほうはどうでしょうか。ちょっと状況は違うようです。決して爽やかな感じはしない状況にある。福祉の領域は、心配なことや、心を痛めるようなことも起こり閉塞感のようなものにおおわれているようです。しかし福祉のこの閉塞感を徐々に解決し打開する力が私たちにはきっとあるはずだと、スポーツの成果を見て改めて感じた次第です。

本日の第７回大会では、様々な実践や研究のすぐれた成果がたくさん発表されると思います。

本大会で爽やかな空気を胸一杯に吸い込んでいただくとともに、後から懇親会もありますので、相互の交流も深めていただきたいと思います。

簡単ではありますが、これをもちまして私の挨拶といたします。

せたがや福祉区民学会第７回大会　開催校挨拶

日本大学文理学部次長　鈴木　正彦

みなさん、こんにちは。本来なら、文理学部の加藤学部長が、この壇上でご挨拶すべきところでありますが、所用により不在ですので、次長の私で失礼させていただきます。

さて、せたがや福祉区民学会 第７回大会を、日本大学文理学部で開催させていただくことに関して、皆様にお礼を申し上げたいと思います。このような栄誉ある学会を本学で開催していただくことは、当学部にとって大変名誉なことです。

日本大学は、明治２２年、日本法律学校という名で開校されました。当時の司法大臣だった山田顕義が学祖です。その後、当文理学部は当初法学部の文学科という位置付けで発足いたしました。そして、世田谷の地に校舎を構え、文理学部として独立して現在に至っております。

文理学部は、全部で１８の学科から成り立っております。理学系、人文系、社会系の３つの学系の中に１８学科を擁し、学生数は８千人強です。教職員、大学院生を含めると１万人弱という大所帯です。このような文理学部に、２０１３年社会福祉学科が創設されました。みなさんと一緒に学会を担っている上之園先生を含む数名の教員で、この学科はスタートいたしました。実は、学科創設以前には社会福祉コースという名で、福祉関係の人材を１０年近くにわたり養成していた実績がございます。

現在、日本の社会を俯瞰してみますと、社会福祉の分野には様々な課題があることがわかります。私も学部次長という立場上、近隣の学校等に関わらせていただいているのですが、経済的困難を抱えた児童の問題、発達障害の児童のケアの問題、引きこもりの若者支援の問題、はたまた高齢化社会での老人福祉の問題など様々な問題が山積みしていることを承知しています。

組織と組織の連携は、福祉の問題を解決するためには重要であると認識しています。そのような観点から、最近当学部は世田谷区と連携して若者支援に協力させていただいています。しかし、福祉の問題は結局、人と人の１対１の関係が何よりも重要であると考えます。ここにおられるみなさんは、まさに最前線でそのような問題と向き合っていらっしゃる方々です。当学部も、地域とのつながりを重視し、キメの細かいお付き合いを通して皆様と協力しながら社会福祉に貢献させていただきたいと考えています。

最後になりますが、ここにお集まりの皆様の益々のご発展を祈念して、私の挨拶とさせていただきます。宜しくお願いします。

世田谷区長からのメッセージ

世田谷区高齢福祉部長　田中　文子

皆さん、こんにちは。世田谷区高齢福祉部長の田中です。

ご紹介いただいたように、本来なら保坂展人区長が伺うべきところですが、公務のため失礼いたしております。区長よりメッセージを預かってまいりましたので、代読させていただきます。

本日は、せたがや福祉区民学会大会 第７回大会の開催、まことにおめでとうございます。

開催校としてご協力いただきました日本大学の皆さまに、心から感謝申し上げるとともに、大会準備にご尽力いただいた学会の委員の皆さま、運営委員および大会の実行委員の皆さまに厚くお礼申し上げます。

せたがや福祉区民学会は、区内の福祉関係の事業所で働く方、区内の大学で福祉を学びあるいは研究・教育に携わる方、一般区民の方、福祉行政に携わる方などが一堂に会し、日頃の福祉実践活動の工夫や抱える課題、研究成果について発表し合い、学び合うという、たいへん有意義なものです。

発表事例も年々増えており、その内容が充実してきております。ご高齢の方から大学生まで、年齢や立場などを超えて、語り合えるような機会はなかなかないのではないでしょうか。

今年度は、パネル型・教室型の発表に加え、新たな取り組みとして「何が必要？　未来のせたがや 福祉のシティ」と題してワークショップが開催されると伺っております。昭和女子大学、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学と、本大会の開催校である日本大学文理学部のご協力を得まして、世田谷の福祉が、さらに充実してゆくことを実感しております。

近頃、介護人材の担い手不足などが報道されておりますが、福祉に関心のある若い皆様に、将来の福祉を担う人材として活躍していただけることを心から期待しております。

結びに、本日のせたがや福祉区民学会の成功と、様々な専門分野・研究分野からご参加いただいた皆様、そしてご来場いただいた区民の皆さまのご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

以上、代読させていただきました。

せたがや福祉区民学会第７回大会　基調講演

「人生第２トラックを支援する世田谷のまちづくり～私たちに何ができるか　」

一般社団法人未来医療研究機構代表理事
日本大学文理学部社会福祉学科非常勤講師
長谷川　敏彦

♪～　今はこんなに悲しくて　涙も…、まわるまわるよ、時代はまわる…　～♪
（中島みゆき　「時代」）

1.　自己紹介

このたびは、このような大変素晴らしい会にお呼びいただき、たいへん興奮しております。しかし、どういうわけか、この歌から始めました。昔、深夜に仕事に疲れてくると、この歌を聞いて鼓舞していました。今日は、どのように時代がまわるかがテーマです。

それにしても、これだけの方が集まり、区民の方が直接参加する学会は初めてで、区民の方々が中心となって、学者と話し合うというのはすごいですね、びっくりしました。世田谷は、福祉の課題、高齢期に関する大きな課題を持っているのと同時に、このような大変大きなポテンシャル、資産があると思います。

私は元々外科医であり、公衆衛生の研究者です。アメリカでトレーニングを受けて帰国すると突然厚労省から話がきて、行政官になり、いろんな政策に関わりました。その後は日本医科大学を退官し、あとは死ぬだけ、と日々過ごしていましたところ、1 年前に本学の教授から、日本大学で教えてくれないかと連絡をいただき、大変名誉なことに半年、社会福祉の講義をいたしました。

本日は、そのサマリーを皆さんと共有し、世田谷の未来、新しい社会福祉について考えられればと思います。どのように時代がまわるのかを、皆さんと見ていきましょう。

2.　課題紹介

まず最初に、２つの質問をします。

①　皆さん、どんな病気で死にたいですか。

会場／心筋梗塞

会場／ピンピンコロリ

最近、こんな質問から講演を始めています。2020 年頃、脳卒中の人は「あなたはよい病気で死んでうらやましい。私は医療費をたくさん使って、最後は認知症だったので準備ができなかった」と言い、がんの人は、「でも、死と向き合うことがつらかった」と答えます。「いや、ケアサイクルがうまく回って、死と向き合うことができて、あなたこそ死のエリートだ」と。これまでとはひっくり返る価値観です。システムがうまく回れば安心ということを申し上げたかったのです。10 年前は、がんは死因の３分の１でしたが、予測によると将来は４分の１だけになります。そして、覚悟できればがんで死ぬのを夢見る時代になるのです。

ではもう一回お聞きします。どんなご病気で死にたいですか。

会場／老衰。

② 皆さんは何歳くらいまで生きると思いますか。
会場／85歳。
会場／80歳。
「コホート生命表」というのがあるのです。それを用いて分析すると、日本の生きている全ての女性の、5人から6人に1人が100歳になるというのです。女性の半分以上は、90歳まで生きるんです。すごいですね。皆さんは覚悟はできているんでしょうか。

実は、ガリバーがその問題を追究しました。ガリバーは実は船医でいろんな国に行きました。老人国ではガリバーは医師なので、長生きしたら金儲けができて安楽な生活ができると思ったのです。ところが長生きしている人に聞いたら、頑固、欲張り、嫉妬、欲望、病気などいろんな悩みがあるという話です。さて、皆さん、長生きの覚悟はできましたか。

命を救う・病気をなくすということから、障害をどのように減らしていくかということが、医療と福祉界の人達のみならず、皆さま方ご自身が追究すべき課題に変わってくるのではないでしょうか。

3. 「人生」、「社会」、「医療」の大転換

次いで、２つの質問をします。今から一緒に、福祉の課題、高齢問題を中心に、実践について考えましょう。
① あなたは自分の人生がどうなると思いますか。
② あなたは、日本社会はどうなると思いますか。

まずは、「人生」について考えましょう。昔、日本の平均寿命は40歳代でした。それが、90歳代に倍増しました。特に日本は、信じられないスピードでです。人生には3つのステージがあります。学んで社会にデビューする第1ステージ。家族をつくり子供を育て、働いて家族を支える第2ステージ。そしてリタイアすると第3ステージ。自分がしたいことができる素晴らしいステージです。ただ、最後に死が待っていて、その手前にケアサイクルが待っています。昔から、サードエイジ、臨終期、フィフティプラスと言われ、生物的にいうと、生殖後、生産後人口に属します。

もし、65歳でリタイアすると考え1日9時間働いたとしたら、働いた時間は10万時間です。
そして定年後に20年間生き、85歳で死ぬと、非睡眠時間は10万時間となります。つまり、働いた時間と、リタイア後の時間が同じなんです。もし100歳まで生きると25万時間にもなります。但し後半は、障害や病気を抱えています。

そう考えると、人生は、50歳を境に、昇り坂と下り坂があるといえます。昇り坂は、一生懸命に上って頑張るぞと、死のことを考えずに未来を信じて生きていきました。それが、ほとんどの人間は、50歳まで生きることとなり、下り坂に差し掛かることになりました。坂の下の死と手前側の障害を見ざるを得なくなります。どんな人生を送りたいかを考えないと、それを支えることが目的となる医療は実施できなくなります。福祉も同じだと思います。

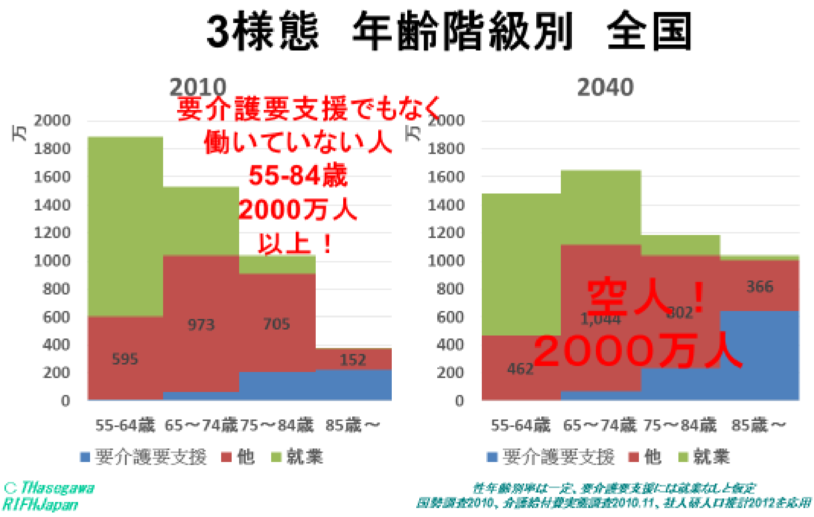
「家族」も大変です。3分の1が未婚で、３分の１が離婚の時代です。また、３分の１が添い遂げられても、最後はお一人様です。また、かつての核家族の公団住宅の標準には、おさまらない家族が出てきます。町全体が家族になる必要があるのです。

それから“空家”が増えます。全国の予測だと43%、半分ぐらいが空き家になります。

地方では空き家が増えています。住む家が必要な人がたくさんいるのにも拘らず、空き家が増えているのです。

「労働」の分野では、2030 年、現在の男女の就業率については 15%減ります。2060 年には半分になります。一方、要介護要支援者は、約 2 倍に増えます。従って、労働力で要介護要支援の方を支えるなら、大変重い構造になっていることがわかります。

だのに、2010 年には、要介護要支援でないのに、働いていない 55 歳から 84 歳までの人が、全国で 2 千万人でした。2040 年もほぼ同じ 2 千万人の予測です。これを、“空人（あきびと）”と呼びます。労働力が必要なのに空人が存在しています。空人をいかに働かせるかが課題ではないでしょうか。



「医療」について話します。私は外科医であったときに、自分は医者なのか、医療をしていたのか、非常に悩んだことがあります。若人では病気の治癒や救命可能なのに、高齢の要介護の人たちの治療は、医療というよりも人生のシナリオを書き換える作業をしている、そんなふうな感じがしました。これからは、高齢者が増え、医療は病気を「治す」のではない。患者の人生を共に歩んで、死を迎え、よかったねと振り返ることができるような、「支える」医療に変わります。

19 世紀までは、多くの人が工場で働き、病気は単一疾患、単一エピソードで、1 つの部位を治せば病気は治りました。医療の目標は、絶対治癒と絶対救命でした。場所は主に病院でした。

だけど、これからはいろいろな働き方があり、そして多疾患、継続発症、最後は死にます。目標は、死を避けたり、救命することではなく、人生を支援し機能を改善していくというふうに変わります。しかも軸足は地域に移ります。福祉と医療は目的が同化します。連携といわれていますが、実際は統合されていきます。そして、治す医療から支える医療に変わっていきます。支えるためには、皆さん 1 人 1 人が、どのように生きたいか、考えていただかなければならなくなります。

「死の有り様」が大きく変わるのではないでしょうか。今までの死は 19 世紀型の死で、「死を忘れるな」が標語でありました。15～50 歳の間に突然病気や死に襲われることが多かったからです。そして、つい最近までは、子育てや退職を終えてすぐに、ピンピンコロリで亡くなることが多かったのです。しかしもはや我々の死は、様々な過程を経て、疾病や障害の末にやってきます。残念ながら、長い期間、向き合わざるを得ません。その過程で、アメリカの老年学会では、14 の延命方法があるといわれています。それをあらかじめ伝え、どのように死んでいくか選んでおくことを勧めています。ということは実は、医師や看護師や福祉の人に、自分はこうやって死にたいということを告げることができる、素晴らしい時代がきたのではないでしょうか。

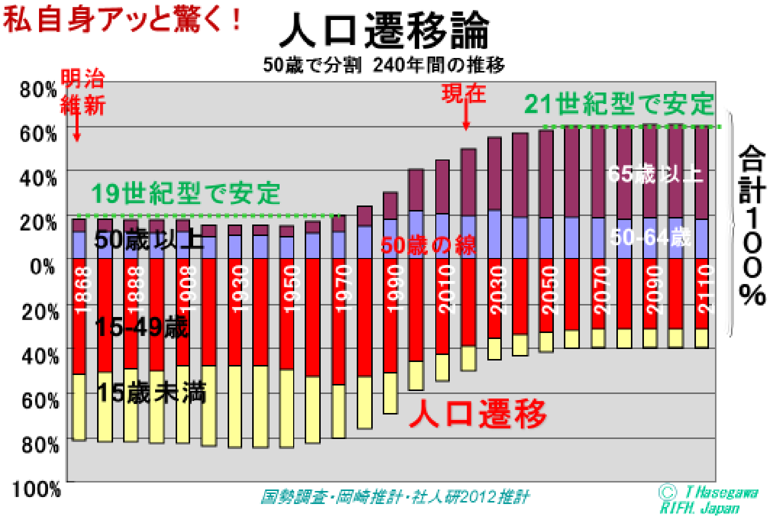
4. 別の国になる日本、たった 50 年で

一気に話しました。話は半分終わりました。

人生、家族、労働、列島、医療が大きく転換し、長寿、独居、労働力が減少し、介護が増えていきます。そういった課題が、一挙に同時に噴出したわけです。何故でしょうか。

謎解きの鍵はこの図です。私が 2 年ぐらい前に、240 年間の日本の歴史をみて自分で作って自分でのけぞった図があります。50 歳で線を引いているのがミソです。

1800 年代など近代国家が始まった頃は、人口の大半が 50 歳以下であるということにより、社会制度も思想も哲学もつくってきたのではないでしょうか。



21 世紀型は別の形で安定するのです。50 歳以上では、生産と生殖を終えた方が半分以上になります。生物的に言うと、ゴミです。

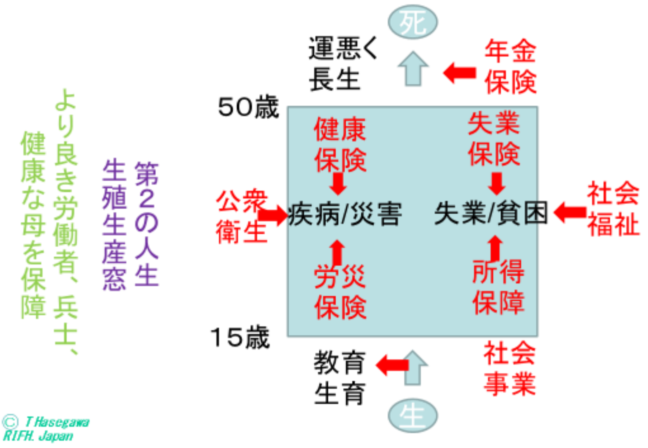
2022 年に生殖人口が半分以下になり、自然界の動物ではあり得ない社会です。しかも日本が最初に突入して世界に範を見せ、背中を見せ、日本が人類の実験国家となるのです。

5. 社会福祉の大転換

では、この意味を、「社会福祉医療」で考えてみましょう。今までの社会福祉では、何をやっていたでしょうか。今日の社会福祉は、近代の国民国家の競争を支える 3 本柱「軍事国家」「産業国家」「福祉国家」の 1 つです。しかし、近代国家もボーダーレスになってきています。これからの福祉は、人生の第 2 トラックを支えるものに変わっていくのではないでしょうか。

上智大学の社会福祉学科の教授、故･高原さんは、「長谷川くん、福祉は戦争のためにやるんだよ。Warfare is Welfare, Welfare is Warfare だ。厚生省は陸軍が作ったんだよ」と言われました。言われた瞬間、かなりショックでしたが、実は今回、半年日大で教えてその通りだと確信しました。授業の内容の 3 分の 2 が戦争の話でした。

社会保障の最初は、ビスマルク、プロイセンです。ビスマルクは労働者を弾圧するために、アメとムチで、それで福祉をつくったと言われています。私はそうじゃないと思います。社会福祉は必須だったのです。国民国家を支えるには、社会福祉制度をつくらないと戦争が戦えなかった、「社会国家」は近代国民国家の必須の要素だったのです。つまり、第 2 の人生を中心に近代核家族をつくりあげ、それが産業資本、すばらしい労働力、兵士をつくり出し、そして文明国家を支える、そのような構造で近代は進んできたのではないでしょうか。



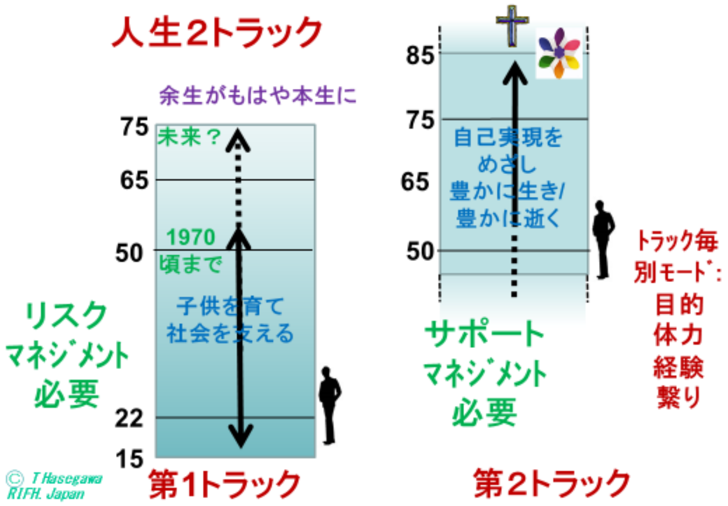
しかし、第二次大戦です。人類は二度も、バカげた大戦争をやりました。その結果、みんなで人権宣言をしました。そしてゆりかごから墓場までの福祉国家の成立です。いまや近代が終わり、国がボーダレスになり、家族が崩壊していくとすれば、どういう福祉を考えればいいのでしょうか。そこに、「まちづくり」というキーワードが出てまいります。

一挙に進む近代の終焉に、もうこれまでの福祉のシステムは使えません。ではどうしたらいいでしょうか。その答えこそ、世田谷にあります。皆さんの胸の内にあると思って、本日はやってきました。

6. 21 世紀の社会福祉・・・人生第 2 トラックを支えるまちづくり

いま同時並行で、様々な課題が生まれています。長い人生、独居高齢者、増える介護を解決するのは「まちづくり」ではないでしょうか。ではどういうまちづくりでしょうか。居場所づくりであり、わくわく元気、楽しい一生、つまり人生第 2 トラックを支えるまちづくりです。

これまでは、人生第 1 トラック、働いて子どもをつくることが中心でした。都心にビジネス、会社があって、郊外に団地があって電車で通うという構造の、団地、ベッドタウンが、1970 年代、1980 年代に大量に造られました。これからは、第 2 の人生をどう支えるかというまちづくりです。つまり、人生第 2 トラックを第 1 トラックと統合する、いや、第 2 が第 1 トラックの人生を引張っていく新しい社会が必要なのではないでしょうか。



今、定年を延長して 75 歳まで働け、生涯現役と言われますが、私は反対です。なぜならば、まず若者の職を奪います。また、50 歳を過ぎたら働き方の体力、目的が違います。「現役」という言葉の裏には、仕事を終えれば「余生」という考えがあるのではと思います。

生涯活動すべきという考えには、全く同感です。だからこそ、50 歳からの人生こそが本当の人生となり、従って少し早めに第 2 トラックに移行し、慣らしながら社会に貢献し、豊かに生き、豊かに逝くということがむしろいいのでは。50 歳までは、働き手が倒れたら子どもが大変なので、リスクを社会でマネジメントする、つまり社会保障が中心だったのです。だから、しんどくても頑張れる。第 2 のトラックというのは自分の働く目的も変わります。だから私は、ずっと現役でいるよりも、ギアを入れ替えチェンジして働ける社会をまずつくり、そして 2 つの社会が統合された社会をこれから目指していけばいいと思います。

これからの社会保障は、「完全居場所」づくりです。20 世紀の社会保障は、人生第 1 トラックを中心に考え、ビベレッジというイギリス人が「ゆりかごから墓場まで」と提案したのですが、それを支えるためにはお金を稼いで、それをプールしてリスクを保障するのです。そのため経済学者ケインズが働く場所を多くして「完全雇用」を目指す、つまり有効需要による雇用の創出を提案しました。人生第 2 トラックでは、社会参加や活動を目指すそれぞれの人に居場所が必要なのです。

東京都には200万人もの「空人」がいます。それが2040年には280万人になります。東京都は一番エゴイスティックな街で、他の地域は高度成長期以降に人口の流入が止まったが、東京都はどんどん流入し続けたからです。

人生を支える第2トラック、行政や建築の課題、地域のネットワーク。こういったものを総合的にとらえ、まちづくりを考えていく必要があるのではないでしょうか。

まとめますと、福祉の転換は、「リスクマネジメント」から「サポートマネジメント」へ。主な対象は、人生「第1トラック」から「第2トラック」へ。

資源は、「賃金や税金」から「資産」へ。

人権、はたして「第2トラックの人権」をどのように考えていったらいいか。この学会のテーマと思います。

人生は「短く」から「長く」。

人間観も「均一で独立した個人」から、「多様でお互いに支え合う人たち」という人間観に変わっていくのではないでしょうか。

7. 未来への道程

では、我々は何をすべきか。日本はこれからどういうリスクがあるのか。

社会保障費が膨れ上がってきています。

また、日本は世界で最も歴史的に自然災害が多い国で、地震は30年間に70%のリスクで起きると言われています。高齢者、五輪後の経済不況、自然災害3点セット、東アジアの冷戦体制の崩壊。これが2050年までに起きます。そうすると、国債デフォルト、外国人の流入、年金の破綻などで社会が大きく変わります。社会保障制度が崩壊するかもしれません。その準備をする必要があります。今の社会保障制度は、人生第1トラックの人々が互いに支え合うための1800年代の後半に作られたものです。

新しい社会保障の形を模索していく必要があります。高齢者には金銭のフローがありません。資産、様々な地域の資産を活用して互いに支え合うようにせねばなりません。

実は、我々は、人生第2トラックでは志でネットワークを作り、繋がる必要があるのではないでしょうか。

世田谷のまちづくりは大変です。なぜならば、世田谷は日本の4つの県よりも人口が多いからです。要介護者をいかに減らし、どう支えるかが大きな課題になるのではないでしょうか。

世田谷区でも、人々が集える、繋がれる「まちの縁側」を、行政側から進めていると聞いています。

あと50年で、日本は全く違う世界に突入し、別の国になります。

子どもができた友人は、2人目をつくらないと言います。こんなにたくさんの借金を抱えて孫に継ぐことは、不可能であると言います。

考えてみると、刻一刻、我々は高齢社会の世界記録を更新しています。実は、皆さん全員が、ご飯を食べたりトイレに行ったりしていても、それそのものが新しい社会の実験をしているのです。なぜなら、世界に先駆けて、人類が誰も経験したことのない超高齢社会に向けて日本は進んでいます。それは、世田谷から実験するんだ、作られるんだ、ということを期待して、私の話を終わりたいと思います。

実践研究発表

パネル型発表一覧

第1会場 （3501教室）

助言者
諏訪　徹（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
植田　祐二（世田谷高次脳機能障害連絡協議会）

【一斉発表時間　13:55～14:15】

	発表者	所属	テーマ
1	梶原　裕美 三武　絢子 小林　佳子	社会福祉法人奉優会　等々力の家 訪問介護ステーション/配食サービス	配食の目指すもの ～訪問介護だから見えるもの、できること～
2	斉藤　裕章 大野　克彦	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	ご利用者A様のADL向上
3	吉村　香子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	スーパーマーケットと協力し行ったカルシウム摂取量 増加普及活動について

【一斉発表時間　16:05～16:25】

	発表者	所属	テーマ
4	峰村　貴央	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	インターナショナルスクールに通う幼児の日本食を 通した食育活動について
5	枡鏡　今日子 小滝　清 坂本　俊太 中山　萌子 橘田　真美 加藤　世名	NPO法人国際ボランティア学生 協会（IVUSA）	災害に強いまちづくり
6	渡部　真純	社会福祉法人奉優会 奉優デイサービス池尻	地域ささえ愛デイサービス 地域とのかかわり合い

パネル型発表一覧

第2会場 （3502教室）

助言者
牧野　まゆみ（日本放送協会学園高等学校教諭）
市川　裕太（グループホームかたらいホーム長）
瓜生　律子（世田谷区高齢福祉部高齢福祉課長）

【一斉発表時間　13:55～14:15】

	発表者	所属	テーマ
1	高山　都規子	かたよせ会	在宅介護家族会の近況
2	梶川　芙美子 原　和美	深沢あんしんすこやかセンター	地域包括ケアシステム構築に向けた深沢地区の 課題抽出・分析
3	林　秀幸	等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」27年度の取組み
4	中山　進	世田谷区民	五感と右脳の目覚め ～共同研究のお願い～

【一斉発表時間　16:05～16:25】

	発表者	所属	テーマ
5	明石　眞弓 松田　妙子	特定非営利活動法人 せたがや子育てネット	区民版子ども・子育て会議
6	鈴木　礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	野菜摂取量の増加・和食の普及を目指した 公衆栄養活動報告
7	橋本　茉依 牧田　季憲 安藤　伸也	東京医療保健大学 駒澤大学 日本大学	せたがや福祉区民学会学生交流会「せたがやLink！」 1年間の活動と地域調査

教室型発表一覧

第1分科会　子どもとともに育ちあう/子ども、若者の輝く社会/一人ひとりに向き合った実践（3504教室）

進行役・助言者 横山　順一（日本体育大学体育学部健康学科准教授）
森田　規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	坂下　幸生	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	Aさんとその家族への支援の取組みから	13:30
2	今井　めぐみ 念佛　久子	世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう 訪問看護ステーション芦花	在宅療養児の家族交流会(レインボーの会)を実施して ～開催から5年間の実施状況の報告～	13:55
3	加納　里恵	児童養護施設福音寮	１８歳で退所後のアフターケア　必要な支援について	14:20
4	新玉　枝理	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	母子分離が難しい新入園児A君への関わり	14:50
5	沖野　広香	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科４年	「子どもの虐待防止推進フォーラムせたがや2015」に向けた取り組み	15:15
6	田島　和美	社会福祉法人 せたがや樫の木会　下馬福祉工房	Aさんの心情理解と出勤への応援	15:40

第2分科会　多世代による文化交流/一人ひとりに向き合った実践　（3505教室）

進行役・助言者 伊藤　秀一（駒澤大学文学部社会学科教授）
加藤　美枝（世田谷区老人問題研究会理事）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	甲斐　実	社会福祉法人 せたがや樫の木会　下馬福祉工房	自閉症の行動特徴を受け止める	13:30
2	久保田　裕之 園原　一代	日本大学文理学部 NPO法人ハートウォーミング・ハウス	ホームシェアによる高齢者と若者の暮らしを支える取り組み	13:55
3	大沼　昌子 吉岡　慶子 中山　美智子 谷黒　洋子	ひこばえ広場 子育ていきいきサロン 世田谷保育園	シニア世代と幼児のつながりづくりの試み（その５） 保育園での実践経験を生かし地域に拓く活動へ	14:20
4	林田　淳史 金井　満里子	社会福祉法人友愛十字会 特別養護老人ホーム 砧ホーム	自立支援にみる家具調椅子の使用と歩行の成果 ～椅子or車椅子どっちがいい？～	14:50
5	藤村　征史	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 烏山地域社会福祉協議会事務所	住民活動と社協事業が協働した実践活動	15:15
6	岩田　明香里 田村　双葉 宮嶋　玲子	日本大学文理学部哲学科4年 教育学科4年 心理学科4年	日大サロン「さくら」の設立とその活動	15:40
7	中浜　崇之	世田谷デイハウス　イデア北烏山	色カルタで見えた本当のあなた	16:05

第3分科会　生きがいづくり・まちづくり/地域をつなぐネットワーク　（3503教室）

進行役・助言者 小池　高史（日本大学文理学部社会学科助手）
村田　幸子（福祉ジャーナリスト）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	金子　由美恵	優っくり村喜多見	認知症サポートSOS店　構築にむけて ～認知症カフェから始まった3年間の取り組み～	13:30
2	橋元　晶子 橋元　裕明 小谷　知 丸山　節子 安藤　秀彦 山本　恵理	砧地域ご近所フォーラム2016実行委員会	砧地域ご近所フォーラムのとりくみ ～ひろがってきた「顔の見える関係」～	13:55
3	檜山　睦	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬	デイ・ホームが育てる地域ボランティア	14:20
4	矢吹　千恵子 亀井　文男 鈴木　一夫	世田谷区老人問題研究会	「世老研」35周年記念式 ～35年間の歩みと今後の取り組み～	14:50
5	佐藤　章司 佐藤　彩子	世田谷区社会福祉事業団 上町あんしんすこやかセンター	男性介護者の会「男の介護を語る会」の活動報告	15:15
6	小俣　行史	株式会社やさしい手 おまかせ事業部 地域交流レストラン事業課	コーシャハイム千歳烏山、地域交流レストランでの取り組み	15:40

第4分科会　協働・連携/働く・社会に参加する　（3508教室）

進行役・助言者 森本　修三（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授）
今井　康明（株式会社すずらん代表取締役）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	晴山　和幸	株式会社サンケイビルウェルケア・ ウェルケアガーデン馬事公苑	生活の回復	13:30
2	徳永　宣行 南大路　直子 鳥居　佐智子 丸茂　典子	世田谷区介護サービスネットワーク	地域包括ケアの実現のために ～私たちができることを考える～	13:55
3	宮田　眞治 櫻井　宗一郎	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 自立生活支援課	世田谷区生活困窮者自立相談支援事業の 現状と今後の課題 ～モデル事業から本格実施へ～	14:20
4	山内　聡	社会福祉法人 世田谷ボランティア協会 福祉事業部	障害のある方が働くために必要なものは・・・？	14:50
5	和泉　拓 渡辺　三恵子	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	口から食べる機能の維持における専門機関との連携の効果報告	15:15
6	脇濱　由佳	下馬デンタルクリニック	お口周りの筋肉を鍛えて、嚥下力UP！	15:40

第5分科会　一人ひとりに向き合った実践　（3509教室）

進行役・助言者 後藤　広史（日本大学文理学部社会福祉学科准教授）
田邉　仁重（世田谷区社会福祉協議会権利擁護支援課長）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	長見　亮太	社会福祉法人 せたがや樫の木会　上町工房	Aさんとの関わりを通して支援者としての基本的 姿勢を振り返る	13:30
2	岩澤　辰洋	社会福祉法人 せたがや樫の木会　わくわく祖師谷	エピソードからAさんをアセスメントする	13:55
3	川名　あき	社会福祉法人 せたがや樫の木会　下馬福祉工房	エピソードを通して全体像をアセスメントする	14:20
4	深佐　律子 山崎　正春	優っくりデイサービス喜多見	対応困難ご利用者様へ立ち向かえ ～ご利用者様へ何が出来るかその一事例～	14:50
5	斉藤　由子	社会福祉法人 せたがや樫の木会　上町工房	心情に着目した捉え方	15:15
6	藤野　ひろみ	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	性の悩みを抱えている利用者への支援	15:40

第6分科会　認知症とともに豊かに生きる/一人ひとりに向き合った実践　（3510教室）

進行役・助言者 荻野　太司（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）
中原　ひとみ（特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	川田　麻衣 芦澤　優子	世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム上北沢	身だしなみプログラムでいきいきと	13:30
2	高柳　杏里 新谷　枝美子	優っくりグループホーム池尻	社会と繋がる ～認知症入居者と地域住民との関係作りの為の 取り組み～	13:55
3	岡崎　一也 松山　友香	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	主役になり自分らしくいる。 ”今”の気持ちを大切にする認知症ケアの実践	14:20
4	枝　　孝治 加藤　貞行	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	いらっしゃいませ！お子様たち！ ～世代間交流を活用した生きる力の支援～	14:50
5	掛野　祥子 中野　剛	特別養護老人ホーム 等々力の家	骨折ゼロに向けた原因分析に基づく取り組み	15:15
6	土田　悠	グループホームかたらい	慢性腎不全を抱えるAさんのグループホームの 生活について	15:40
7	岩渕　光代 武者　卓也 阿南　雄 酒巻　洋佑 小澤　誉志子	介護老人保健施設うなね杏霞苑	みんなで一緒にエイエイオー！ ～すべてがリハビリ～	16:05

第7分科会　最後までその人らしく生きる/その他の取り組み　（3506教室）

進行役・助言者 長谷川　幹（三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長）
橋本　睦子（特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ施設長）

	発表者	所属	テーマ	開始時間
1	武富　宏	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園	特養久我山園における暮らしの中での感染症予防	13:30
2	和田　拓也	社会福祉法人康和会 ろうけんくがやま	地域包括ケアシステム構築への取り組み	13:55
3	西田　知佳子	世田谷区民	在宅で看取ることのできなかった母	14:20
4	森田　雄二	株式会社やさしい手 千歳烏山定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所	定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービスにおける看取り事例	14:50
5	伊能　亮 山田　郁香	社会福祉法人 せたがや樫の木会用賀福祉作業所 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科３年	社会福祉実習受け入れ側・実習生側それぞれの立場から	15:15
6	泉谷　一美 水上　朽美 鬼塚　正徳	NPO法人せたがや移動ケア	移送の安全を考える研究会の活動紹介	15:40
7	齋藤　将司 石川　紀子	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課	高齢者・介護者への情報提供、健康管理の方法について	16:05

ワークショップ

テーマ：『何が必要？未来のせたがや福祉のシティ』

運　営　　介護ラボしゅう　代表　中浜崇之
　　　　　斎藤博子、奥平幹也、加藤信一、久保恭子
助言者　　辻本　きく夫

「世田谷で住み続けたい」「もっと生活しやすい環境ってどんな状態だろうか」
多様な生活スタイルがある中で、誰にとっても生活しやすい環境を、一緒に創造していきませんか。未来の生活を創っていくのは私たち一人ひとりです。
あなたの思いや経験を世田谷の未来につなげてみませんか。

◆ 目的
誰もが住み続けられる街には、何が必要か、福祉を軸に考えていきます。
住民の視点、福祉サービス従事者など、様々な視点から未来の世田谷の姿を共に創造していきます。

◆ ワークショップ手法
自由活発な交流ができるように、ワールドカフェのエッセンスを使用します。

◆ 参加対象者
福祉職、医療職、学生、その他どなたでも関心のある方はご参加いただけます。
（事前申込制：定員２０名）

パネル型発表　第１会場

助言者
諏訪　徹（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
植田　祐二（世田谷高次脳機能障害連絡協議会）

	発表者	所属	テーマ
1	梶原　裕美 三武　絢子 小林　佳子	社会福祉法人奉優会　等々力の家 訪問介護ステーション/ 配食サービス	配食の目指すもの ～訪問介護だから見えるもの、 できること～
2	斉藤　裕章 大野　克彦	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	ご利用者Ａ様のＡＤＬ向上
3	吉村　香子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	スーパーマーケットと協力し行ったカルシウム摂取量増加普及活動について
4	峰村　貴央	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	インターナショナルスクールに通う幼児の日本食を通した食育活動について
5	枡鏡　今日子 小滝　清 坂本　俊太 中山　萌子 橘田　真美 加藤　世名	ＮＰＯ法人国際ボランティア学生協会（ＩＶＵＳＡ）	災害に強いまちづくり
6	渡部　真純	社会福祉法人奉優会 奉優デイサービス池尻	地域ささえ愛デイサービス 地域とのかかわり合い

配食の目指すもの
～訪問介護だから見えるもの、できること～

社会福祉法人奉優会　等々力の家　訪問介護ステーション/配食サービス
梶原　裕美、三武　絢子、小林　佳子

目的：
・高齢者の健康保持及び自立生活の助長を促し、それによって在宅高齢者の福祉増進を図ることを目的としています。

実践内容：訪問介護と配食の連携
・訪問介護と連携し、配達時に配食内容の事を含め日々の生活を把握し、日常的にモニタリングを行っています。
（・M様の体調不良から対応まで）

結果：
・M様の体調不良に気づき、訪問介護職員と配食サービス職員が連携し対応を行いました。結果、M様の重症化を防ぎ、在宅生活の維持に繋げることができました。

考察：
・配食サービスからご利用者様の生活維持への支援の必要性、日々生活状態の適切な把握が必要であると気づきました。「ご利用者様を取り巻く関係機関との連携強化」「地域生活支援」が必要であり、お弁当を配達する際に１番大切なことは、「まずは、利用者の変化に気づくこと」と考えました。

課題：
・ご利用者様の生活実態の把握とともに、適切に高齢期にある方々の生活保障が実現できるよう、関係機関と連携強化が必要であると思います。
配食でのご利用者様との関わりは短時間ですが、訪問介護だからできること、見えることを強みとしてこれからもサービス提供を行ってまいります。

＜質疑応答＞
Ｑ：安否確認は区の配食事業共通の目的ですか。
Ａ：そうです。

Ｑ：利用者に何かあった時、担当ケアマネジャーや緊急連絡先等の情報は区から提供されていますか。
Ａ：あまりありません。何かあった時にはあんしんすこやかセンターと連携して対応しています。

＜助言者コメント＞
・配食を通じて、丁寧な見守り、安否確認をしていることがわかりました。

ご利用者Ａ様のＡＤＬ向上

発表者　社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢　斉藤　裕章、大野　克彦
共同研究者　社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢　植木　恭子、高橋　京子
堀内　葉子、古川　由香子

≪概要≫
昨年夏より当所をご利用されているＡ様のＡＤＬが著しく回復しているので、当所で行なっている実践内容、他の施設で行なっているリハビリ、更にはご本人やご家族へのインタビューをもとに事例研究として発表します。

≪目的≫
「安定した歩行ができる」「また家族と一緒に旅行に行けるようになる」
「いつまでも健康で自宅に暮らす」

≪経過≫
Ａ様は昨年２月頃、化膿性椎間板炎、肺炎、髄膜炎を発症。当初は重篤な記憶障害や意識障害が見られ、当所に通所される初期段階において移動は車いすを使用。自宅の階段を昇降する際にはＪマックスを導入していた。
以前はゴルフや麻雀、国内外への旅行、また週２回は美容院でセットをする等非常に社交的かつ能動的に動かれていた方であったが、病気により性格もふさぎ込みがちになっていた。
生活面でも以前は独居で何でもこなしていたが、長女が泊まり込みで介助を行っていた。
その後、様々なリハビリ、本人の意欲、当所の介護内容により、ＡＤＬが劇的に向上。

≪実践内容≫
通所介護週２回（マシントレーニング週１回）
通所リハビリ２回
訪問介護週４回（現在は利用せず）

≪課題≫
当所では本人の意欲を尊重するが、まだ身体を過信して転倒するリスクがあるため歩行に注意。また他者との関わりを構築していくため、お好きである麻雀や様々なプログラムを今後も提供していきます。

＜質疑応答＞

Ｑ：利用される他の方のデータはありますか。

Ａ：利用者の全てのデータはあります。今回の事例は回復が顕著であったため、報告させていただきました。

Ｑ：精神状態の変化と機能回復の関連を表記すると良かったと思います。

Ａ：今後の参考にいたします。

Ｑ：マシンを使ってのパワーリハビリの回数などは、どのように増やすのですか。

Ａ：本人の様子を元に、看護師やセラピスト、介助員でカンファレンスしながら決定しています。

Ｑ：何故このように回復されたと思いますか。

Ａ：本人のご意欲が強かったからだと思います。

＜助言者コメント＞

・いいタイミングで本人の気持ちを前向きにするリハビリプログラムが提供できたのではないでしょうか。目標に据えた“たび（旅）”が効果を後押ししたと思います。

㋩第１会場－３

スーパーマーケットと協力し行ったカルシウム摂取量増加普及活動について

発表者　東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科　吉村　香子
共同研究者　東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科　峰村　貴央
橋本　茉依、原　安奈、平松　飛鳥
真木　彩那、山尾　麻耶、鈴木　礼子

＜目的＞健康診断上、明らかな問題がなくても女性はカルシウムの摂取量に気を付ける必要がある。しかし、ほとんどの年代の女性のカルシウム摂取量は500mg（平成25年国民健康・栄養調査より）を下回っており、推定平均必要量550mg（18～60歳代女性・食事摂取基準2015年版）を満たしていないのが現状である。

また、乳製品にカルシウムが多く含まれていることは一般に広く知られており、年齢にかかわらず多くの人の主なカルシウム摂取源は乳製品であるといえよう。

そこで、私達は、スーパーマーケットでのカルシウムを意識した買い物を通じカルシウム摂取量の増加を促すことを目的としカルシウム摂取量増加普及活動を実施した。

＜内容・方法＞本学近隣のスーパーマーケットの協力のもと、平成27年6月15日～21日の7日間にわたり買い物客へ向けカルシウムについての栄養･健康情報を提供するためのリーフレットを作成し乳製品コーナーに設置した。

リーフレット作成時の工夫として、実際に店舗へ足を運び、売り場状況や客層を事前調査し、リーフレットの大きさや内容を決定した。数あるカルシウム含有量の多い食品の中から、効果的にカルシウムの摂取を促すために、一般的にカルシウム摂取に寄与度の高い「乳・乳製品」を選択し、リーフレットに「乳・乳製品」のカルシウム含有量やレシピを記載した。また、レシピは幅広い年代にもわかりやすい内容とした。

評価として、スーパーマーケットに設置前1週間と設置期間の乳製品売上情報を開示していただき、「リーフレットの配布数」と「乳製品の売り上げ」との関連について調査・検討した。

＜結果＞リーフレットは50枚設置したうち19枚を配布することができた。しかし、設置前1週間が特売週間だったこともあり、「リーフレット配布数」と「乳製品の売り上げ」との関連については、統計的な優位な関連は認められなかった。

＜考察＞スーパーマーケットへ買い物に来る客層は多岐にわたるため、幅広い年代をターゲットとすることが出来る方法である反面、幅広い年代に受け入れられるリーフレット内容についての教育媒体を考案する必要がある。

反省として、予想よりもリーフレット枚数の配布数が多くならなかった具体的な理由を考え、リーフレット前で足を止めてもらえる工夫を重ねる必要がある。栄養教育の実践活動として、今後も本学と地域食品店との連携を通して、世田谷地域の栄養改善につながる活動を続けていきたい。

＜質疑応答＞

Ｑ：リーフレットを受け取る数が少なかった原因は何ですか。

Ａ：大型スーパーであり、リーフレットの種類も多く置いてありました。牛乳のパッケージもカラフルでリーフレットの存在が目立たなかったことが考えられます。

Ｑ：商品にくっつける方法がいいのではないでしょうか。買い物中は持つものに限界があり、商品とリーフレットは一緒に取らないのではないでしょうか。

Ａ：スーパーと相談します。ただ、リーフレットが売り上げに貢献していないと思われるのでどこまで協力していただけるかは不明です。

Ｑ：次にどうつなげていくのかが大切ではないですか。

Ａ：後輩達が研究しやすくなるように情報を残していきたいと思います。

＜助言者コメント＞

・企業とタイアップして生活上必要な情報を伝えていく手法を考える点は素晴らしかったと思います。介護・医療・災害などのジャンルでも活用できるのではないかと思います。

㋩第１会場－４

インターナショナルスクールに通う幼児の日本食を通した食育活動について

発表者　東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科　峰村　貴央
共同研究者　東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科　原　奈都美、藤井　萌
八重樫　舞、山本　ちえり、吉村　香子、鈴木　礼子

【背景】

食育は、食に関わる様々な分野や地域が連携・協力を図りながら推進され、日本各地で盛んに計画し実施されている。その実施方法は様々であり、その地域性や対象年齢、使用媒体など、それぞれの特性を活かしながら取り組むことで、効果的な食育活動が期待できる。

平成 25 年には、日本人の伝統的な食文化である日本食がユネスコ無形文化遺産に登録された。日本食は海外から健康的で季節感や美しさ、素材を生かした繊細な味付けが評価されている。

そこで、本学では 3 年生前期に開講される公衆栄養学実習の授業の一環として、都内のインターナショナルスクールに通う幼児を対象に、日本の食文化に触れてもらうために食育活動を実施した。その活動内容を報告する。

【目的及び実施内容】

実施日は平成 27 年 7 月 2 日とし、インターナショナルスクールに通う幼児 7 名を対象に、日本食に興味関心をもち、食に関わる体験をすることを目的とし、幼児でも安全で簡単に作ることができる「おはぎ作り体験」を実施した。

和食についての基本的説明をした後、日本語・英語で作成したおはぎレシピを用い、おはぎ作り体験を実施した。すりこぎを使用し、もち米を搗くところからおはぎの形成まで体験をさせた。通訳はインターナショナルスクールの職員の方にお願いをした。本活動は、インターナショナルスクールの承諾を得て実施をした。

【実施報告】

実施前の聞き取りでは、幼児の大半はおはぎという言葉を知っていたが、調理工程や使用する食材までは知らないとうことがわかった。調理や食材についての認知が低い背景には、食経験の少なさが関係していると推察する。食経験を積むためには、小さい頃から農業体験やお料理教室等、多くの食材に触れさせることが重要だと考える。また、幼児期は好奇心旺盛な時期である。実施方法では、教えて聞かせる一方的な伝達ではなく、手を動かす体験学習を取り入れることで、より一層、興味・関心を深められると感じた。

【課題】

実施対象者が未就学児であったため、実施評価ができなかった。親子食育教室のように未就学児の親も参加した形式で実施することにより、実施前後の食育への意識調査を親子で行うことができ、実施の効果が図れるのではないかと考える。

これからも、小さな活動を継続的に実施し、地域の食育の推進に取組んでいく。

＜質疑応答＞

Ｑ：なぜインターナショナルスクールで行なったのですか。

Ａ：食育について、英語圏の雰囲気の中で子どもたちがどう感じるかを見てみたかったからです。食育をメインとした研究です。

Ｑ：継続した研究はできますか。

Ａ：授業として「食育」はあり続けますが、このテーマが今後引き継がれていくかはわかりません。

＜助言者コメント＞

・いろいろなアクセスができる研究であるため、後輩に引き継いでいただきたいと思います。

災害に強いまちづくり

NPO法人国際ボランティア学生協会(IVUSA)　桝鏡　今日子、小滝　清、坂本　俊太
中山　萌子、橘田　真美、加藤　世名

現在、日本は数多くの災害に見舞われている。世田谷区では、特に水害や地震災害への対策が重要になるが、ここでは地震災害の防災対策についての調査をした。

世田谷区は高齢者の割合や木造住宅の割合、交通インフラの問題などの災害時における諸問題を抱えているというのが現状である。その中から、高齢者の割合、避難場所の認知度、さらに日頃からどのような備えをしているのかという3つの事柄に関して、日本大学商学部に隣接する大蔵住宅の居住者302人を対象としたアンケート調査を実施した。

- 調査期間：2015年10月8日～10月27日
- 調査対象者：大蔵団地の住民302人
- 調査方法：訪問面接法

結果として、高齢者割合は高く避難場所の認知、日頃の備えともに問題であることが明確になった。これらから以下の対策を考えた。

① 高齢者が多いため、高齢者が見やすい避難場所の看板を団地内に設置する。
② 個々の災害用備蓄を十分にするために、備蓄するべきリストを作成し、回覧板で周知する。
③ 全居住者に、正しい避難場所と避難の手順を認知してもらうため、避難訓練を実施する。

上記のように、災害時における問題の対策は重要であるが、最も重要なことは自分の身を自分で守るということである。

そのためには、災害に対して危機感を持ち、個々の防災意識を高めることが町全体の防災意識の向上につながり、災害に強い町づくりが可能になると考えられる。

＜質疑応答＞

Q：調査をするために自治会等からの協力はどうでしたか。

A：協力していただきました。周知をしていただいたので、調査がスムーズにできました。以前からこの団地と商学部は協力関係を長年築いてきました。

Q：回答率はどのくらいですか。

A：１２００世帯に配布し、３０２世帯に回答していただけました。

＜助言者コメント＞

・精力的なアンケートです。大学生が地域の重要な資源となっていることがよくわかりました。

地域ささえ愛デイサービス　地域とのかかわり合い

発表者　社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻　渡部　真純
共同研究者　社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻
鈴木　君枝、本間　拓義、尾形　静香

奉優デイサービスが開所してまだ数年。地域に根差した施設を目標にしております。地域の一員としての意識を持ち、社会資源と協力・交流を図ること、地域貢献活動に積極的に取り組み、「地域と共に・地域ささえあい」を目標に施設運営をしております。地域、世代間交流が出来る場所として身近な存在でありたいと考えています。

職員で話し合い、どのようにしたら地域に根差し、貢献できるかを考え、デイサービスおよびゆっくり村池尻を知って頂くことが出来るか考え様々な試みをしました。デイサービスとして介護者教室、手工芸教室の開催。ゆっくり村池尻としてカラオケ喫茶や納涼祭への呼びかけをしていきました。少しずつですが地域の方が足を運んでくださいました。

毎週地域にひきうりの八百屋さんがいらっしゃいます。毎回たくさんの地域の方が買い物に来ていらっしゃいます。お話を伺ったところ。かれこれ 40 年以上、来ているとのことでした。新鮮でおいしいものを皆さんに届けたい、日々何十年も積み重ねた結果現在の姿があると感じました。お手伝いをされている方がお二人いらっしゃいますがお二人とも地域の方でお付き合いも 40 年とのことでした。地域に根づき、ささえ合う姿と感じました。

地域の方に喜んで足を運んでいただける催しは何かと考え、初の試みとしてバザーの開催を職員で考えました。八百屋さんと地域のお花屋さんの協力、衣類や小物は近隣の幼稚園の保護者の方の協力で衣類、小物を含め、野菜と果物とお花を用意して下さいました。

バザー当日開店前から地域の方が集まり、約 70 名の方がいらっしゃいました。
お子様連れの方、ヘルパーさんと一緒に来られた方、ご近所同士で声をかけあって下さった方、通りがかりに立ち寄った方、様々な方に来ていただけました。色々な事をやって欲しい、高齢者との交流を持ちたい、楽しませていただきありがとうございました。等の感想を頂きました。

世田谷区地域計画においても「高齢者や要介護者の支援には地域の支えあいが、欠かせません。人々が助け合い、多様なコミュニティーが相互に連携する、まちづくりを進めます」と掲げられています。

今後も私たちが地域社会の資源の１つとして「そばにあり安心できる場所」地域の方と協働し共助を大切にした運営をすすめて行きたいと考えております。

＜助言者コメント＞

・着実に地域貢献活動を積み重ねていて、地に足のついた取り組みだと思います。職員のモチベーションアップにもつながっていることは大きな意義と感じました。

パネル型発表　第１会場　助言者

諏訪　徹（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

植田　祐二（世田谷高次脳機能障害連絡協議会）

パネル型発表　第２会場

助言者
牧野　まゆみ（日本放送協会学園高等学校教諭）
市川　裕太（グループホームかたらいホーム長）
瓜生　律子（世田谷区高齢福祉部高齢福祉課長）

	発表者	所属	テーマ
1	高山　都規子	かたよせ会	在宅介護家族会の近況
2	梶川　芙美子 原　和美	深沢あんしんすこやかセンター	地域包括ケアシステム構築に向けた 深沢地区の課題抽出・分析
3	林　秀幸	等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」 ２７年度の取組み
4	中山　進	世田谷区民	五感と右脳の目覚め ～共同研究のお願い～
5	明石　眞弓 松田　妙子	特定非営利活動法人 せたがや子育てネット	区民版子ども・子育て会議
6	鈴木　礼子	東京医療保健大学医療保健学部 医療栄養学科	野菜摂取量の増加・和食の普及を 目指した公衆栄養活動報告
7	橋本　茉依 牧田　季憲 安藤　伸也	東京医療保健大学 駒澤大学 日本大学	せたがや福祉区民学会学生交流会 「せたがやLink！」 １年間の活動と地域調査

在宅介護家族会の近況

かたよせ会　高山　都規子

○目　　的

平成６年（１９９４年）主人が脳梗塞で倒れ、脊椎圧迫骨折のため寝たきりとなり、私の介護が始まる。３年後、平成９年（１９９７年）に在宅介護家族会を介護真最中の方１２名で発足し今年で１９年になる。ある日突然やってくる介護に関する情報や知識など交換し合い、介護者の精神的、肉体的負担を軽減することを目的とする。

○実績内容

毎月第３木曜日、午後１２時３０分～午後４時迄［上北沢ふれあいの家］で活動している。現在会員数は３２名。看取られた方が多くなり介護経験など現役の方の相談相手になっている。また癒しとして、音楽コンサート、落語、食事会、ファッションショー、手工芸など行い、リフレッシュしている。また、保健センターから運動指導員がみえ、健康体操をしているが、指導員の人数が少ないため、毎月来ていただけない。そこで美空ひばりの［愛燦燦、川の流れのように、お祭りマンボ］などの曲のＤＶＤで楽しく体操をしている。また、世田谷区のやっている［まるごと介護予防講座６回シリーズ］を受講し転倒予防体操や認知症にならないよう、ためになるお話を会員の皆様にお伝えしている。

○結　　果

転ばぬさきの杖的に、介護の事、健康の事など情報を集め、年齢の若い方達もいつか介護する身になった時、役に立つとよろこばれている。

○考　　察

世田谷区で一番古い家族会で色々活動しているが、２５年後には５人に１人は認知症患者になるとの情報を得て私達の活動は予防に役立っていると思う。

○課　　題

世田谷区で介護者家族会のリーフレットを作成しているが、ＰＲが足りない。あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）、医師、看護師、リハビリ、ＰＴ、ＳＴ、ケアマネジャーなど連携がうまくいき、介護者の負担が少なくなることを望む。在宅介護で看取られた方々が地域の人々とお互いに支え合い健康で明るい生活が出来、私がモットーとしている［介護しない・されない］の目的が達成され［今日行くところがある・今日用がある］の生活をしていれば、認知症にはならないですむと思う。

＜質疑応答＞
Q：補助が出るということですが、毎月サロンを実施するのはどうでしたか。
A：大変でした。

＜意見・感想＞
- 介護する人の会が変わってきました。高齢者のための会となってとても良いと思います。
- 在宅介護をしている人は、ケアマネジャー、あんしんすこやかセンターに頼んでサービス利用ができると良いです。

＜助言者コメント＞
- 「きょうよう（今日用）、きょういく（今日行く）」を大切にしていただきたいです。出て行かれないということは課題で、少しの時間でもサービス利用につながるといいと思います。

地域包括ケアシステム構築に向けた深沢地区の課題抽出・分析

深沢あんしんすこやかセンター　梶川　芙美子、原　和美

【概要】

地区の多職種に対して、深沢地区で課題と感じていることや連携が必要と思われることなどのアンケート調査を実施し地区課題の抽出・分析、今後の地域包括ケアシステム構築に向けた具体的な戦略を探った。

【背景】

深沢あんしんすこやかセンターでは、平成 24～26 年度ケアマネ連携会を開催してきた。平成 27 年度は対象者を拡大し深沢地域連携会として開催している。地域包括ケアシステム構築に向け、平成 28 年度以降は地区版・地域ケア会議を開催していきたい。しかし、具体的なテーマの目星がついておらず、どのような会議が求められているか不明瞭であった。

【実践内容】

アンケート調査を実施。
対象者：居宅支援事業所、小規模多機能型居宅介護事業所、訪問介護、通所介護、訪問看護、福祉用具、高齢者施設、シルバー住宅（生活相談員）、在宅医療機関、薬局、民生委員、まちづくりセンター、社会福祉協議会、深沢あんしんすこやかセンター
＜アンケートの目的＞
①深沢地区の高齢者が住み慣れた在宅での生活を継続できなくなる要因を明らかにし、深沢地区課題の目星を付ける。
②深沢地区課題を多職種間や地区の関係者間で共有し解消していくために深沢包括が取り組むべきことを明らかにする。

【結果・考察】

①回答数が多い項目が判明。深沢地区の高齢者が住み慣れた在宅での生活を継続できなくなる要因を明らかにし、深沢地区課題の目星を付けた。
②解決のベースとなる『連携』が取れていない実態が明確になった。
⇒視点や立場の違いを相互理解するため、医療連携、多職種間連携、地域支援者との連携を深沢あんしんすこやかセンターがバックアップする必要がある。

【今後の取組み】

１、調査･･･今回実施。
２、企画･･･①医療・介護連携会（12/15）②ケアマネジャーの会
　　　　　③地域支援者との連携
３、実施･･･①②3 ヶ月に１回　開催予定。
４、評価･･･1 年後にアンケート再実施。支援者の不安が解消されているか評価する。

＜質疑応答＞

Ｑ：マンションの多いところはどのように関わっていくのか、ということが課題ではないでしょうか。実際どうしていますか。

Ａ：定期的にマンション内のシニアサロン活動に顔を出すことで、深沢あんしんすこやかセンターの存在と支援・活動内容をＰＲし連携を図っています。

Ｑ：町内会に加入する人が少なくなっています。深沢はどうでしょうか。

Ａ：課題として挙がっています。

Ｑ：来所者は高齢者が多いと思いますが、どのような内容ですか。

Ａ：介護保険に関することが多いです。介護予防についての相談もあります。

＜意見・感想＞

・アンケートを他の地域にも発信していただければ共有できます。地域の課題もその中でまた見えてくると思います。

＜助言者コメント＞

・在宅生活が継続できなくなる理由としては、手段的日常生活（服薬、買い物、ゴミ出し）、生活動作（入浴、排せつ）、介護者、本人、環境、経済的、医療的なことなどがあります。支援者間の連携強化が必要です。

歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」２７年度の取り組み

発表者　等々力の家デイホーム　林　秀幸
共同研究者　等々力の家デイホーム　梅原　朋美、苅谷　里美

《１．研究前の状況と課題　》

平成２１年３月に歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」を立ち上げて７年目。
登録数約８０名、一日数メートル歩くことを目指す方も、２キロを目標に歩いている方もいれば、距離ではなく歩き方がテーマの方もいらっしゃいます。登録者一人一人にとって、歩行訓練が在宅生活にどのように役立っているのか・・チームを作って取組み、「在宅生活サポートデイ」における歩行プログラムの可能性を考えました。

《２．研究の目標と期待する成果・目的　》

27 年度の試みとして下記のテーマに添った訓練により在宅生活が継続できることを成果と仮定しました。

①生活基盤サービス
②生活リハビリ
③多彩なプログラム
④ご家族支援
⑤地域支援

《３．具体的な取り組みの内容　》

★対象者：歩行訓練目的別テーマより研究対象者として選定。
★取り組みの手順：　・目的の設定　・訓練実施と記録
　　　　　　　　　　・ご家族ヒアリング、アンケートによる生活状況把握
★取り組み時間や期間：一回約 20～30 分、週 1 回～週 4 回
★取り組んだ職員数や構成
　訓練は全職員（介護職 15 人　看護師 1 人　理学療法士 2 人）にて実施
　効果検証はチームにて実施（チーム員：生活相談員 2、介護職 2、理学療法士 2）
★活動の成果を出すポイントになった点
　・歩行訓練継続の意欲向上施策
　　遊歩カード　　定期的な表彰式実施　　ホームページ活用

《４．取り組みの結果と考察　》

・事例１：引越し後歩行する機会が減った利用者様に対して歩行訓練の場を提供
　⇒足の浮腫みが軽減した。
・事例２：あえて不安定な場を作ったうえでの歩行訓練。
　⇒歩行状態の安定。
・事例３：生活動作の中での歩行訓練の実施、PT との関わり。
　⇒１人で出来なかったお買い物ができるようになった。

《５．まとめ、結論　》

この取り組みにて活用した歩行訓練のテーマは、研究対象者においては概ね達成したと考えます。
今後この考え方を全遊歩倶楽部登録ご利用者に展開し、事業所として在宅生活サポートデイという大きな目標に向かって取組んでまいります。

＜質疑応答＞
Ｑ：後方重心になりやすくなるのを軽減し、現在はどのような状態ですか。
Ａ：自立歩行されています。

Ｑ：５０メートルの廊下の幅はどのくらいですか。
Ａ：５メートルくらいです。

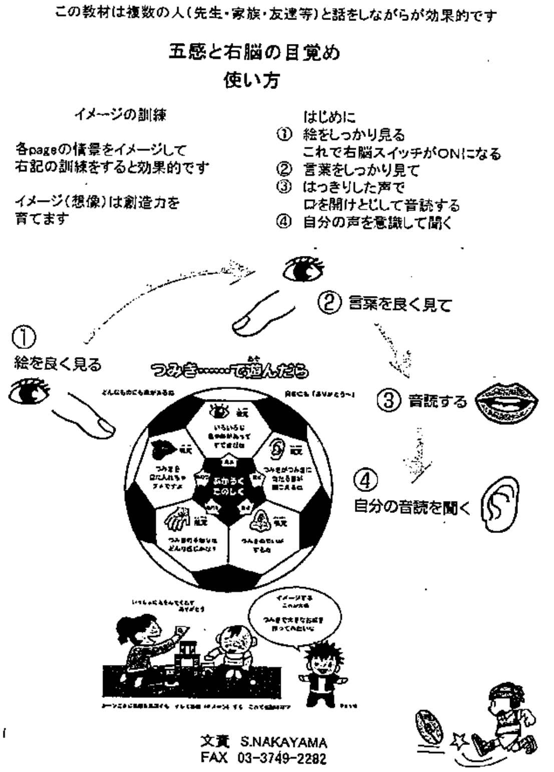
Ｑ：参加されている人の状態はどうですか。
Ａ：自立が７０％、見守りが３０％です。

＜助言者コメント＞
・転倒は防げないことはありますが、安全だけでなく訓練に力を入れているところは大切だと思います。本人の気持ちが大切で、意欲が上がったり人間関係にも影響します。今後はこうした取り組みをとおして、参加者が社会的な活動への参加につながっていくかなどについても検証して欲しいと思います。

五感と右脳の目覚め
～共同研究のお願い～

世田谷区民　中山　進

独自で考案した（五感と右脳の目覚め）は、五感と脳を訓練する教材です。
（事例当日掲示）
内容は五感を意識して使うことで記憶や思考を高めることを目的としたものです。
現在は試行段階です。
ご興味のある方には資料（教材）を提供します。


この教材は複数の人（先生・家族・友達等）と話をしながらが効果的です

五感と右脳の目覚め
使い方

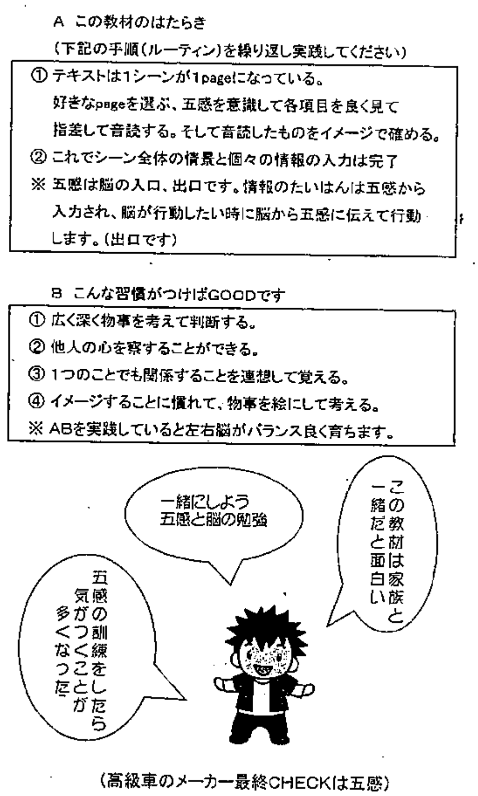
イメージの訓練

各pageの情景をイメージして
右記の訓練をすると効果的です

イメージ（想像）は創造力を
育てます

はじめに
① 絵をしっかり見る
これで右脳スイッチがONになる
② 言葉をしっかり見て
③ はっきりした声で
口を開けとじして音読する
④ 自分の声を意識して聞く

文責　S.NAKAYAMA
FAX　03-3749-2282


A　この教材のはたらき
（下記の手順（ルーティン）を繰り返し実践してください）

① テキストは1シーンが1pageになっている。
好きなpageを選ぶ、五感を意識して各項目を良く見て
指差して音読する。そして音読したものをイメージで確める。
② これでシーン全体の情景と個々の情報の入力は完了
※ 五感は脳の入口、出口です。情報のたいはんは五感から
入力され、脳が行動したい時に脳から五感に伝えて行動
します。（出口です）

B　こんな習慣がつけばGOODです

① 広く深く物事を考えて判断する。
② 他人の心を察することができる。
③ 1つのことでも関係することを連想して覚える。
④ イメージすることに慣れて、物事を絵にして考える。
※ ABを実践していると左右脳がバランス良く育ちます。

（高級車のメーカー最終CHECKは五感）

＜意見・感想＞

・脳の研究でしたが、脳からの五感の目（視覚）の大切さが大変良く理解できました。

・３歳の孫がいますが、孫に活用したいと思います。

＜助言者コメント＞

・興味あるご研究でした。知的障害児にも“イメージトレーニング”を導入されているということでしたが、今後は導入後の効果（どのようなものがあったか等）をアピールすると良いと思います。

・児童から認知症の方々まで幅広く活用できる教材でした。

区民版子ども・子育て会議

特定非営利活動法人せたがや子育てネット　明石　眞弓、松田　妙子

■始めたきっかけは？

１）せたがや子育てネットでは、これまでに「地域別懇談会」を各地で開催してきたので、子ども計画第二期策定となる 2015 年に向けて支援者の会議を開催する必要があると感じていた

２）世田谷区内に内閣府の子ども・子育て会議「子ども・子育て新制度」を広く周知する必要があると思った。

３）世田谷区の子ども子育て会議に NPO の代表が参加していたため、地域の活動団体からの意見聴収の必要があると感じていた。

４）計画づくりは作って終わりではなく、プロセスに多くの区民が参加し、区民も地域の課題を一緒に取り組みたいと考えた。

■毎回の進め方や参加者、運営方法は？

毎回２時間半程度の長さで、①問題提起➡②グループワーク➡③全体発表で進めた。参加者は、メールや Facebook で呼びかけた、区内で活動している子育て支援者が　区の職員も含め、毎回 30 名ほど集まり延べ約 300 人。運営に関してはせたがや子育てネットが自己資金で運営をはじめた。また、共催の世田谷区が場所の提供を行った。（第 9 回は内閣府の委託、第 10 回は世田谷区の委託、11 月からは東京都子育て応援ファンドモデル事業として助成を受けた。）

■どんな成果が出たのか？

１．参加の子育て団体の人の中から「ファシリテーター」を養成し、その後の運営の協力者となり、議論全体を見渡せるような意識を持った人が増えた。

２．世田谷区の「子ども・子育て応援都市宣言」に区民の意見が反映され、継続的に会議に参加し、意見を出し合うモチベーションの向上につながった。

３．会議の中でお互いが持っている情報を出し合う中で、地域資源の可視化と共有化ができ、行政の担当者も区民と一緒になって信頼関係を作り上げてきた。

■開催記録

第１回　子育て支援の新しいかたち~行政にできること、NPO・地域にできること~」

第２回　子育て支援の新しいかたち~行政にできること、NPO・地域にできること~」

第３回　身近な場所で親子の支援をしていく仕組みづくり

第４回　子どもの生きる力の育み~外遊びについて語ろう~

第５回　子育て家庭を支える基盤の整備と質の向上~世田谷の保育を考えよう！

第６回　切れ目のない支援~若者編~

第７回　子ども・子育て支援制度ってなに？

第８回　みんなで作ってみよう！世田谷の子ども・子育て資源マップづくり

第９回　「子ども・子育て応援都市宣言」ワークショップ

第 10 回　地域資源マップ作り Part２

＜質疑応答＞

Ｑ：集まる時間の設定は難しいのではないですか。

Ａ：子ども子育て支援に関わっている人たちが、仕事が終わった夜の時間帯に集まっています。当事者向けには日曜日の午前中などの開催にし、夜の部に参加される場合はパートナーにお子さんを見てもらったりして参加されています。

Ｑ：若者参加についていろいろと取り組まれているのでしょうか。

Ａ：区が開催するときはフォーラムという形態が多いので、地域側では、当事者が直接声を出せる場があると良いと思い、ワークショップ形式にするなど工夫しています。

＜意見・感想＞

・自らの育ち、親になる前からの取り組みが必要です。４人に１人は赤ちゃんのお世話をした経験がないまま親になり、子育てをしている状況です。

＜助言者コメント＞

・せたがや子ども・子育て楽（学）会が３月１２日に行われるので、多くの人に参加していただきたいと思います。

野菜摂取量の増加・和食の普及を目指した公衆栄養活動報告～

発表者　東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科　鈴木　礼子
共同研究者　東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科　平山　綾華、山崎　茜
ポピンズ　松丸　みずほ

【背景・目的】「健康寿命をのばしましょう。」をスローガンに、国民全体が人生の最後まで元気に健康で楽しく毎日が送れることを目標とした厚生労働省の国民運動に「スマートライフプロジェクト」がある。その柱の一つに「野菜摂取量の増加」があげられている。しかし、野菜摂取量は目標摂取量の 350g を満たしていないのが現状である。また近年は、栄養バランスに富む和食が、ユネスコ・無形世界文化遺産となったが、日本人の日常の食卓からは和食離れが進む傾向があるとの報告もある。

今回、私達は、異世代交流を目的とした食事会を催し、「野菜摂取量の増加」および「和食の普及」を目指した公衆栄養活動を実践した。

【実践内容】平成 26 年 12 月 13 日に、区内在住の成人男性で構成されている●○クラブの 32 名を対象とした。今回はクラブ 20 周年記念の食事会として実施した。大学生 3 名と教員 1 名で、玉川ボランティアビューローの厨房をお借りして、野菜摂取量の増加および和食の普及活動を実施した。地域の食環境づくり推進部会において保健所や区内大学等が連携して作成した「せたがや食育メニュー　vol.3」のパンフレットを用いて、主食：白米ごはん、主菜：松風焼き、副菜：里芋と厚揚げの醤油煮、小鉢：切干大根のはりはり酢の物、汁物：かぼちゃの団子汁、を作り提供し、食事会を開いた。食材の大根は、世田谷区大塚農園とＮＰＯ法人フード・風土のご協力のもと、私達自身で収穫した「大蔵大根」を活用して献立に取り入れ、食事会の際に地域食材として、ご紹介した。

【結果】本食事会において、対象者である地域クラブの方々から、栄養や和食についての質問があり、学生が具体的に質問内容の返答を行うなど、実り多いなごやかな会となった。また「せたがや食育メニュー」のパンフレットは参加者全員へ配付し、本年度の作成目的の一つである「和食の普及活動」を行った。

地域クラブの方から、後日御礼状をいただき、普段の食事や和食の大切さを見直すよい機会であったと感想をいただいた。

本学から参加した学生達にも、地域の皆様の栄養情報について具体的な質問を伺うことができ、今後の公衆栄養活動に大変参考になったとの感想があがった。

今回は、初めて使用する厨房での活動であったため、調理の際、備品使用について判断が難しく、時間がかかってしまったのが反省点であった。しかし、地域クラブの方達が、調理担当の学生達を優しく支援してくださり、学生達と地域の方の交流会という視点では、実りの多い食事交流会となった。公衆栄養の実践活動として、今後も本学と地域の方々との連携をつなげ、世田谷地域住民への栄養改善活動を実践的に行っていきたい。

【謝辞】玉川ボランティアビューロー、世田谷区大塚農園、ＮＰＯ法人フード・風土

＜質疑応答＞

Ｑ：健康寿命を長くするために「食」を通して身近にできることは何でしょうか。

Ａ：配付した世田谷メニューにワンポイントが書いてあります。例えば「よく噛む」、「バランスよく食べる」ことなどが挙げられます。また、今回の食材の大根は、世田谷野菜の農園の大蔵大根を使用しております。このように鮮度の高い地場野菜を食卓に取り入れていくことは、健康維持にも役立つといわれています。

＜意見・感想＞

・地域に根差した素晴らしい活動だと思います。

＜助言者コメント＞

・今後の活動にとても興味が持てる発表でした。特に、世田谷区の保健所・園・学校・大学の連携した作成献立、食育活動団体、農園、大学生が連携しており、また世代間交流もされており、素晴らしい活動です。活動した大学生に、とても有益な学びとなっています。

せたがや福祉区民学会　学生交流会「せたがやLink！」
１年間の活動と地域調査

東京医療保健大学　橋本　茉依
駒　澤　大　学　牧田　季憲
日　本　大　学　安藤　伸也

1.「せたがやLink!」について

せたがや福祉区民学会　学生交流会「せたがやLink!」は、平成25年10月に設立した。せたがや福祉区民学会会員大学である、日本大学文理学部・駒澤大学・東京医療保健大学・東京都市大学・日本体育大学・昭和女子大学の福祉に興味のある学生で構成されている。

日ごろは、福祉に関する勉強会や交流会、意見交換をするなど活動している。

２、今年度の活動について

今年度は、交流会を９回、運営委員会を８回、開催する予定である（10月現在)。

今年度は、地域調査をメインテーマに掲げ活動している。せたがや介護の日にも協力した。

第1回交流会　 6月25日　福祉について考える
第2回交流会　 9月29日　ユニバーサルデザイン勉強会
第3回交流会　10月 4日　地域調査in下北沢
第4回交流会　10月 5日　地域調査まとめ、地図作り
第5回交流会　10月 7日　地域調査まとめ、地図作り
第6回交流会　11月 9日　地図作り
第7回交流会　11月後半　大会準備、「ほっとスペース」準備
第8回交流会　 2月前半　来年度の体制、活動について考える
第9回交流会　 3月後半　1年間の振り返り、お花見、歓送会
「せたがや介護の日」　11月15日　アクセスマップ提供、ほっとカフェ運営

３、地域調査について

今年度は、昨年度から話題に上っていた地域調査を実行した。

下北沢は魅力的な街であり、休日には老若男女問わず多くの方々がいらっしゃる。しかし、下北沢は道幅が狭く、凹凸が激しい道もあって、ユニバーサルデザインの観点からは進んでいる地域ではない。福祉について、日ごろの学びを通してこうした問題点を直視し、誰もが生活しやすい街づくりを自分たちなりに考察してみた。

活動内容としては、事前に調査範囲を絞り込み、ユニバーサルデザインについて勉強したうえで、車いすや高齢者疑似体験による方法を用いて調査を行った。

＜質疑応答＞

Ｑ：学生交流会「せたがやLink！」の周知は、どのように工夫していますか。

Ａ：今年度は１回１回の活動で周知しましたが、次年度は年間で周知しようと思います。

Ｑ：活動のネットワーク作りはどのようにしていますか。

Ａ：今後は更に、福祉区民学会などでチラシを配ることなども考えています。

＜助言者コメント＞

・高齢者は喪失体験をされています。体力、痛み、疲労感などの内面にも触れてほしいです。車いすに乗ること、杖使用者の気持ち、高齢者本人の声を集めることに努めると、より良い調査ができると思います。

パネル型発表　第２会場　助言者

牧野　まゆみ（日本放送協会学園高等学校教諭）

市川　裕太（グループホームかたらいホーム長）

瓜生　律子（世田谷区高齢福祉部高齢福祉課長）

教室型発表　第１分科会

子どもとともに育ちあう/子ども、若者の輝く社会/一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者
横山　順一（日本体育大学体育学部健康学科准教授）
森田　規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

	発表者	所属	テーマ
1	坂下　幸生	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	A さんとその家族への支援の取組みから
2	今井　めぐみ 念佛　久子	世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう 訪問看護ステーション芦花	在宅療養児の家族交流会（レインボーの会）を実施して ～開催から５年間の実施状況の報告～
3	加納　里恵	児童養護施設福音寮	１８歳で退所後のアフターケア 必要な支援について
4	新玉　枝理	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	母子分離が難しい新入園児 A 君への関わり
5	沖野　広香	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科４年	「子どもの虐待防止推進フォーラム せたがや 2015」に向けた取り組み
6	田島　和美	社会福祉法人 せたがや樫の木会　下馬福祉工房	A さんの心情理解と出勤への応援

Ａさんとその家族への支援の取組みから

社会福祉法人嬉泉　おおらか学園　坂下　幸生

【はじめに】

Ａさんは、入園当初、園の生活の流れに自力で対応できにくく、見通しが持てず不安を感じて激しい自傷をすることがしばしば見られた。よりどころを求めるように、支援者に体をくっつけて生活することが続いた。本人が理解しやすいように一定した生活の流れを保ち、理解できている状況や好んでいる活動を選んで、自力で行動するように促していく中で、徐々にビーズ作業や紙千切りをして一人で過ごせる時間が増えていった。入園後 10 年、園でも家庭でも一人で安心安定して過ごせる時間が大半になり、そのことに本人もプライドを持てるようになってきていた。

【状態の悪化と支援内容】

しかし、数年前に父親が病気を患い、一日中家庭で過ごし不定期にリハビリに通うなど、家庭の生活環境が激変し、Ａさんにとって不安を感じることが増えていった。家庭でも学園でも人にくっついて過ごすことが増え、離れると激しく自傷するといった状態に陥ってしまった。

学園では、Ａさんが混乱している状態を共感的に理解し、見通しを持てていることに自発的・自律的に関われるように支える支援を根気強く行った。徐々に、作業や余暇時間なども一人で過ごせ、食事や散歩などは支援員から離れて自力でできるようになり、ある程度の状態の回復を得た。しかし、家庭では母親にくっついて過ごす状態から抜け出しにくく、困り果てた母親が父親にＡさんと過ごすように求めたことをきっかけに、昼夜を問わず父親にくっついて離れなくなった。離そうとすると激しく自傷し、Ａさんは徐々に食事や睡眠、排泄、入浴などの基本的な生活習慣も父親の動きに影響され、行うことが難しくなるといった状態が生じてしまった。

身体的にも精神的にも父親の負担は大きくなり、母親は父親からＡさんを引き取ろうとしたが、自傷や大声や座り込みなどで抵抗するＡさんに、母親自身も困惑し、気持ちが負けてしまうようであった。その経過の中、園で入浴（シャワー）支援を先行して行い、家庭においても「まずは入浴する」という流れを作ることを考えた。Ａさんにも家族にも同意を得て、通園バスでの送迎後に支援員が家庭での入浴支援を開始した。

【まとめ】

その後、入浴支援を媒介にして、家族とＡさんとの関係調整を中心にした家庭支援を継続して行った。支援員が誘導や見守りを行う中で、母親との間で徐々に入浴が出来るようになり、母親は覚悟を決めて父親とＡさんの関係に割って入り、父親から離れて生活することに現在チャレンジしている。

Ａさんに関わって自分なりに理解や支援のポイントを掴んできたが、母親とＡさんと関係調整をしていく中で感じた難しさを報告し、支援をする側の葛藤や成長を再考したい。

＜質疑応答＞

Ｑ：Ａさんのことを支援していく上で大変だったことを教えてください。

Ａ：なぜＡさんがお風呂に入れないのかをお母さんに伝えること、お母さんに理解してもらうことに苦労しました。入浴に関する土台（流れ）をスタッフと作っていきました。

Ｑ：施設外と施設のそれぞれで支援を行なう上で、スタッフ同士で連携していく過程を教えてください。

Ａ：最初はお母さんも、「家にはいいです」という感じだったが、まず園長とお母さんで話し合ってもらい、学園での入浴の支援をしてから、「この状態を維持していった方が良い」と、その流れでもう一度園長から母親に話をし、それをスタッフが共有しその後入浴支援をしていきました。

＜助言者コメント＞

・ご両親もご高齢であり、支援も難しかったと思いますが、それが新しい支援のあり方になったのだと思います。ありがとうございました。

在宅療養児の家族交流会（レインボーの会）を実施して
～開催から５年間の実施状況の報告～

世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションさぎそう　今井　めぐみ
訪問看護ステーション芦花　念佛　久子

医療依存度が高い重症児が増える中、世田谷区社会福祉事業団でも小児看護のニーズが高まり、ご利用者様は増えている。訪問看護のサービスは、家族も含めたケアが必要であり、小児の場合、親・家族への支援はかかせない。日々の訪問では児のケアをしながら母親へのサポートを行っており、これまで訪問して感じたことは、ケースによって療育に関する情報の入手が困難であり、困っている人も多くいることだった。ケースによってはネットワークが出来て、情報共有ができている方もいる。しかし、情報をどこでどのように得たらいいのかわからないケースは、家族会みたいな情報共有できる手段や場があれば、より多くの情報を得られ、さらに安心して快適な生活を過ごせるための支援になるのではと考え、当事業団の看護ステーションの所長会で検討を重ねた。

そして、平成 23 年 7 月に小児のご利用者家族を対象にアンケートをとり、平成 23 年 10 月に第 1 回目の家族交流会を実施した。これまで年 2 回の家族交流会を開催し、今年でちょうど 5 年目を迎えた。これまでの交流会の内容や家族の反響など、実施してきたこと、今後の課題について報告する。

【開催実施の目的】

よりよい在宅療養生活を送ることができるために親同士のネットワークの構築を図る

【実施内容】

療育について、困っている・悩んでいることなどの意見交換・情報交換

【今後の課題】

今後の家族交流会のあり方については、私たちはサポート役として支援し、親御さんが自主運営できるよう基盤を作る。世田谷区社会福祉事業団の利用者だけでなく、世田谷区で療養している小児の家族同士のネットワークの構築を図り、地域包括ケアシステムづくりにむけての活動ができる。

＜質疑応答＞

Ｑ：レインボーの会も回数を重ねているとのことですが、利用者さんからはどのような声がありますか。

Ａ：例えば電子装置を利用しているお子さんのお母様からは、災害時の心配の声があります。あとは、このような交流の会があって嬉しい、続けて欲しいというお声が多いです。

Ｑ：自主運営に向けてどのような移行を行っていますか。

Ａ：司会進行などをお母様たちにしていただき、そこからどんなものにしていきたいかを話し合っていってもらうような感じです。

＜意見・感想＞

・在宅で一生懸命お母様が重度の障がいのお子さんを育てることは大変なことであるので、このような在宅療養児を支えるシステムは、お母様たちの支えになっていると思います。

＜助言者コメント＞

・焦ると消滅していってしまうかもしれないので、自主運営は慎重にやって欲しいと思います。せっかく良い取り組みなので続けて欲しいです。

・利用者さんにとってとても嬉しい取り組みだと思います。ありがとうございました。

１８歳で退所後のアフターケア　必要な支援について

児童養護施設福音寮　加納　里恵

児童養護施設に入所している子どもたちは、18 歳での高校卒業時に退所を迎える。

本来なら頼れるはずの後ろ盾を持っていない彼らが高校卒業後に一人で生きていくことは、限りなく困難に近いことは想像するに易い。一般社会を見渡しても、家庭で育った子どもたちが社会に出て自立することが難しい状況もあるようだが、家族を頼れない彼らが強いられる現実はあまりにも厳しい。しかしながら、彼らも高校卒業後の進学や、明るい未来を夢見ている。

福音寮の子どもたちは、高校卒業後の進路を見据え、高校生活と施設生活を両立しながら、懸命にアルバイトをし退所後の費用を貯める。退所後の費用とは、自立して生活していく費用と、進学する際には学費が必要となる。現在、国や都からの助成では、進学１年目前期分の学費が賄える程度で、他団体から返済不要の奨学金を頂いたとしても、１年目の学費分に届かない。そのため、日本学生支援機構からの奨学金を受けながら、学業とアルバイトを必死に両立しなければならないのが現実である。

アルバイトを休めば、生活費が無くなり学費も払えず退学となってしまうため、彼らは常に失敗出来ないプレッシャーの中で頑張っている。そんな状況の中、周囲との差を目の当たりにする場面も多く、張りつめていた気持ちは徐々に意欲を失ってしまう。そして、希望に満ち溢れていた進路を夢半ばで諦める子、希望した進路すら嫌になってしまった子、対人関係が上手くいかず生活が立ち行かなくなってしまった子など、ここ数年、退所した児童の（就職・進学合わせて）約半数以上は進路変更をしているのが現状である。

進路変更する際に他者に相談することが出来ればよいのだが、相談することが難しい子どももいる。困った時に相談してもらえる信頼関係を職員は構築出来ているのか、施設職員として改めて真摯に向き合わなければならない。また、関係機関の存在も欠かせず、職員になかなか相談出来ない子どもたちにとって誰か頼れる大人がいることは大きな支えである。

しかしながら、彼らが背負っている負担を少しでも減らすことが出来れば、周囲に助けられながらも希望した進路を卒業まで全う出来る子も少なくないのではないか。それほどまでに、皆が金銭面により挫折をしているのだ。精神面で頼れる親族がいる場合は立ち上がれる力を持っているように感じるが、そうでない場合が多く、頼れる親族がいない状況は入所前から退所後も変わらない、彼らが背負わなければならないものの大きさを痛感する。

子ども達が自分らしく生きていけるよう職員は尽力しなければならないのは言うまでもないが、幼少期から家族と離れ、苦労してきた子どもたちに対し、社会が少しでも心を寄せて手を差し伸べてくれてもいいのではと思ってしまう。そのことが結果的に、社会的養護の連鎖を止めることになる。想像出来ないほどの経験をしてきた子どもたちはそれでも毎日笑顔で過ごしている。その強さに助けられる。子ども達の持っている可能性が環境によって決まってしまうことがない社会を願う。

＜質疑応答＞

Ｑ：高校進学率はどのくらいですか。また、地域の協力や金銭面での協力など具体的な例はありますか。

Ａ：高校はほとんどのお子さんが進学しています。就職したお子さんは現状では自立となります。地域の協力について、地域の方々に養護施設に関して理解してもらうことなどから始めることが大切なのではないかと思います。金銭面では、来年度に世田谷区が実施する住宅支援などがあります。

Ｑ：福音寮の入所状況を教えてください。

Ａ：定員５７名で、常に定員を満たしている状態です。本園３ホーム、グループホーム６ホームにそれぞれ生活しています。

Ｑ：グループホームの入所状況を教えてください。

Ａ：１ホーム６名定員で定員いっぱい入所しています。

＜意見・感想＞

・横のつながりを活かしていくことが大切だと思いました。

＜助言者コメント＞

・５つの事例でうまくいったものは、他の子どもの将来の希望につながると思います。自立支援コーディネーターさんのお話は貴重でした。ありがとうございました。

母子分離が難しい新入園児Ａ君への関わり

社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所めばえ学園　新玉　枝理

４月からの新入園児（自閉症２歳男児）A 君が、療育者との関係を深めることで保育室内で過ごす（遊ぶ）ことが出来るようになった経過を報告する。

【入園当初の様子】

保育室の中に入ると母親に抱っこを求め下りたがらず、母親と一緒に保育室で遊ぶ時間を設けていたが、新しい環境（療育者や保育室）に緊張や不安が強く、常に母親の身体の一部に触れて過ごしているため離れることが出来ず、遊びたい玩具があっても遊べない様子だった。

【意識した関わりと変化】

まずは療育者を固定し、信頼関係を構築することを目指した。療育者が A 君の好きな玩具で楽しく遊ぶ様子を見せたり、好きなプラレール遊びでは、A 君の気持ちが途切れることがないよう、部品の結合などの操作をタイミングよく行った。また、A 君から視線を向けてきたときは、関心や好意が伝わるような声かけを行った。このような関わりの過程で、プラレール遊びでは電車が脱線した際に療育者の手を引いて直して欲しがるようになり、療育者を頼りにする様子がみられるようになった。

【分離時の対応】

家庭の都合を考慮し、母親と A 君、療育者の三者で遊び、A 君が療育者との間で遊び始めたところで母親に退室してもらったが、母親の不在に気付くと泣きながら玄関まで追っていき、泣き疲れて眠るまで玄関で過ごしていた。その際は不安や寂しい気持ちに共感、代弁し、無理に保育室に引き戻すことはせずに、A 君自身が保育室や遊びに気持ちを向けるのを待つようにした。

【結果と考察】

その結果、母親が保育室を退室したことで不安になった時は、A 君から療育者に抱っこを求め、抱っこをされると泣き止むようになった。また療育者の側から離れず独占したがる様子が見られるようになり、入室時の母子分離では少し泣くものの、保育室を出て追いかけることはなくなり、降園まで保育室で過ごせるようになった。

最近では入室時の母子分離の際に、療育者に抱っこをされると「バイバイ」と手を振って母親を見送り、遊びに移行することが出来るようになっている。

新しい環境に緊張や不安が強く見られた A 君の関わりにおいて、まずはマイナスな感情をより引き出してしまうような直接的な働きかけは控え、めばえ学園が楽しく安心できる場所であることを間接的に伝える配慮や工夫を丁寧に行った。その中で A 君の防衛的な状態が和らぎ、療育者の存在が自分を脅かすものでなく、心地よく安心できるものであるという認識ができ、療育者の抱っこで安心したり、頼りにする様子がみられ、少しずつ関わりも受けとめられるようになってきたのではないかと思う。

＜質疑応答＞

Ｑ：４月からどれくらいの期間がかかりましたか。

Ａ：１ヶ月はお母様から離れられず、５月からは分離後に療育者と一緒に後を追うようになり、その中で療育者を頼りにする様子がみられるようになりました。６月になると分離時にＡ君の方から療育者へと抱っこを求めるようになりました。

Ｑ：療育者を固定するなど、安心できる環境作りをするときのスタッフの話し合いはどのような内容ですか。

Ａ：４月の時点では固定ではなく、その時その時の状況に合わせようとしていましたが、療育者が日によって違うことでＡ君の警戒心や馴れない事など不安要素を増やすより、固定して安心材料となることを目指していくことを話し合いました。その後に、他の療育者を交えて人間関係を広げていこうと話し合いました。

Ｑ：次の目標はどうしますか。

Ａ：残念ですが、ご家庭の事情により１０月末に退園されました。

＜助言者コメント＞

・療育者との間で難しいこともあったと思いますが、Ａ君の成長を素晴らしいと思いました。

「子どもの虐待防止推進フォーラムせたがや２０１５」に向けた取り組み

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科４年　沖野　広香

「子どもの虐待防止推進フォーラムせたがや 2015」が、11 月 14 日に成城ホールにて行われる。「児童虐待のないまち世田谷をめざして」というテーマのもと、世田谷区における児童虐待の現状を学び、虐待をなくすために必要な支援や資源は何か、自分達に出来ることは何かを、学生の目線で考え、提示していくことを目的とする。

また、この取り組みを通して、福祉を学ぶ学生自身が、今日の児童虐待の現状に目を向け、問題意識を持つことが出来るよう意識して活動を行う。

フォーラム内で行われるシンポジウムに、昭和女子大学福祉社会学科の有志学生が参加する。学生の主な取り組みは、①世田谷区における児童虐待の現状と虐待防止に向けた取り組みについて、パワーポイントを用いたプレゼンテーション②虐待リスクの潜む家庭の事例を用いた寸劇③コペンハーゲンのファミリーセンターの役割を中心に北欧における虐待防止策について、パワーポイントを用いたプレゼンテーション④フォーラムに向けての学生の活動記録動画の作成、である。

世田谷区データの事前学習から、新規虐待相談件数を内容別に見ると、心理的虐待が最も多いことや、出生時の母の年齢の高齢化という現状が明らかとなった。また、虐待を受けた子どもの年齢構成を見ると乳幼児の割合が多く、幼い子どもを持つ親や子ども自身の支援が必要であると考えることができた。これらの現状をもとに、ワークショップや勉強会を開催することによる「虐待」や「しつけ」について知る機会の提供や、子育て経験者や専門家との対話機会の創出、親支援の必要性等、学生の考える虐待防止策の提示を行う。

さらに、学生による虐待リスクの潜む家庭の事例を用いた寸劇を通し、子どもと関わる様々な職種からのシンポジストや会場との意見交換を行う。日常生活に潜む虐待の予兆の発見から、支援や資源への繋がれ方、機関や組織内の連携等、実際に行われている取り組みや、今後必要なことについて討論を行う。

フォーラムに向けての問題提起や、当日までの学生の活動や取り組みを交え、児童虐待に関する現在の問題は何か、虐待をなくすために必要なことは何か、私たち学生が考えることについて発表を行う予定である。

＜質疑応答＞
Ｑ：人数は何人ですか。
Ａ：１０人です。

Ｑ：リーダーは大変だったと思うのですが、リーダーとしてみんなの成長は感じましたか。
Ａ：１、２年生は「先輩がやってくれる」「意見を求めても何も言ってくれない」などありましたが、途中から自分の役割を認識して昼休みなどを使って一人ひとり自分で考え行動してくれたのは成長だと思います。

Ｑ：後輩たちにも今後このような活動はありますか。
Ａ：先輩を見て自分たちも何か気になること、興味があることなど、機会があったら取り組みたいと言ってくれていたので期待したいです。

＜意見・感想＞
・具体的なお話でわかりやすかったです。

＜助言者コメント＞
・フォーラム自体の取り組みも素晴らしいが、振り返りがしっかり出来ているのは素晴らしいと思いました。

㊜第１分科会－６

Ａさんの心情理解と出勤への応援

社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房　　田島　和美

はじめに

３０歳、女性、愛の手帳３度、通所１３年。明るく和やかな性格。ひょうきんな姿と屈託ない笑顔でまわりの雰囲気をぱっと明るくする。また仲間の気持ちの変化を察し、声をかける優しい姿がある。時に喜怒哀楽を素直にストレートに表す姿の中にもまわりを気遣う優しさと繊細さが見え隠れする。通所５年頃より統合失調症のような症状で診断を受ける。10 年目、体調を崩したことをきっかけに３ヶ月近く出勤できなくなる。そこで、支援者の役割を再度考え、何ができるか、どう働きかけるか、A さんの気持ちはどこにあるかを、病理の面ではなく心情理解に視点をおき、出勤への気持ちを支え後押し、再び出勤が定着してきた経過を報告する。

１、私たちのメッセージを伝える

度々電話を入れた。電話口でこちらの声を聞いてくれることもあったが、眠っていたり、「出たくない」とのことで、ほとんど直接話をすることは難しかった。また、納品帰りに仲間と配布物とともにお見舞いのクッキーを持って自宅に寄った。それでもＡさんの顔をみることはなかなかできなかったが、「心配していること」、「いつでも待っていること」、「Ａさんの過ごす場所がきちんとあること」を私たちからのメッセージとして間接的であっても伝え続けることを大事にした。

２、心情を肯定的に解釈する

間接的なやりとりはＡさんになんらか伝わっていると信じてすすめるものの、なかなか現状を変えられず、ご家族のご協力の下、部屋まであがらせてもらうことにした。コンディションもあり、表情を変えずにこちらをじっと見るだけであったり、顔を見るなり「行かないよ！」と大きな声になり壁に頭を打ちつける日もあった。この姿から、なんとなくうまくいかない今を感じ、求められる自分を思い描けるがそこに応じる自信のないＡさんの辛さがあるのだろうという解釈にたった。そこで出勤に「誘う」視点と共に一緒に過ごすことの「安心感」の視点を持ち、１５分～２０分ほどではあるが毎日お宅へ伺った。

３、少しずつ出勤へ結びついていく

あまり食事のとれないＡさんだが、一緒に食事をすることもあった。タイミングをみて「そろそろ行きますか」に小さくうなずき、工房へ来ることが少しずつ増えてきた。期待も不安もある中で仲間との久しぶりの出会いは快刺激にも不快刺激にもなった。仲間は笑顔で挨拶に来てくれる。嬉しさがありながら素直に振舞えない自分をうんと感じているようにもみえた。それでも毎日続けることで「大丈夫」という安心感が確かなものとなり、出勤を定着へと結び付けていくようだった。

４、考察

心情理解とは目に見えない気持ちを探り、肯定的に解釈することだと考える。今のマイナスに見える状況を一旦受けとめるという現実肯定の関わりから醸し出される安堵感がベースとなっているのかもしれないと感じた。

＜質疑応答＞

Ｑ：お宅訪問などは他のスタッフとどのような話し合いがあったのですか。

Ａ：担当者であるため情が勝ってしまいそうなときもありましたが、今彼女に必要な支援であること、私たちが今、彼女にできることであると、全員で考え、話し合った結果です。

＜意見・感想＞

・職場の理解があったからこそ出来ることで、素晴らしいと思いました。

・行き過ぎた行為だとは思いません。むしろ踏み込めたことが解決につながったと思います。

＜助言者コメント＞

・辛い病気を抱えたＡさんと関わってきたということで、困難な発表かと思いました。

・とても専門職らしかったです。Ａさんが抱える課題をどのように解決していくのかがポイントだったと思うのですが、「うん」の小さな反応をしっかり見ることができていて、とても専門家であると感じました。

教室型発表　第１分科会　進行役・助言者

横山　順一（日本体育大学体育学部健康学科准教授）

森田　規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

教室型発表　第２分科会

多世代による文化交流/一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者
伊藤　秀一（駒澤大学文学部社会学科教授）
加藤　美枝（世田谷区老人問題研究会理事）

	発表者	所属	テーマ
1	甲斐　実	社会福祉法人 せたがや樫の木会　下馬福祉工房	自閉症の行動特徴を受け止める
2	久保田　裕之 園原　一代	日本大学文理学部 NPO 法人ハートウォーミング・ハウス	ホームシェアによる高齢者と若者の暮らしを支える取り組み
3	大沼　昌子 吉岡　慶子 中山　美智子 谷黒　洋子	ひこばえ広場 子育ていきいきサロン 世田谷保育園	シニア世代と幼児のつながりづくりの試み（その５） 保育園での実践経験を生かし地域に拓く活動へ
4	林田　淳史 金井　満里子	社会福祉法人友愛十字会 特別養護老人ホーム　砧ホーム	自立支援にみる家具調椅子の使用と歩行の成果 ～椅子ｏｒ車椅子どっちがいい？～
5	藤村　征史	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 烏山地域社会福祉協議会事務所	住民活動と社協事業が協働した実践活動
6	岩田　明香里 田村　双葉 宮嶋　玲子	日本大学文理学部哲学科４年 教育学科４年 心理学科４年	日大サロン「さくら」の設立とその活動
7	中浜　崇之	世田谷デイハウス　イデア北烏山	色カルタで見えた本当のあなた

自閉症の行動特徴を受け止める

社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房　甲斐　実

＜事例プロフィール＞１９歳、男性、愛の手帳２度、自閉症、通所１年目

＜概要＞

特別支援学校卒業後、当施設利用開始。人とのやりとりが形式ばった型のものになりがちな青年である。行動の取り方を把握して、自閉症の行動特徴と照らし合わせ、受け止めていくことから始めている。

＜エピソード＞

１、更衣のタイミングがつかめない

朝の更衣では着替え出すタイミングがつかめず、座ったまま動かない。名前を呼ぶと「着替えます」とは言うが行動は伴わない。また「おはようございます、バス乗った（朝バスに乗って通所してきた）」とのやり取りに安心するが、「待っててね」と職員を更衣室から追い出す。そんなやりとりを何回か繰り返しながら更衣を終える。

場面切り替えの悪さは気持ちが追い付かないのであるから、更衣室に入る前にカード指示、間合いを取って受容的に促す。また人への関心、伝えたい気持ちの芽生えなど、肯定的にとらえる。

２、更衣が遅れ、体操に間に合わない

そんな時でも更衣→朝体操の流れのまま、活動が始まっている作業室の前で職員と体操を行い、トイレへ向かう。全体の体操の時間が終わっているという認識にはたてず、自分のペースで事を運んでしまう。

スケジュールは入っているが、時間観念が分からないため予定を優先する。遅くなっても割愛することができない。

3、ボードの日付ミスに気づく

自分の認識とのズレに不安を感じている姿であろう。一般的には訂正で済むことだが、社会的な意味として捉えることが難しいので混乱を招いている。理解できない事態との遭遇であり、混乱したことであろう。翌日には、今日は大丈夫か確認をしてもらう。必要性に合わせて選択的に注意を向けられない、断片的な情報に振り回されてしまう。それは認識次元にとどまらず不安を伴うことである。この不安がエネルギーになり思わぬ行動が派生する。

4、挨拶の仕方

朝一番での出会いは「おはようございます」と挨拶をするのだが、誰かれ構わず声かける、同じ人に何度も、といった場面や人の認識の希薄さを見せる。

場面に即した言葉が分かり始めて、型がコトバとして身についてきている。しかし社会的な意味としては捉えられていないから、ちぐはぐな挨拶になっている。課題視することではなく、追々に修正ができる時間経過を踏んでいくと捉える。

おわりに　行動特徴を把握するが行動修正には踏み込まない。なぜこのような行為になるのか、障害から、また心理特徴から解釈して、支援土壌の見直しを進めることにする。

＜質疑応答＞
Ｑ：話の内容から、実際に１９歳の人は理解できるようになりましたか。
Ａ：今では彼に合わせた言葉の伝え方によってわかるようになってきました。

Ｑ：レジュメにあること以外に行っていることはありますか。
Ａ：ノートにその日の予定や内容を書きます。混乱を防げるように、すぐに結果を求めずにゆったりと取り組んでいきたいと思います。

＜助言者コメント＞
・報告内容全体を通じても、レジュメのタイトルからも、覚悟が見られました。支援の見直しによって今のスタンスを続けてほしいと思います。

ホームシェアによる高齢者と若者の暮らしを支える取り組み

日本大学文理学部　久保田　裕之
NPO 法人ハートウォーミング・ハウス　園原　一代

１．活動の目的

独居高齢者の居宅に学生を格安で住まわせる「ホームシェア」は、北米・西欧を中心に世界で広がりを見せており、家族を超える世代間連帯の象徴として注目を集めている。実際、ホームシェアが実現すれば、高齢者の防犯上・生活上の不便の解消から、学生の居住福祉、世代間交流、空き家問題の解消まで、その効果は多岐にわたる。

しかし、日本でのホームシェアの長期継続例はまだ少なく、最も実績のある NPO 法人ハートウォーミング・ハウスにおいても現在３ケース、日本全国でも通算 10 ケースに満たない。この背景には、家族を中心とする日本の文化や法制度の問題のみならず、国内における NPO に対する信頼感の低さなどあると考えられる。

そこで、日本におけるホームシェア先進地域として、区内に多くの大学を擁する世田谷区の利点を活かし、大学と NPO がどのように連携していけるのかを検討していく。

２．実践内容

具体的には、（１）日本大学文理学部社会学科を中心にホームシェア体験プログラムへの参加者を呼びかけることで、世田谷区と日本大学の共同事業の可能性を探ること、（２）大学と NPO の連携の中でホームシェアの長期継続を後押しするファシリテーションのあり方を検討すること、（３）国際的なホームシェア事業者のネットワークと連携することで、各国のホームシェア事業の仕組みを参考にしつつ、日本のホームシェア事業の問題点の抽出などを行った。

３．結果・考察

結果として、（１）2015 年 4 月から、文理学部社会学科から協力の申し出があった 4 名の学生のうち、女子学生１名のマッチングを行い、3 ヶ月間のホームシェア体験プログラムを実施した。こうした事業を通じて、（２）大学と NPO の協同は、ニーズのある学生へのアクセスという点で NPO にとって有益なだけでなく、経済的に恵まれない学生の生活を下支えする意味でも、遠距離から通学する学生の学習時間を確保する意味でも大学にとって有益であることが示された。さらに（３）2015 年 11 月 5 日・6 日にメルボルン（オーストラリア）で開催された「ホームシェア世界会議」での報告・討論を通じて、スペインやドイツでの成功例から、日本においても自治体・大学・NPO の協同の元でホームシェア事業を運営していく必要性が示唆された。

４．課題

しかし同時に、世界の事業者においても財政的基盤の確保が大きな問題となっており、一定の事業収益を確保する仕組みや、大学や自治体からの人的・経済的資源の拠出が必要であることが明らかになった。

＜質疑応答＞

Ｑ：大学から近いというのがメリットですが、遠い場合はどうしているのですか。

Ａ：海外で大学側と NPO がコラボし地域の高齢者の自宅の空き部屋を貸してくれるように働きかけるケースがあります。日本では大学の研究室が関わり、ホームシェアオーナー探しから学生の斡旋まで行っているケースもあります。ほとんどのケースは NPO 又は任意団体が行っています。

Ｑ：賃貸契約や入居条件、脱法ハウスなどの順法性、オーナーさんと入居者とのトラブルはどうなのか具体的に教えてください。

Ａ：賃貸契約はホームシェアオーナーさんが行っています。私どもは、賃貸契約の後方支援をさせて頂いています。そして、シェアメイトはどんな方がいいのか、またどんな暮らし方を思い描いているのかなどお尋ねし、シェアメイトのイメージとシェアで暮らすことの不安や期待の相反する気持ちがありますので、ギャップを埋めていくアドバイスをしています。順法性については、自宅の空き部屋の活用であり、家族が住まなくなった空き部屋に、家族に代る非血縁家族を迎え入れることです。脱法ハウスと言われる窓無しの極狭い部屋に、何人も住まわせる営利性の高いシェア居住ではありません。トラブルについては、オーナーさんやシェアメイトさんがシェア生活の中でトラブルとなりそうなことを未然に防ぐために、入居する時、私どもも加わり三者で「おやくそくシート」を作り、約束を守り合うことを行っています。

＜助言者コメント＞

・ホームシェアを興味深く感じています。ラジオからホームシェアのことを知りました。地方から都心に就職や進学しようとする若者や学生に対して、世田谷区からホームシェアが広がっていけばいいと思います。

シニア世代と幼児のつながりづくりの試み（その５）
保育園での実践経験を生かし地域に拓く活動へ

発表者　　ひこばえ広場　　大沼　晶子
吉岡　慶子
子育ていきいきサロン　中山　美智子
世田谷保育園　　谷黒　洋子
共同研究者　　世田谷区老人問題研究会
世田谷保育園

[活動の目的]

シニア世代と幼児が遊びを通して交流の機会をもち、広い意味の文化の伝承を意図しながら、お互いが影響しあい学び合い助け合えるやさしい地域社会をつくる。

[発表概要]

１．生涯大学３４期生の学びの実践として生まれた「ひこばえ広場」は世田谷保育園を活動の場として５年目を迎えた。当初は４，５歳児を対象としたが、３年目から２，３歳児も加わり、年齢別活動が定着してきた。これは園の理解のもと、園児や保育士との関係が深まってきたことと、「ひこばえ広場」が世老研（世田谷老人問題研究会）に入会し、世老研所属のひこばえ会員が増えたことによる。

活動内容も豊かになり、さらにシニア世代だから出来ること、シニア世代だからやるべきことを意識した企画も考えながら、子どもたちとはゆとりと楽しみをもって接している。子育ていきいきサロンの新設により地域とのかかわりも増している。

２.世田谷保育園からの報告（当日）

３.新設「子育ていきいきサロン-ひこばえ広場-」の８か月とこれから（当日）

[考察]

✧　子どもが多様な人と接することにより社会性や豊かな情操性を育む

✧　誰かの役に立つことができるという有用感・自己肯定感を双方に育む

✧　高齢者の生活の活性と生きがいや地域社会との積極的かかわりを生み出す

✧　生活文化や歴史、人間の生命の変化を緩やかに自覚しながら子らにも伝えている

［課題と展望］

✧　継続していくために活動の意義や楽しさを伝え、会員を増やしていく

✧　わが孫から地域の孫・社会の孫への視点を持って活動をひろげていく

✧　「世代間交流の意義」に保護者や一般社会の関心を喚起し活動に理解と参加を促す

［類似活動の調査から］

「世田谷子育てつながる本」（子ども・若者部刊）「生涯現役ネットワーク」などの資料やPC 等から、“高齢者の力と子どもの力”を積極的に評価し結びつけている活動は見つけられなかった。高齢者をボランティアやスタッフとして児童館や子育て支援機関で起用している例や、イベントの昔遊びコーナーでの活躍は少なからず見られた。

（これらの調査についてはさらに進めて別途まとめるつもりである）

＜質疑応答＞

Ｑ：イベントの向上に向けてどのような活動をしていますか。
Ａ：たまご、じたまごに沿った活動をしていきたいと思います。

Ｑ：恒常的な活動の中で、保護者の方との関わりを具体的に教えてください。
Ａ：児童館に月１回行っており、さらに増えていくかはこれから考えたいです。

＜助言者コメント＞

・大変有意義な取り組みを行っているなと感じました。福祉社会は全国的にあり、地域社会を耕しているというように思いました。老人福祉につながるイベントをするだけでなく向上して欲しいと思います。

自立支援にみる家具調椅子の使用と歩行の成果～椅子 or 車椅子どっちがいい？～

発表者　社会福祉法人友愛十字会　特別養護老人ホーム砧ホーム
林田　淳史、金井　満里子
共同研究者　社会福祉法人友愛十字会　特別養護老人ホーム砧ホーム
山口　公司

《１．状況と課題》

当施設では平成２１年度より「水分・食事・排泄・運動」を基本としたケアの理論を取り入れていた。運動(歩行)には歩行器やシルバーカーを活用し、車椅子から椅子への移行も行っていた。対象者Ｈ氏は、生活リズムに乱れがあり、その為に食事・水分摂取量にムラがあった。離床時は車椅子上で生活されていた。姿勢が安定せず、左右への上体の傾きが見られることもあった。また、便秘の問題も抱えており、便失禁を起こすこともあった。以上より、①生活リズムの改善②運動量（歩行量）の増加③食事・水分量の増加④便秘の改善⑤姿勢の安定を課題として挙げた。

《２．目標と期待する成果・目的》

車椅子ではなく家具調椅子を使用することで、安易に車椅子での誘導を行わず、積極的に歩行介助を行う意識が生まれる。また姿勢を補正し覚醒状態を改善させることで、必要な栄養量の確保を目指し、ADL 全般の改善、利用者の QOL の向上を期待した。

《３．取り組みの内容》

①生活リズムの改善として、運動と水分増加のアプローチを行った。②運動量（歩行量）の増加として車椅子を使用せずに家具調椅子へ移行し、移動手段を歩行器歩行へと移行した。③食事・水分量の増加として、甘い飲み物を好んでおり、カルピス等を主体とし提供した。水分量を確保することで覚醒状態の改善を図り、食事摂取量の増加を目指した。④便秘の改善として、粉末状食物繊維１５g/日開始し、水分量と歩行量増加と並行してケアを行った。⑤姿勢の安定として足底がしっかり床に着くように椅子の脚を３㎝切り、高さを調整した。座位安定の為に背部クッションを使用した。

《４．取り組みの結果と考察》

1 日中寝ていることはなくなり、活動時以外も覚醒されて過ごすことが増えた。歩行距離は平均 149m/日に増加し食事はほぼ全量摂取され水分平均も 1335ml に増加した。便秘の改善もみられ、3 日～5 日で自然排便でき、便失禁が改善した。姿勢の安定に関しても、足底が床に着き、上体が左右へ傾くことが目立たなくなった。しっかりとした座位を保てることで食事摂取動作が安定した。

《５．今後の課題》

車椅子の使用を減らすことで歩行介助の機会が増加し、歩行の意識が高まった。これは職員の技術向上と、利用者のあるべき姿を取り戻す喜びに繋がった。また、個別に椅子の高さやクッション等を選択し適切な座位を保つことの重要性を学んだ。今後は椅子への移行と歩行ケアを拡大し、より多くの利用者の生活の質の向上に努めたい。

＜質疑応答＞

Ｑ：まだケアができていない３１％の人やおむつの使用は完全に改善できましたか。
Ａ：失禁用のパッドなどを使っています。パッド有り１５％、パッド無し８５％とできていて、かなり改善に向かっています。

Ｑ：やりがいはありましたか。また、改善できていないポイントはまだありますか。
Ａ：一人ひとりに合わせたクッションはまだ作れていません。椅子の脚などもまだ未改善であるので、それが今後の課題です。

Ｑ：メンタル面でのサポートなどはしていますか。
Ａ：歌やイベントをすることで、体を動かしたり、ストレス発散の援助ができています。

住民活動と社協事業が協働した実践活動

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　烏山地域社会福祉協議会事務所
藤村　征史

【目的】社協事業により区民が住み慣れたまちで生活していくための住民活動
【実践内容】
集合住宅在住の女性（８０歳代前半）は独居で、片付けができず自宅は不用品やゴミが雑然と置かれ、居住スペースが殆どない状態で暮らしていた。自宅で脳梗塞を発症し倒れていたところを訪問した民生委員に発見され、入院した。退院後、民生委員とあんしんすこやかセンターが介護サービスの利用や自宅内の片付けを説得するも本人の納得を得られなかったが、介護保険申請だけは本人同意で行い要支援２の認定がおりた。しかし、片付けられていないため福祉サービスや用具の導入が困難だった。そこで、業者対応による一斉片付けの導入を検討するも、本人の希望と合わず２度のキャンセルとなった。このような状況について民生委員から社協に情報提供があった。その後、民生委員からの依頼により、本人の意欲があるうちに本人意向を尊重しながら、社協が行っているふれあいサービスで部屋の片付けを行うこととなる。片付けを行うにあたっては、ふれあいサービス協力会員のみでは対応に限界があるため、社協職員も直接かかわることで本人もサービス提供の受入れを了承し、片付けを行った。
【結果】
物を捨てられず溜め込む傾向があったが、社会福祉協議会との関わりを通して不要なものを寄贈するなどの社会的な動きをするようになった。また、自宅内が片付いたことで、本人の日常生活に意欲が湧くとともに、表情が柔らかく明るくなった。さらに、部屋が片付いたことによって、福祉サービス利用が促進されるとともに心身にゆとりが生まれ、近隣在住の友人を自宅に招いて茶話会をするなど、社会的交流に発展し、本人に対する近隣住民を巻き込んだゆるやかな見守り体制が構築された。
【考察】
公的サービスの導入を拒否する方や導入できないケースの場合、一層住民活動による助け合いの重要性が増してくるものと考えられる。事例のような、あんしんすこやかセンターや民生委員、行政と社協事業との連携を更に強化するとともに、高齢者が自宅で暮らし続けられるよう、地域住民に向け福祉活動の啓発や支えあいの重要性を伝えることが大切である。
【課題】
超高齢社会が迫っている中で、公的制度に合致せず、社協事業で対応する際に、住民相互の支えあいと早期発見によりフォーマル・インフォーマルサービスへのつなぎの仕組みづくりなど、既存サービスの枠組みだけでなく、新たなサービス形態の構築や住民活動の促進を早期に図っていき、多種多様な生活福祉課題に対応していく必要がある。

＜質疑応答＞

Ｑ：インフォーマルな近隣の見守り体制とはどのような体制ですか。

Ａ：家を片付けたことにより、本人自ら近隣の人や友人を自宅に招きお茶会を開催することができるようになりました。これにより、専門職などだけでなく、近隣住民を含めた多様で緩やかな見守り支援が行われるようになりました。また、様々な人による気付きを蓄積して、本人にとってよりよい支援を行う体制を構築しています。

Ｑ：民生委員と社協とで片づけにどれくらいかかりましたか。

Ａ：一人の活動時間としては４５～５５時間を約２か月で行いました。また、社協職員も適宜一緒に入り、相談しながら本人のペースで取り組みました。

Ｑ：解決後の本人の体調変化や認知症の症状などについてはどのような様子ですか。

Ａ：解決後は無事介護ベッドが入り、介護保険制度を利用しながら生活しています。外出意欲も出てきています。今後は、認知症への対応について支援やサービスを検討していきます。

Ｑ：ゴミ屋敷への対応に対する課題は何ですか。

Ａ：１つ目は、ゴミ屋敷を見つける目や片付けてくださる方の発掘かと思います。
２つ目は、ゴミを処理するお金などの課題があります。ただし、世田谷区のゴミ屋敷対策に係る条例の動向によって変化するかと思います。
今後については、新たなサービスの創出や、支援体制を構築していくなどが課題として挙げられると思います。

日大サロン「さくら」の設立とその活動

日本大学文理学部哲学科４年　岩田　明香里
教育学科４年　田村　双葉
心理学科４年　宮嶋　玲子

日大サロン「さくら」の概要

日大サロン「さくら」は、日大生が近隣の地域住民の方々と交流できる場を大学内に作りたいという思いから、社会福祉コース・学科の有志によって立ち上がったサロンです。日本大学文理学部の校舎を拠点として、幅広い地域の方々を対象にしたサロンを定期的に開催していくことを考えています。

経緯

地域内に住民が気軽に集まれるような場所が少ないため、地域包括支援センターなどが大学の設備を使用したいと考えましたが外部の機関が大学を利用するのは難しいとのことでした。また、学生が地域の方々と交流する機会が少なく、その機会を作りたいとの希望が学生側からありました。

ならば、大学の内側から、学生が大学の設備を活用してサロンを開催することで、この二つの問題を一気に解決することができると考え、学生主体となってサロンを立ち上げることとなりました。

活動報告

・サロンの発足に合わせた地域福祉関係者との企画会議
・2014 年度桜麗祭にて学祭ツアーの開催（2014 年 11 月 2 日）
・学食ランチを 2 回開催（2015 年 6 月、7 月）
・2015 年度桜麗祭にて第 2 回学祭ツアーの開催（2015 年 10 月 31 日、11 月 1 日）

課題

大学生は基本的に 4 年間で卒業してしまいます。学生の入れ替わりがある中で、いかにして引き継ぎ・継続をしていくか、設立間もない中で手探り状態です。一つの案として、サロンの存在の周知が進んできたので、今後は地域の方々にも運営に携わっていただくことも考えております。

また、サロンの方向性の明確化・活動内容の見直しが必要であると思われます。一度開催したからと言ってそのまま続けていくのではなく、新しい活動の展開も視野に入れています。

今後の展望

4 年の立ち上げメンバーから下級生に引き継ぎました。全体の活動参加人数も増えました。これからは団体としての組織化を図り、安定したサロン活動の継続と発展を目指していきたいと思います。

＜質疑応答＞

Ｑ：学食ランチは参加者が４０名程度だったとありますが、他のイベントはどのくらい来ましたか。

Ａ：学祭ツアーは１５～２０名でした。学食ランチの参加者が一番多かったです。

Ｑ：どのような方が来てくれましたか。

Ａ：３～４人のグループで来られた高齢者が多かったです。

Ｑ：これらの活動は学校のどのような学生が行っているのですか。

Ａ：日本大学社会福祉学科及び社会福祉コースの学生が中心に行っています。

Ｑ：イベントをする時はどのような地域の声を聞いて行っていますか。

Ａ：地域福祉や高齢者福祉に携わる方にお話を伺ったり、福祉に興味がある高齢者の声を聞きました。

Ｑ：イベントには先生やアドバイザーはついていますか。

Ａ：先生やアドバイザーが忙しい時はいない場合もあります。

Ｑ：卒業論文にしますか。

Ａ：地域コミュニティの在り方として取り上げ、卒業論文にする予定です。

色カルタで見えた本当のあなた

世田谷デイハウス　イデア北烏山　中浜　崇之

色カルタクオリアゲームを知っていますか。誰もが参加できる色を使ったゲームです。使用してみて介護を始め福祉の現場ではとても有能なツールであると感じました。

利用者さん一人ひとりがあなたの目にはどう映っているでしょうか。個人を知ることの重要性を再確認できたり、一人ひとりの歴史を知ることでケアの視点、心構えが変わってきたと感じています。ぜひこの経験を多くの方に知って頂きたいと思っています。

◆ 目的

色カルタクオリアゲームを使って利用者の本当の姿を知る。また、一人ひとりがかけがえのない個人として関わる意識を再認識する。

◆ 実践内容

・ 色カルタクオリアゲームとは
・ 実践例
・ 参加者の声

◆ 結果

・ 利用者さんが主役になる瞬間が増えた。
・ 一人ひとりの歴史を知る事が出来た。
・ 個人を見るという重要性を再認識する事が出来た。
・ 目には見えない性格や考え方を知る事が出来た。

◆ 考察

・ 仕事の上での視点の置き方を学ぶ事が出来た。
・ 個人の歴史を知る事が『愛』を持ってケアする事につながった。
・ アセスメントでは出来ないその人を知ることが出来た。
・ 質問力の重要性と受容する際の心構えを考えさせられた。

＜質疑応答＞

Ｑ：色カルタで難しい質問をして，シーンとしてしまうことはありますか。

Ａ：まずは簡単に答えられる色から質問し、徐々に難しい質問にしていきます。そうするとだんだん答えられるようになります。

Ｑ：どこで色カルタを知ったのですか。

Ａ：知人の紹介です。本を読んで興味を持ちました。

Ｑ：なぜそんなに話すのが上手なのですか。

Ａ：若い頃から人見知りで、ずっと話すのが苦手だったので、お話が上手な方を観察したり、勉強しました。

Ｑ：カルタで辛い話になることもありますか。

Ａ：まず少し話してもらい、とても辛そうであれば止めます。逆に辛い話から良い話になることもあるので、とりあえず話していただきます。また、相手が話をしたい内容が本当に辛い話なのか、その人の話の中に繰り返し出てくるキーワードを見つけていきます。そうすると本当に話したいことが見えてくるので、そのキーワードについて話をしていくことが大切だと思います。

Ｑ：事業所は何人で運営していますか。

Ａ：１０人位で行っています。

教室型発表　第２分科会　進行役・助言者

伊藤　秀一（駒澤大学文学部社会学科教授）

加藤　美枝（世田谷区老人問題研究会理事）

教室型発表　第３分科会

生きがいづくり・まちづくり/地域をつなぐネットワーク

進行役・助言者
小池　高史（日本大学文理学部社会学科助手）
村田　幸子（福祉ジャーナリスト）

	発表者	所属	テーマ
1	金子　由美恵	優っくり村喜多見	認知症サポートＳＯＳ店　構築にむけて ～認知症カフェから始まった３年間の取り組み～
2	橋元　晶子 橋元　裕明 小谷　知 丸山　節子 安藤　秀彦 山本　恵理	砧地域ご近所フォーラム２０１６ 実行委員会	砧地域ご近所フォーラムのとりくみ ～ひろがってきた「顔の見える関係」～
3	檜山　睦	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬	デイ･ホームが育てる地域ボランティア
4	矢吹　千恵子 亀井　文男 鈴木　一夫	世田谷区老人問題研究会	「世老研」３５周年記念式 ～３５年間の歩みと今後の取り組み～
5	佐藤　章司 佐藤　彩子	世田谷区社会福祉事業団 上町あんしんすこやかセンター	男性介護者の会「男の介護を語る会」の活動報告
6	小俣　行史	株式会社やさしい手 おまかせ事業部 地域交流レストラン事業課	コーシャハイム千歳烏山、地域交流 レストランでの取り組み

認知症サポートＳＯＳ店　構築にむけて
～認知症カフェから始まった３年間の取り組み～

発表者　　　優っくり村喜多見　金子　由美恵
共同研究者　優っくり小規模多機能介護喜多見
優っくりグループホーム喜多見

地域密着型の事業所として世田谷区民の皆様が最後までこの地域で自分らしく暮らし続けるために、私たち職員はその意味を求め、またどのように支援していくべきか、開所から３年考え続けてきました。そのなかで、利用者の想いを一人ずつ丁寧に形にしながら、グループホームへ入居された後、また小規模多機能居宅介護のサービスを利用しながらも、地域住民として繋がりのある自然な暮らしを継続する活動を、家族そして地域と共に行ってきました。それは、高齢者だから、認知症だからと諦めるのではなく、地域のみなさんと共に一緒に考え暮らすこと、ごく自然に生活を送るという共助社会を創ることでもありました。
カフェやクラブ活動にご尽力いただいた喜多見東部町会、地区民生委員。温かく迎えてくださった近隣商店の皆様や住民の皆様。幸せな気持ちを運んできてくれた地域の小学校の子供たちや保育園の皆さま、また保護者の方々。たくさんの方々にご協力いただかなければこのような支援はできなかったと思います。今回、昨年度事例発表をさせていただきました優っくり村で行うカフェ、その１年後もご報告させてもらいながら、地域との架け橋を目指して行ってきた活動を発表させていただきます。

優っくり村喜多見ストーリー（2012 年 12 月開所～2015 年 10 月）

2013 年 7 月	利用者主体型認知症カフェ 「かふぇ☆優っくりずむ」初 OPEN！！
10 月	地域の方参加型ハロウィンカフェ OPEN
11 月	■書道教室スタート（毎月開催）
2014 年 3 月	子育て応援カフェ OPEN 商品販売スタート
5 月	◇クリーン活動（見守り）【毎週土曜開催】
7 月	夏休み子供たちと一緒に夏カフェ OPEN
10 月	ハロウィンカフェ第二弾！！大人気！
12 月	クリスマス・カフェ OPEN
2015 年 3 月	第二弾子育て応援カフェ　商品全完売
4 月	2015 年度より毎月カフェを OPEN！！
9 月	■陶芸教室スタート（毎月開催） 特別養護老人ホーム等々力の家にて包括カフェ開催、優っくり村池尻と合同開催

＜質疑応答＞

Ｑ：月１回のカフェに、違う地域から来てくださる方もいますか。年齢層はどのような感じですか。

Ａ：いらっしゃいます。赤ちゃんを連れてくる方もいらっしゃいます。

Ｑ：継続して来てくれる人はいますか。

Ａ：赤ちゃんを連れて毎回来てくださる人もいます。

Ｑ：いろいろな人が広めていくことが大事だと思うのですが、そのためにはどのような取り組みが必要ですか。

Ａ：どのような取り組みが必要かは利用者や地域の方に伺っています。お祭りなどで窓口を作ることも計画しています。

Ｑ：どのような取り組みをしたいか、相談がありましたか。

Ａ：実際に話し合いながら、また地域の人々と信頼関係を築きながら模索しています。

Ｑ：オープンした時に困ったことはありますか。

Ａ：地域からの反対もあったので、こちらから外に出て声かけをしました。

砧地域ご近所フォーラムのとりくみ
～ひろがってきた「顔の見える関係」～

砧地域ご近所フォーラム 2016 実行委員会　橋元　晶子、橋元　裕明
小谷　知、丸山　節子
安藤　秀彦、山本　恵理

砧地域では、平成２２年から「砧地域ご近所フォーラム」を開催している。このフォーラムを主催する「砧地域ご近所フォーラム実行委員会」は、砧地域の医師・歯科医師・薬剤師・社会福祉協議会・ケアマネジャー・介護サービス事業者・行政・あんしんすこやかセンターで構成されている。住み慣れた砧で安心して暮らし続けるには、職域を超えた連携が必要である。まずは顔の見える関係づくりを行うことがひとつの目標となった。今までに開催したフォーラムは以下の通りである。

	開催日	参加者数	テーマ
第１回	平成 22 年 9 月 18 日(土)	約 250 名	認知症を地域で支える
第２回	平成 24 年 2 月 18 日(土)	約 225 名	災害時　高齢者を支える地域を目指して
第３回	平成 25 年 3 月 16 日(土)	約 230 名	災害時にこそ発揮される地域の連携
第４回	平成 26 年 3 月 29 日(土)	約 275 名	高齢者を優しく見守る地域の**わ**
第５回	平成 27 年 3 月 14 日(土)	約 320 名	孤独を見守り孤立を防ぐ近所の**わ**

第６回となる今年度は「見つけよう　つなげよう　近所の**わ**」をテーマとし、平成 28 年 3 月 19 日（土）に開催する。砧地域に暮らすひとりひとりが互いのつながりを強め地域の力を高めていく、そんな取り組みを紹介する。つながりにはご近所同士の小さなつながりから、地区で取り組む大きなつながりまでさまざまなものがあるが、発表・展示はそれぞれ実際に地域で活動している方々にお願いしている。また、「今日！身近な相談窓口がつながる！」という、高齢・障害・子どもなどの専門相談窓口同士がつながる特別企画を準備している。多くの住民の方々にフォーラムに参加いただき、困りごとがあっても、地域には様々な相談窓口があることを実感し安心してほしい。そして参加者全員が地域でのつながりを見つけ、そして深めてほしい。

医師会・歯科医師会・薬剤師会と、ケアマネジャーなどの介護事業者・社会福祉協議会・行政・あんしんすこやかセンターが連携し、地域の協力を得て発信する形は、砧地域ならではの特色である。フォーラムの回数を重ねるにつれ、「顔の見える関係」がひろがり、かつ深まってきたと実感している。

地域には子どもから高齢者まで、また障害者も生きづらさを抱えた若者たちなどもともに暮らしている。この砧地域で支え合って暮らしていくためには、医療・介護・教育などの機関や町会自治会や民生委員・児童委員など、そして住民同士がお互いの顔を知り、つながっていくことが必要である。地域社会の希薄化が言われる昨今、このつながりを深めて、地域からこぼれ落ちる人を出さないように支え合えるまちを作っていきたいと考え活動を続けている。

＜質疑応答＞

Ｑ：実行委員会はいつ行なっているのですか。夜間の開催だと、出席できない方もいるのではないでしょうか。また、実行委員の年齢層を教えてください。

Ａ：実行委員会は平日１９時～２１時で行っています。確かに家庭の事情などで出られない方もいるのですが出席率は高めです。年齢層は４０～６０代です。

Ｑ：フォーラムにはどのような方々が参加されますか。地域住民は多く参加するのでしょうか。

Ａ：出席者の半数は医療･介護などの関係者です。地域住民の方も半数位来ています。専門職から始まったものなので専門職が多いです。

Ｑ：他の地域に広めるためには何が必要ですか。

Ａ：誰かが核になって協力者を募ることが大事だと思います。

デイ・ホームが育てる地域ボランティア

社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム上馬　檜山　睦

利用者の自立支援・残存能力を活かすために、利用者自ら自分のやりたい事をやっていただく「選択制プログラム」を実施している。
これまでの決まったプログラムをやっていただく事ではなく、自ら選択して頂く事により、利用者は意欲的になり、自主性が高まった。しかし、「選択制プログラム」を継続して実施するためには職員だけでは難しい。
そこで、地域住民から活動を支えてもらえるよう働きかける事とした。
まず、ボランティア養成講座として、ボランティアへ車いすの操作・言葉使い・基本的な感染予防などの知識を学んでもらえるための時間をつくり育成につなげた。
それにより利用者だけでなくボランティアにとっても楽しみ・生きがいを感じて来て下さるようになった。
これからも地域住民と協働する事をデイ・ホーム上馬の活力の１つとしていく。そして次につながるように若い世代にもボランティア活動に興味をもってもらえるよう、地域活動を行っていきたい。

＜質疑応答＞

Ｑ：ボランティアを養成する上での工夫は何かありますか。また、やはり無理かもしれないという反応をもらったことはありますか。

Ａ：施設長から直々にレクチャーします。無理という反応があった方には違うお仕事を頼みました。

Ｑ：ボランティア活動で難しい面は何ですか。また、職員によって良し悪しがあると思いますがそれに対してはどのようにしていますか。

Ａ：ボランティアさんには言葉づかいなどもしっかり伝えていきたいと思います。日々来てくださった時の声掛けを大事にしています。

Ｑ：ボランティアする上でシニア世代のボランティアさんたちの、老いへの心構えというのもあるのではないでしょうか。

Ａ：ボランティアとして施設を利用していたので、自分も老後はここで、と入所してくださる人もいます。

Ｑ：利用者の能力をうまく生かすような取り組みにしていくことがいいと思います。

Ａ：確かに利用者さんには様々な点で能力が高い人が多いので、皆様の力を生かしていきたいと思います。

「世老研」３５周年記念式
～３５年間の歩みと今後の取り組み～

世田谷区老人問題研究会　矢吹　千恵子
亀井　文男
鈴木　一夫

「世田谷老人問題研究会（世老研)」の設立から３５年という節目を迎え、記念式典が行われました。記念式典での様子と今までの「世老研」の歩み、また今後の取り組みについて発表致します。

１）「世老研」３５周年式典での様子

日時：平成２７年１０月１１日（日）
場所：京王プラザホテル
プログラム：

- 会長挨拶　矢吹千恵子
- 表彰式～功労賞授与（４名）松本實郎・石田弘・田中宏実・田中つねを
- 来賓者挨拶　世田谷区生活文化部長　斉藤洋子様（世田谷区長　保坂展人様代読)
- 世田谷区生涯現役推進課長　皆川健一様
- ひだまり友遊会館　館長代理　田淵様　＊その他省略

２）今までの「世田谷老人問題研究会（世老研)」の歩み

- 「世老研」

昭和５５年２月　世田谷区老人問題研究会の設立
同年５月　「世田谷老人問題研究会」内に「老人相談室」を開設　週１回金曜日
平成１３年　「老人なんでも相談室」を週２回（水・金曜日）に増設
平成２１年　「老人なんでも相談室」を週３回（月・水・金曜日）に増設
平成２７年　「高齢者なんでも相談室」に名称変更

- 世田谷区民まつり　平成１４年より参加し現在に至る。
- ハッピー幸せサロン　平成１３年より毎月（第１・第４月曜日）開催。
- サロン世老研　平成２０年より毎月（第２・第４木曜日）開催。
- ひまわりサロン平成２１年より毎月（第１・第３月曜日）開催。

その他「研修部」「ひこばえ世老研」なども毎月開催。

３）今後の取り組み

３５年間続いている「高齢者なんでも相談室」の継続に加え、地域に根差したサロン活動をより一層充実させていきたい。特に近年問題となっている「ひきこもり老人」や「１人暮らし老人」のサロンへの参加を呼びかけていきたい。

＜質疑応答＞

Ｑ：「高齢者なんでも相談室」について具体的に教えてください。

Ａ：「高齢者なんでも相談室」はメンバー２８名で、毎週月・水・金曜日２人体制で、電話と来所の相談を行っております。生活に関する相談が多いです。

Ｑ：呼びかけについて具体的に教えてください。

Ａ：世老研が行なっている（ダンスや歌や麻雀、折り紙等）楽しいサロン活動をアピールしています。

Ｑ：世老研に入っている人数、年齢、男女の数を教えてください。

Ａ：現在は４５名で、最高齢の方は９３歳で、平均年齢は約７５歳です。男女別では男性が１７名、女性が２８名です。

Ｑ：新規の方はいますか。

Ａ：前年は生涯大学の卒業生の方が入会いたしました。これからも勧誘していく予定です。

Ｑ：男性は新しい方が多いですか。

Ａ：麻雀は男性が多いので、それをきっかけに新しい方を増やしていきたいと考えています。

男性介護者の会「男の介護を語る会」の活動報告

世田谷区社会福祉事業団　上町あんしんすこやかセンター　　佐藤　章司
佐藤　彩子

◇目的

近年、認知症の親や配偶者を介護する男性が増えていることがマスコミ報道でも盛んに取り上げられている。慣れない家事に苦労をしたり、介護離職を余儀なくされたり、生活自体が成り立たなくなることもある。また、男性介護者は地域に知り合いが少なく、抱え込みやすい、弱音を吐けないため一人で頑張りすぎてストレスをためやすいという傾向があると言われている。

あんしんすこやかセンターの相談業務を行う中でも、男性介護者のそのような現状を目の当たりにし、同じような境遇にある男性介護者同士が気軽に語り合え、情報交換ができる場の必要性を感じた。そこで、平成 27 年 2 月、男性限定の介護者会**「男の介護を語る会」**を立ち上げた。

◇活動内容

2、3 か月に一度、第 2 土曜日の午後 2 時から 3 時 30 分にデイホーム弦巻の食堂フロアにて活動している。第 1 回は 8 名の参加、第 2 回は 6 名、第 3 回は 6 名。第 1 回から参加されているメンバーが 4 人。第 3 回から新しいメンバーが 2 人加わった。特に予約制は取らず、誰でも参加できるようにしている。妻を介護している夫、母親を介護している息子という立場の方たちが集まり、コーヒーやお茶を飲みながらリラックスした雰囲気の中で、近況報告をしつつ介護の大変さや息抜きの方法などをざっくばらんに語り合う会になっている。

あんしんすこやかセンター職員が介護マークの交付や区の事業の案内をしたり、デイホーム職員が専門的な立場から介護のアドバイスをすることもある。

◇考察

介護経験が長い参加者が、介護が始まったばかりのメンバーに対して具体的なアドバイスをしたり、逆に当時を思い出して「初心に返った」と話したり、「自分が一番大変だと思っていたが、もっと大変な思いをしている人がいるとわかり、励みになった」という発言が聞かれたりと、同じような境遇の男性同士で語りあう機会がピアカウンセリングの場になっていると言える。

介護者の会は区内もたくさんあるが、男性介護者に限定した家族会はまだ少ない。他にも、高齢者の介護と子育てを同時にしているダブルケアのケースなど、介護者も多様化しており、支援のあり方にも多様性が求められる時代であると言える。

＜質疑応答＞

Ｑ：病気の知識の基本の基本をもっと教えていくようなプログラムはしないのですか。愚痴や悩みを語るだけですか。

Ａ：会場になっているデイホームの職員から、認知症についての話をしてもらったりすることもあります。参加者自身が色々な知識や情報を持っているので、参加者同士で情報交換の場になっています。

Ｑ：配偶者を介護している人が多いと思います。

Ａ：偶然今は、妻を介護する夫と言う立場の方が集まっているので、共感しあったり情報交換したりができています。立場が違う方がいればまた違う視点が生まれ、話題が拡がると思うので、いろいろな方に声をかけるようにしています。

Ｑ：会に来る余裕がない場合などはどうしていますか。

Ａ：仕事をしている年代の方も参加できるように、土曜日に設定しています。あんしんすこやかセンターの窓口に相談に来た方に声をかけたり、ケアマネジャーに紹介してもらうようにしています。

コーシャハイム千歳烏山、地域交流レストランでの取り組み

株式会社やさしい手　おまかせ事業部地域交流レストラン事業課　小俣　行史

地域包括ケアを展開するサービス付き高齢者向け住宅コーシャハイム千歳烏山内にある、地域交流レストラン「てらすチトカラ」での取り組みを発表致します。
サービス付き高齢者向け住宅にお住いの方々と、近隣地域の方々との交流の場として、アクティビティやイベント等を開催。配食サービスや、商店街との連携等、千歳烏山地域に根差した取り組みをご紹介致します。

私ども株式会社やさしい手は、訪問介護サービスを中心に行っている介護会社になります。
サービス付き高齢者向け高齢者住宅では、やさしい手の定期巡回・随時対応型訪問介護看護、居宅介護、通所介護、訪問入浴の事業所が入っております。
それらと一緒に、地域交流レストラン「てらすチトカラ」が１階部分に入っております。

「てらすチトカラ」では、サービス付き高齢者向け住宅の入居者様の食事提供を行うと同時に、地域の方々に向けてカフェを展開しております。
隣の棟には、医療連携先のクリニックがあり、地域包括ケアを実践しております。また、隣の棟には、他社運営の保育園や多世代交流カフェもあり、多世代が交流するコミュニティとなっております。

要支援等の高齢者を地域で支えていく、介護予防・日常生活支援総合事業がスタートした中で、私どもやさしい手は、様々な生活支援サービスの展開に取り組んでおります。

このような環境の中で、「てらすチトカラ」を中心とした、地域交流の取り組みは、高齢者を含む地域の方々が活き活きと生活していく役割を担えたらと思っております。
千歳烏山地域の商店街との連携や、地域住民によるアクティビティの実践など、地域に根差した取り組みをご紹介させていただきたいと思っております。

＜質疑応答＞

Ｑ：全て「やさしい手」のスタッフがイベントを行っているのですか。
Ａ: 企画､運営はスタッフがしています｡講師に関しては､シニアヨガは社員が行い､ほかは、外部講師や、地域のボランティアの方々にお願いしています。

Ｑ：５００円程度でイベントはまかなえるのですか。
Ａ：サービス付き高齢者向け住宅や、デイサービスなど全体としてはまかなえています。参加人数に合わせて値段設定しています。

Ｑ：生活支援のサービスはボランティアと社員どちらがしていますか。
Ａ：安価な生活支援サービス（ささえあい人材紹介）は地域で働きたい方を募集して有償ボランティアとしてサービス提供していただいております。

Ｑ：ささえあいコミュニティビレッジの会員の基準はありますか。
Ａ：コーシャハイムの方はもちろん、コーシャハイム以外の方も、ポスターやホームページ等で来てもらい会員になっていただいております。いろいろなイベントをしている中で募っています。

Ｑ：会員登録していなければ受けられないものとそうでないサービスはありますか。
Ａ：会員でなくても基本的に安価な生活支援サービスを受けていただけますが、会員であれば地域イベント等の情報提供を行っており、できるだけ会員登録を進めております。

教室型発表　第３分科会　進行役・助言者

小池　高史（日本大学文理学部社会学科助手）

村田　幸子（福祉ジャーナリスト）

教室型発表　第４分科会

協働・連携/働く・社会に参加する

進行役・助言者
森本　修三（東京医療保健大学医療保健学科医療栄養学科教授）
今井　康明（株式会社すずらん代表取締役）

	発表者	所属	テーマ
1	晴山　和幸	株式会社サンケイビルウェルケア・ ウェルケアガーデン馬事公苑	生活の回復
2	徳永　宣行 南大路　直子 鳥居　佐智子 丸茂　典子	世田谷区介護サービスネットワーク	地域包括ケアの実現のために ～私たちができることを考える～
3	宮田　眞治 櫻井　宗一郎	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 自立生活支援課	世田谷区生活困窮者自立相談支援事業の現状と今後の課題 ～モデル事業から本格実施へ～
4	山内　聡	社会福祉法人 世田谷ボランティア協会 福祉事業部	障害のある方が働くために必要なものは・・・？
5	和泉　拓 渡辺　三恵子	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	口から食べる機能の維持における専門機関との連携の効果報告
6	脇濱　由佳	下馬デンタルクリニック	お口周りの筋肉を鍛えて、嚥下力ＵＰ！

生活の回復

㈱サンケイビルウェルケア・ウェルケアガーデン馬事公苑　晴山　和幸

【目的】
有料老人ホームにおける多職種連携の自立支援介護の実践。
【実践内容】
大腿骨頸部骨折後の廃用により、移動は車いす全介助。食事はミキサー食で要介助。誤嚥性肺炎のリスクがあることから吸引が必要な状態。排泄は尿意便意なく、常に失禁状態でオムツ使用。いわゆる「寝たきりの状態」であった要介護高齢者に対し、水分ケアによる覚醒状態の向上、食事形態や義歯の見直しによる食事摂取量および栄養状態の改善、下剤に頼らないトイレでの自然排便、学習理論に基づいた運動などを各職種で連携し、プランの修正をしながら行った。
【結果】

	入院時、入居初日	３か月後
水分	１日６００ｍｌ 点滴にて補液	１日平均１３００ｍｌ 覚醒レベルの向上 会話の内容がはっきりしてきた。
食事	ミキサー食 トロミ剤使用 食事介助必要	常食、トロミなし 自力摂取 栄養状態が改善
排泄	尿意・便意なくおむつ使用 下剤使用 就寝前センノサイド２錠 毎食後、マグミット２錠	下剤の中止 座位排便 生理的排便獲得
運動	寝たきり	日中の離床 歩行の再獲得

【考察】
脱水、低栄養、低体力、不適切な食事形態、むせ、食事時の姿勢不良、排便時の姿勢不良、義歯の不具合、自立に繋がらない介助方法など、ご本人の状態に悪影響を及ぼす要因を個々ではなく包括的に全職種でアプローチすることにより改善がみられた。プランに対するご家族の理解や、ご本人のまた元気な状態に戻りたいという気持ちも大きな力となった。今後もホームとして多くの方に機能の回復はもちろん生活の回復をテーマとし、取り組みを続けていきたい。

＜質疑応答＞

Ｑ：食事の場面で、入居当初はミキサー食だったが、その後常食を食べることができるようになったとありますが、そこに至るまでにどのようなことをしたのか、具体的に教えてください。

Ａ：まず、実践するにあたりプランを立てました。

・覚醒水準を上げ、口腔運動機能を向上し、唾液も多く分泌されるよう水分摂取量の増加を目指し、入居前の１日平均 600ｃｃから 1500ｃｃに増やす。
・足底を床に接地することで咬合力を最大にするため、普通の椅子に座って頂き、正しい座位をとっていただく。
・ムセの予防、食の認知と、自分のリズムで食べることを促すため、食事介助をしない。
・咀嚼を保証するため義歯を調整する。
・活動量をあげるため日常生活の移動から歩行を取り入れる。
・繰り返し噛むことで咀嚼を促進でき栄養価も高い常食を提供する。

こういった事を行い問題なく元の当たり前の食事に戻りました。

Ｑ：一人に対してそんなに長く時間をかけるのは大変だと思いますが、いかがでしょうか。

Ａ：考え方だと思います。最初のうち多少時間がかかったとしてもご入居者お一人おひとりが元気になっていけば結果、介助者の仕事や負担は減っていきます。当ホームでは今回の事例の方に限らず、他のご入居者にもこういった個別のケアを実践しております。

地域包括ケアの実現のために　～私たちができることを考える～

世田谷区介護サービスネットワーク　徳永　宣行
南大路　直子
鳥居　佐智子
丸茂　典子

世田谷区介護サービスネットワークは、世田谷区内で介護サービス等を提供している事業者で構成されている団体である。介護サービスの発展と活性化、サービスの質の向上などを目的として、様々な活動を行っている。
平成２７年１０月末現在で３５０を超える事業所が加入している。

現在、世田谷区において「地域包括ケアシステム」の構築のために様々な取り組みが行われている。支援を必要とするあらゆる人が、住み慣れた地域で、いつまでも安心して暮らし続けられる地域社会の実現を目指している。

世田谷区介護サービスネットワークでは、地域福祉を担う一員として、介護事業所等は何ができるのか、何をするべきなのか考える機会が必要だと考えた。

世田谷区は人口８８万人を抱える大きな自治体のため、世田谷、北沢、玉川、砧、烏山の５地域に分けて、地域ごとの特性を踏まえながら事業所から意見を募ることにした。
平成２７年２月１４日：玉川地域、２月２５日：世田谷地域、３月１１日：烏山地域で「地域包括ケアを考える集い　～地域から・業種を超えて～」を開催した。「地域包括ケアシステムの一員として私たちのできること。」をテーマにワールドカフェ方式によるグループワークで、多くの人と意見交換が出来るようにした。

各回とも様々な職種の方々が５０名以上も集まり、関心の高さをうかがい知ることができた。そしてグループを移動しながら、活発に意見交換がなされていた。出てきた意見としては「地域の人と挨拶をする」といった基本的な人間関係の構築から始まり、「地域のお祭りや防災訓練に参加する」「あんしんすこやかセンターと連携を深める」「地域の社会資源を知る」「自分たちで住民参加のイベントを企画する」など様々なアイデアがでた。参加者からは介護の事だけでなく、たくさん意見交換ができたと好評だった。

地域包括ケアシステムといっても、まだ具体的にイメージが出来ている人は少なかったように思えた。また、誰が中心となって多種多様な関係性を繋いでいくのかはっきりしていないように思える。

今年度、世田谷区介護サービスネットワークでは、各地域で活動の中心となる地域部会を創設した。今後は具体的な活動を通して、地域での認知度を高めて、介護事業者、地域住民、医療関係者、行政、ＮＰＯなどと今まで以上に交流の場を作り「顔の見える関係」の構築のために中心的な役割を担いたいと考える。
そのためには、あらゆるところで情報発信をしていかなくてはいけない。

＜質疑応答＞

Ｑ：昨年ミーティングを開いて３地域それぞれ特性があると言っていましたが、それについて具体的に教えてください。

Ａ：世田谷は２４６号線、環状７号線という大きな道路があり、その場所それぞれによって特性が異なってきます。例えば三軒茶屋は単身者が多いです。学生の街でもあるので、そこをどう取り入れて考えていくかというのが課題です。

Ｑ：「地域包括ケア」とありますが、話の内容の限りでは介護事業の集まりになっている気がします。

Ａ：ご指摘のとおりです。地域の主体である住民をどうやって取り込んでいくかということが課題です。

＜助言者コメント＞

・５つのエリアに分かれてそれをどう実行していくのかというのを考えて、それを今正に実行しているのは素晴らしいです。今後も続けて欲しいと思います。

世田谷区生活困窮者自立相談支援事業の現状と今後の課題
～モデル事業から本格実施へ～

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
自立生活支援課　宮田　眞治、櫻井　宗一郎

１　生活困窮者自立支援制度のスタート

経済状況の悪化に伴い、非正規雇用の増大、所得低下、失業の長期化、生活保護の増加、また、家族やコミュニティー機能の低下といった社会情勢のもと、社会的に孤立し経済的に困窮している、いわゆる生活困窮者が増え続けています。

さらに重複した要因（障害・病気・家庭環境・就労環境・多重債務・不登校など）から、生活困窮に陥る人も増加し、第一のセーフティーネット（社会・労働保険制度）だけでは対応できなくなり、平成２７年度から新しく生活困窮者自立支援制度がスタートしました。

２　世田谷区生活困窮者自立支援制度の取り組み

（１）自立相談支援
- ・生活困窮を脱却するために、訪問支援（アウトリーチ）も含め、早期に支援します。
- ・一人ひとりの状況に応じた自立支援計画を作成し、自立促進を図ります。

（２）就労支援
- ・キャリアカウンセラーが、相談に応じます。
- ・本人に合った求人を開拓します。
- ・ジョブトレーニングで就業前の様々な訓練を行います。

（３）住居確保給付金
- ・就職活動を支えるための家賃費用を有期で給付します。

（４）家計相談支援
- ・日常のお金の使い方を見直すために、家計表を作成し収支バランスを考え、家計の再建を図ります。また必要に応じて貸付の斡旋をします。

（５）受験生チャレンジ支援資金貸付
- ・高等学校および大学の受験料と学習塾等受講料の貸付を行います。

（６）生活福祉資金貸付
- ・所得の少ない世帯、障害者や介護を要する高齢者のいる世帯に対して、その世帯の安定と経済的自立を図ることを目的とした貸付を行います

３　本格実施から見えてきた５つの課題

（１）生活困窮の要因は、複合的であり、多面的な支援が必要
（２）緊急的な支援が必要
（４）孤立感の解消が必要
（５）子どもの学習支援が必要

＜質疑応答＞

Ｑ：孤立感の解消とは、どのように関わることになっていくのですか。「ぷらっとほーむ世田谷」に電話があって関わっていくのですか。

Ａ：再就職までの長期化、話し相手がいないなど、社会的に孤立していく人がいます。心地よく過ごせる場所が必要と言われていますので、茶話会を中心とした居場所支援を実施し、同じような境遇の方たちと交流する場を設置しました。「ぷらっとホーム世田谷」の利用者さんを対象に実施、自立への一歩となればと思い、週１回程度開催しています。

Ｑ：医療との関わりはありますか。

Ａ：医療機関に通われている方は多く、就職に関しても医療的な支援は必要なことから、継続的に通われるようお話ししています。

障害のある方が働くために必要なものは…？

社会福祉法人世田谷ボランティア協会　福祉事業部　山内　聡

1　はじめに

2013 年度から区の委託事業として世田谷ボランティア協会は世田谷地域障害者相談支援センター（以下センター）を受託しました。センターでは年齢、障害種別を問わず「障害で困っている」世田谷地域の相談を受けています。障害福祉サービスの利用、生活のことなど相談内容は多岐にわたり、2015 年 10 月までで約 350 人を超える方からの相談がありました。そこで出会ったひとりの精神障害がある方との出会いから学んだこと、考えたことをレポートします。

2　B さんのこれまで　～うつ病の発症～

B さんは発病前 20 年以上、栄養士として働いてきた。仕事は多忙を極め、人間関係のストレスも重なり 40 代の時に「うつ病」を発症し通院しながら働く日々が始まった。気分が重く出勤できない日も多く出てきたため、正職員からパート職員に切り替え、勤務時間を短縮するなど行ったが出勤することが難しく退職。その後もアルバイトを幾つか行うが、同じような気分症状により長く続けることができなかった。「働かなければ」と焦る気持ちばかりがつのり、食事もほとんどとれない日々が続き、救急車で運ばれ入院になる。

～私たちとの出会い～

退院後、「働きたい」という気持ちが強かった B さんは区やハローワークで相談できる場所を探した。いろいろな情報を得ることはできたが、何からどのように始めたら良いかも分からない中で時間だけが過ぎていった。そのような時、近所に相談支援センターがあることを知り、私たちとの出会いが始まった。

3　センターのかかわり　～相談支援の始まり～

面談は鞄の中から出てきた病院や相談先でもらった大量な書類の整理から始まった。B さんは「働きたいけど、再発が怖い」と先のことへの不安と働けない焦りの気持ちを切実に話し始めた。

支援は「スケジュールの整理」から始まり「精神保健福祉手帳の申請」「障害年金の書類作成、申請」「出かける場探し」を並行して進めた。

通う場は、もともとの職を生かせる「食」に関連する場が希望であったため、地域の障害者支援事業所に協力していただき、昼食作りのボランティアを始めた。クッキー作りや、レストラン厨房の手伝いを「仕事」としている作業所の利用も開始する。B さんと関係している事業所との話し合いも交えながら、１年かけて徐々に仕事の時間を増やしていった。

4　地域のさまざまな支え

地域の通う場を通し「働けるかも」と思い始めた B さんは、障害者就労支援センターの援助も得ながら障害者枠ではあるが、就職が決定する。就職後も、休みの日には食作りのボランティアや、相談センター、作業所に仕事のことを話しに足を運んでくれている。B さんにとって、今までは無かった「少し安心できるコミュニティ」が地域に出来たのかもしれない。

5　まとめ

病気により退職を余儀なくされた後の再就職を就職後のフォローも含め考えた場合、安心して長く働くための環境作りは、相談支援、障害福祉サービスなどのフォーマルなサービスのみでは難しい。再就職がゴールではなく、B さんの希望する暮らしを維持することに、支援の主軸を置いた。ボランティア活動、作業所、相談などの地域の支え。何よりも B さんの人柄が、多くの支援者を繋ぎとめ、緩やかな支援ネットがコミュニティの中にできた。

このことを通し、障害によりその人が求める生活に支障をきたす現実と直面したとき、そのなか地域で暮らしていくということは、「支援機関」「その人をとりまく地域と資源（インフォーマルなもの）」「その人が作ってきたつながり」を細く長く、その人と紡いでいくことで少しずつ形になるものと考える。

＜質疑応答＞

Ｑ：世田谷地域障害者相談支援センターへ相談にくる多くの方の支援は、相談センターが全てを抱え行っているのでしょうか。相談者が増えていく一方と感じたので…。また、支援に終わりはあるのでしょうか。

Ａ：相談支援センターのみで支援を全て担っているわけではありません。ケースによって様々ですが、ご本人はもちろん、地域の関係機関も含め、皆さんとともに考えていくような働きかけを行っています。

よって、相談支援センターが永遠にかかわるわけではありません。必要に応じ、地域の機関に橋渡しをしながら、ともに進めていきます。しかし、何かあった時はセンターへまた相談できることも伝えながら、その方の「困った」をともに考えていきます。そのような意味では「終わり」はないのかもしれません。

Ｑ：地域の関係機関などに相談するとのことですが、相談できるまでの関係を作るのは大変と感じます。関係作りはどのように行っているのですか。

Ａ：地域の関係機関が主催している会議や企画に出席し「顔がつながる」関係作りを心がけています。よって、必ず足を運び会って話しをするなかで地域のことを一緒に考えていけるようにしています。また、障害者相談センター主催の企画のなかでも「地域の困りごと」をともに考える機会作りをしています。

＜助言者コメント＞

・素晴らしい発表をありがとうございました。

＜質疑応答＞

Ｑ：嚥下内視鏡をした際に、初めから詰まっていた場合はどうするのですか。

Ａ：食事は気管に詰まることはないが、周囲に付着しているような状態です。健常者で喉に物が詰まっている人はおらず、中に食べ物がある時点で嚥下反射が起きています。一番怖いのは窒息で、食べ物をしっかり飲み込むまでの過程が重要です。

Ｑ：親を誤嚥による肺炎で亡くした経験があります。ＶＥ検査は芦花ホームに入所していなくても行えますか。相談には乗ってもらえるのでしょうか。

Ａ：歯科大学であればどこでも検査が可能です。かかりつけの歯医者、耳鼻科、内科の先生の紹介や、歯科医師会に直接来ていただくことも可能です。検査機器が小さいので訪問で行う場合もあります。

＜質疑応答＞

Ｑ：嚥下内視鏡をした際に、初めから詰まっていた場合はどうするのですか。

Ａ：食事は気管に詰まることはないが、周囲に付着しているような状態です。健常者で喉に物が詰まっている人はおらず、中に食べ物がある時点で嚥下反射が起きています。一番怖いのは窒息で、食べ物をしっかり飲み込むまでの過程が重要です。

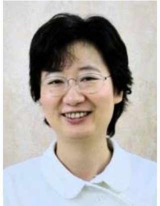
Ｑ：親を誤嚥による肺炎で亡くした経験があります。ＶＥ検査は芦花ホームに入所していなくても行えますか。相談には乗ってもらえるのでしょうか。

Ａ：歯科大学であればどこでも検査が可能です。かかりつけの歯医者、耳鼻科、内科の先生の紹介や、歯科医師会に直接来ていただくことも可能です。検査機器が小さいので訪問で行う場合もあります。

「お口周りの筋肉を鍛えて、嚥下力ＵＰ！」

下馬デンタルクリニック　脇濱　由佳

口腔ケアには、お口の清掃だけではなく、お口の機能を改善することも含まれています。お口の機能訓練は、日ごろ意識して行うことで大きな効果が得られます。お口の筋肉はどういう働きがあるのか、唾液腺マッサージの効果はどういうものか理解して頂き、「お口の体操と発音、歌」を体験して頂きます。嚥下力を鍛えると、誤嚥性肺炎の予防や認知症の予防にもなります。楽しく続けられる方法として、提案させて頂きます。



プロフィール
脇濱由佳
東京歯科大学卒業。
世田谷区下馬にて「下馬デンタルクリニック」開業（2000 年）
http://shimouma-dentalclinic.jp/
「地域密着型、バリアフリー」世田谷ボランティア協会会員。
日本歯科東洋医学会会員。

地域住民の方に「健康」について自ら考え、行動していくためのきっかけづくりを「カフェ」を通して学んで頂いています。多職種とのコラボ企画もあります。

① 「いきいきカフェ」主催　（2013 年 9 月より。）世田谷区の集会室にて 1、2 か月に 1 回の開催。
② 「市民と介護を考えるカフェ『オリーブの木』」主催（2015 年 5 月より）東京府中市の教会にて、毎月第 3 日曜日午後 2：30～4：30 開催。

① ②の連絡先はともに下馬デンタルクリニック
電話：03-3414-8606、脇濱まで。

「いきいきカフェ」第 6 回「高齢者で口腔機能が低下しているひとの食事」管理栄養士と歯科のコラボ。

市民と介護を考えるカフェ「オリーブの木」
第 5 回「笑いヨガと認知症予防体操で賢幸加齢を目指そう！」府中市 NPO「学びのサロン」とのコラボ。

＜質疑応答＞

Ｑ：「パタカラ」が基本と言っていましたが、何が基本となっていますか。

Ａ：パは口唇音、タは舌前方を使う、カは軟口蓋を使い、ラは舌尖を使うという口の基本全てが入っています。好きな歌でも利用できます。

Ｑ：スライドの歌詞をホームで使いたいです。

Ａ：お送りします。

Ｑ：この活動は多職種との関わりとありますが、どのような関わりですか。

Ａ：「いきいきカフェ」という「住民と健康を考えることを目的としたコミュニケーションカフェ」を行っています。そこで、お口の体操と歌を取り入れたテーマで、音楽療法士の方とコラボ企画しました。

教室型発表　第４分科会　進行役・助言者

森本　修三（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授）

今井　康明（株式会社すずらん代表取締役）

教室型発表　第５分科会

一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者
後藤　広史（日本大学文理学部社会福祉学科准教授）
田邉　仁重（世田谷区社会福祉協議会権利擁護支援課長）

	発表者	所属	テーマ
1	長見　亮太	社会福祉法人 せたがや樫の木会　上町工房	Ａさんとの関わりを通して支援者としての基本的姿勢を振り返る
2	岩澤　辰洋	社会福祉法人 せたがや樫の木会 わくわく祖師谷	エピソードからＡさんをアセスメントする
3	川名　あき	社会福祉法人 せたがや樫の木会　下馬福祉工房	エピソードを通して全体像をアセスメントする
4	深佐　律子 山崎　正春	優っくりデイサービス喜多見	対応困難ご利用者様へ立ち向かえ ～ご利用者様へ何が出来るかその 一事例～
5	斉藤　由子	社会福祉法人 せたがや樫の木会　上町工房	心情に着目した捉え方
6	藤野　ひろみ	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所	性の悩みを抱えている利用者への支援

Ａさんとの関わりを通して支援者としての基本的姿勢を振り返る

社会福祉法人せたがや樫の木会　上町工房　長見　亮太

１．目的

A さん（女性、20 代、知的障害、愛の手帳 3 度）は人と接することは好きだが、発語の弱さから気遅れすることがあり、会話の多い他利用者に苦手意識を持っている。仕事に対して真面目に取り組む。またおかしな行動をとる人を非難することから、非難されてきた自分がいるように思われる。時に怒りっぽさがあり、すぐ怒る人、との周囲の印象からさらにマイナスの関わりとなる悪循環があった。

なぜ A さんがそうなるのかという A さんの課題から、支援者自身の関わりの姿勢はどうだったか、という支援者の課題に視点を置き換えて、これまでの支援経過を振り返る。

２．実践経過

4 月から新担当に対して「どんな人？」との気持ちで積極的に声をかけてくれる姿があった。また注目されていないと感じると、気にかけてほしい気持ちからマイナスの行動を見せて反応を伺うような場面が見られた。作業中の立ち歩きや仕事選びなどはこれまでに見られない姿であり、指摘する場面が多くなってしまう。マイナスの行動に注目されても充足感は得られないと考え、見守る関わりをとったので、行動はしばらく続いた。

関わりに難しさを感じ、指摘が強くなったり、逆に淡々と接することもありながら、なぜ A さんは怒りっぽくなってしまうのか、マイナスの行動になってしまうのか、との視点で考えることが多かった。

３．支援者の変容

ある時のケース会議での話から、そうした A さんとの付き合いにくさは、こちらが印象として抱く付き合いにくさであり、A さんがどうなれば付き合いやすい人になるか、という視点であったことに気が付いた。視点を変えれば、A さんが心地いいと感じる付き合いは何か、そのためにどんな工夫が必要か、という支援者としてごく基本的な姿勢が欠けていたということであった。

気にかけてほしい、甘えたい気持ちを承知して、どう応えていくか。当たり前のことだが、その都度の言葉かけを丁寧に行っていく。真面目な仕事ぶりに感謝を伝えていく。A さんの関心事を知り、働きかける。こうした関わりを重ねることで、マイナスの行動が無くなりはしないが、こちらが感じる付き合いにくさは大きく軽減された。

４．考察

A さんの暮らしを支える立場として、充足感、自己肯定感、大事にされている自分を感じられるか、という視点でいかに心地いい関わりを重ねるか。うまくいかない関わりもあるが、自身の支援者としての基本的な姿勢について振り返る機会となった。

＜質疑応答＞

Q：Ａさんの課題が目に入ってしまうというところで、グループや職員がＡさんと関係をとるエピソードはありますか。

A：関係を持ちにくい時、大変さというところを言い合う時に、もっとシンプルにその人のことを好きになってみればいいと言われました。視点を変えてみないといけないと思いました。

朝一番に会う時、一日気持よく付き合うために、自分から挨拶をすることにしました。それによってＡさんの態度も柔らかくなってきました。また、同じ話が繰り返される時は、Ａさんは話すことで満たされているのなら、寧ろ自分からその同じ話を切り出してもいいと思いました。

Q：担当制というのは、１グループに１人がつくということですか。

A：１グループ６人制で担当します。担当としてグループを受け持つことで、職員は責任を自覚でき、利用者は安心して頼ることができると思います。

エピソードからＡさんをアセスメントする

社会福祉法人せたがや樫の木会 わくわく祖師谷　岩澤　辰洋

はじめに

私は異動によりＡさんに出会った。Ａさんは、積極的な面がある反面、独りよがりな行動が見られ、私との関係では挨拶もままならず、彼の抱えている課題、私の関わり方を考えながら見守ってきた。この半年のエピソードからＡさんのアセスメントをしてみる。

１．Ａさんの印象

30代男性、愛の手帳３度、養護学校卒業後、区立作業所へ十余年間通所、その後、わくわく祖師谷（Ｂ型）へ異動、現在に至る。

いつも朝早く登所し他職員と雑談しているが、私の挨拶には反応が返ってこず、淋しく感じていた。携帯の操作や手の噛みダコをかじりながら、笑顔で仲間と接する姿が目についた。

２．エピソード：先任職員との違い―片付け

一緒に車で納品に行く職員が、コップの片付けを促すとすぐに、「はーい、忘れてた」と応じている。しかし、私が作業のゴミ片付けを促しても、スルーされてしまう。

そこで作業前に「仕事は準備、作業、片付けがあります。一緒に片付けましょう」と伝えておいた。作業後、「いっぱい出来たね」と認め、一緒に片付け「綺麗になったね、ありがとう」と伝えた。他職員から「初めて掃除しているのを見た、すごいね」と言われていた。

3．エピソード：事前学習への参加

栞の読み合わせに参加するなど集団参加が苦手なＡさんのイメージが変わった出来事だった。

４．なぜ、挨拶を返してくれないのだろうか

Ａさんの照れが影響しているのだろうか、それとも何か・・・。しかし、他職員がいない折り「岩澤さん、○○の作業をやりたいけど・・・」と話しかけてくれた。Ａさんにとって私は、聞きやすい人がいない時に対応してくれる人であると感じる。Ａさんとの距離は何だろうか。

５．変化の兆し

夏頃から朝の会に参加していることが多いと感じ、自分から誕生カードを初めて仲間のために書いた。一日だけだが、昼食を皆と一緒に食べた。

また、「ドライバー、取りに行く」など自分のことを報告してくれることもあった。目線を合わせないで、通り過ぎることと比較すると、正直うれしい。

作業では、予定ボードをチェックしていることに気づき「○○と●●の作業があるけど、どちらをやりたいですか」と作業希望を聞いて、作業調整を図ることが増えた。

6．Ａさんは

Ａさんは恥ずかしがり屋で、話を楽しめる方である。集団と関わりたい気持ちがあるが、集団活動が苦手で一人で過ごすことが多い。

おわりに

エピソードに出会って、行動に着目すると本人の問題と解釈しがちであるが、心情に着目すると、私との関係の問題と解釈でき、Ａさんの生き辛さと思えば、応援、環境整備に力点が置かれ、Ａさんの持っている力を引き出したいと強く思う。

＜質疑応答＞

Ｑ：変化はどのくらいのスパンでありましたか。

Ａ：４月からのエピソードで、夏頃に変化がありました。また、宿泊の事前学習のエピソードは１０月のものです。

Ｑ：アセスメントについて教えてください。

Ａ：昔からあるものを使用しています。内容については更新されていません。

Ｑ：独りよがりにならないようにしていましたか。

Ａ：Ａさんの抱えている不安定、安定というところを職員と共有していました。

Ｑ：発表者自身の支援はどのようなことをしていますか。

Ａ：Ａさんと共に作業を考え、作業調整を図ったり、宿泊の事前学習の栞読みのように自分の役割だと受けとめてもらえることを目指しています。

エピソードを通して全体像をアセスメントする

社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房　川名　あき

知的障害のある方を支援するにあたり、アセスメントは重要な出発点となる。

聞き取りでのアセスメントが難しい知的障害の方に対しては、日々のやりとりやそこでの情動の行き交いを通して、その人が、何を思い、何に困っているのか等を探っていくことが必要である。今回は、ひとつの印象的なエピソードを通して、アセスメントについて考察する。

1、事例の概要（Ａさん、10 代後半、女性、広汎性発達障害、愛の手帳 3 度）

通所開始から半年。苦手な音声が耳に入ったり、自分への否定的な雰囲気を感じ取ると、相手に近づいて行って腕などを強く握り、時には引っかいてしまうことがある。それを支援者から制止されることによって気持ちが高ぶり、周りにいる人にも手が出てしまう。

クッキー作りに関心があり、厨房で他の人の作業を眺めるのが好き。袋詰め等の作業は、一度手本を見ると間違いなくスピーディに仕上げることができる。

2、エピソード

気になる人に手を出そうとして制止され、そばにあった物で他の人を叩いてしまったＡさん。場所を変えて私と二人でクールダウンを試みる。「やっつけろー」と独り言をいいながら行ったり来たり。そのうちに泣き出す。やってしまった、どうしてこうなるんだろう、そんな気持ちがこちらに伝わってくる。

徐々に落ち着きを取り戻し、「○○はどこ？」とさきほど周りの人を叩いた道具の在り処を訪ねてきた。また叩いてしまうのではと考えた私は、「わからない」と応え続けたが、納得できないＡさんは、とうとう私の頬を引っかいた。

その瞬間、Ａさんの心がグッとこちらへ傾く。「痛い？ごめんなさい。」と言って私の頬を撫でる。混乱の極みで、そこまでしなければ収まらなかったつらさを感じ、しばらく二人で静かに立ちすくんだ。

それ以来、Ａさんが私に対して手を出すことはない。

3、Ａさんの全体像

感受性が鋭く、特に人からの刺激に敏感である。気になって近づくものの、感情や自他が未分化なことにより上手く関われない。制止されることが多いため、いつも緊張し、不安な気持ちでいる。そんな中にも、支援者を頼る素直さがあり、情緒的な映し返しが伝わる人である。

4、考察

アセスメントの目的は、単なる能力評価ではなく、その人らしさを通して、支援すべき課題や可能性を探ることである。そのために、各領域の実態把握を行い、それをつなぎ合わせてその人の全体像を捉える。その際に、有力な手がかりとなるのが、エピソード記述である。そして、その全体像から日々の支援課題を絞り込んでいく。そうした作業を経ることで、現象に振り回されず、心情に着目した大人への歩みを支援する土壌が作られると考える。

＜質疑応答＞

Q：支援の方向性が見えたとのことですが、以前と比べてどのように変わりましたか。

Ａ：人と距離を置くということから、軸になる人を頼りに“仲間の中で過ごす”ということへと変化しました。

Q：施設での取り組みはありますか。

Ａ：自分が感じたことをエピソード記述にし、職員ミーティングで共有し、アセスメントの見直しにつなげています。

Q：Ａさんの長期的な目標はありますか。

Ａ：たとえばガイドヘルパーとの外出やショートステイの利用等、人との出会いを経験することで、少しずつ社会性が育っていくのではないかと考えています。

対応困難ご利用者様へ立ち向かえ～ご利用者様へ何が出来るかその一事例～

発表者　優っくりデイサービス喜多見　深佐　律子、山崎　正春
共同研究者　優っくりデイサービス喜多見　渡部　嘉章

優っくりデイサービス喜多見（以下「デイ」とする）は定員 12 名の認知症対応型のデイサービスです。看護師・ST（言語聴覚士）・介護福祉士・認知症ケア専門士など専門職の配置を多くし、医療処置が必要なご利用者様や介護度が重い認知症の方の受け入れを積極的に行っています。

【利用者紹介・受け入れまでの経過】

92 歳　女性　要介護５

今年１月までは杖歩行で、食事も問題なく経口摂取されていたが、インプラントから歯髄炎で入院され、胃ろう造設となっています。6 月退院となり認知症状の進行から常に「アー！」と大声をだし、向精神薬を処方されるが眠気が強いと家族判断にて中止されました。また、デイサービスも週５日で開始されるが、大声を常に張りあげている為他の利用者様からのクレームが強く通所中止となり、私共のデイに週２回、他デイサービスに週３回の開始となりました。

【来所時の様子】

来所拒否があり、乗車時は職員の腕をつねったり足を蹴ったりされ、フロア内でも常に「アー！」「痛い！」「気持ち悪い！」「あのバカ！」など大きな声で叫ばれ他のご利用者様も困惑されていました。また、職員をつねる引っ掻く行為もあり、職員もどう対応したら良いのか悩んでいました。

【大声の原因として考えられる事】

１．腹部膨満が著明の為、食事摂取や胃ろう注入するとさらにお腹の張りが強くなり痛みが増大、また苦しくなる

２．職員が側を離れると声をあげられる事から精神的不安感が強く、また寂しさを制御しきれない様子が窺える

【デイの取組】

１．に対しては、ご家族様以外にも訪問看護・他デイ・往診医と連携を取り、食事内容を高カロリープリン・ジュースへ変更、鎮痛剤や安定剤の調整など試行錯誤しています。

２．に対しては、可能な限り側について体をさすったり、昔の趣味を生かして人形作りや絵画、千切り絵や塗り絵などを提供することで、声を上げずに１時間程度集中して取り組めています。同じ「アー」でも色々な意味があることがわかり、私達も何を訴えているのか少しづつ理解できるようになりその都度対応しています。

【結果】

痛みの原因がはっきり分からない為、訴えが消失する事は難しいですが、デイでいかに１日穏やかに過ごして頂くか課題であり、使命であると考えています。

＜質疑応答＞

Ｑ：素晴らしい取り組みだと思います。Ｋさんはここ以外にもサービスを利用していますか。

Ａ：現在のサービスを利用される前に相談したサービスは受け入れられず、今はもう１件と相談しています。ケアマネジャーや世田谷区と話し合いに入っています。

Ｑ：Ｋさんの最初の顔と最後（１０月）の顔が大きく変わっています。

Ａ：今も検査入院しています。元気ですが、２～３ヶ月入院する予定です。

Ｑ：Ｋさんのご家族も苦労しているのではないですか。

Ａ：自分たちで看ていくつもりで、何かあった場合に医師と協力をしています。他の事業所とも共有できればいいと思っています。

心情に着目した捉え方

社会福祉法人せたがや樫の木会　上町工房　斉藤　由子

１．はじめに

知的障害のあるＡさんの言葉や行動をどう解釈するかにより、個別支援計画が変わり、支援のアプローチが変わり、そしてＡさんの様子も変化する。エピソードや個別支援計画を通して、一人一人に即した支援について考察する。

２．Ａさんをどう捉えるか

Ａさん　２０代　女性　愛の手帳２度

＜エピソード１～できる自分を発揮する～＞

チラシやカードの封入作業。４点の材料の封入を、まずは２点封入のみで依頼していくが、「これやったら次何する？」「終わったらあれ私がやろうか」「任せてよ」と次々にこなされていく。しかし、ペースが上がるにつれ、入れた袋をカゴにポイと放るような動きになったり、入れる向きが反対になったりしている。また、7 名程のグループで、仲間や職員とのおしゃべりを潤滑油として活用しながら作業に取り組んでいるが、全体がざわついてくると、他利用者の話を「うるさい、○○は黙って」といった言葉や表情の硬さが見られ出す。

３．個別支援計画の見直し

①これまでの個別支援計画

『持ち物の管理を毎日繰り返し取り組む、作業を間違えたり雑にならないようにする、言葉使いに気をつける』が目標となり、『出した物、私物はその都度声をかけて片付けてもらう、作業を間違えた時はその都度声をかけやり直してもらう、言葉使いが悪い時は注意し言い直してもらう』といった支援内容を引き継いできた。言動のみの着目から、本人の問題として行動修正の視点に偏り、指摘をして修正を求めるという方法であった。

②個別支援計画の見直し

本人の全体像や思いをどう反映するか、またマイナスの状況はどうしてそうなるのか、という障害特性や青年期心性への理解や配慮を盛り込む意図で検討した。

日々のエピソードから、全体像を『作業にとても意欲的、積極的に楽しめることがたくさんあるが、周囲の雰囲気、言動にも繊細に影響されやすい』と捉えた。揺れ動くマイナス面の背景として、主体が確立できない自信のなさが想定される。Ａさんの場合はまず、自分の持ち味を自覚できるように、できることをしっかりと認め、肯定的な関わりを積み重ねて、自信の土壌づくりを優先する立場に立った。そこから、『作業で充実感を得る』『仲間と楽しく付き合う』という目標が出てきた。

４．まとめ

Ａさんの言動の解釈の仕方を個別支援計画に反映し、肯定的な関わりが増えたことで、Ａさんの変化がある。その変化が、支援者にとっても力となり、よりＡさんの思いに自然に寄り添いやすく、プラスの循環が生まれる下地となる。行動に着目するか、心情に着目するかで、観察での見方が変わってくる。それは、その現象の解釈の違いとなり、こうあって欲しいとの思いの違いにつながる。再アセスメントの軸になる視点であった。

＜質疑応答＞

Ｑ：事業所全体で同じですか。

Ａ：事業所全体で、支援の方針やそれぞれの具体的なアプローチの仕方について話し合い、同じ視点に立った支援ができるようにしています。

Ｑ：本人を叱ったり否定したりしない、思いを受けとめる時の対応で、しんどい時もあると思いますが、前向きに取り組んでいけるのはなぜですか。

Ａ：一番辛かったり、大変に感じたりしているのはご本人である、ということが分かれば、自然に気持ちに沿って支えたいという思いになれます。そのためにも、まずはよく相手のことを知る事が大切です。また上手くいかないこと、しんどいと思うことを職員一人で抱え込まずに、職員間で話し合い、チームとして支援していくことを目指しています。

性の悩みを抱えている利用者への支援

社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所　藤野　ひろみ

１．事例を取り上げた理由

主に知的障害者が通所する就労継続支援Ｂ型の事業所である世田谷区立世田谷福祉作業所では、性の悩みを抱えている利用者(Ａ氏・男性)への支援を試行錯誤しながら進めてきた。「性についての支援」はＡ氏が「どう生きていきたいか」という生き方に寄り添う支援であり、Ａ氏の支援者全体で包括的に支援をすることが必要であると考えた。そこでＡ氏が安心して地域で暮らしていくために生活基盤を整えながら、関係機関との連携を深め役割を明確化した。今回はＡ氏を支える支援機関の連携強化によって得られたことと、新たに見えてきた課題について報告する。

２．取り組み内容

①関係者が連携する体制作り
②働く意欲の向上に主眼をあてた支援
③強み(責任感がある)を活かした支援へ
④服装のルールづくり
⑤その他

３．実践の経過と今後に向けて

「女の子の格好をしたい」というＡ氏の希望を支援者が共有し連携を強化したことで、本人主体の一体的な支援をすることにつながった。また、作業所だけでは解決の難しい支援課題が生じたときに、支援機関で連携して課題の解決を図る仕組みが、他のケースにおいても形成されるようになった。他法人のグループホームへ転居したり成年後見人を立てたりとＡ氏を取り巻く環境も変わり、紆余曲折ありながらも、Ａ氏の生活が安定してきたと感じている。Ａ氏のかけがえのない人生をＡ氏らしく生きることができるよう、これからも支援機関と連携しながら支えていきたい。

Ａ氏の「女の子の格好がしたい」という希望は、Ａ氏が持っている性の在り方である。Ａ氏が抱える「生きづらさ」へのアプローチは、まだまだ不足している。当法人の理念や行動規範にもとづき、「あるがままに理解し」「より深い理解のため、内面に目を向けていく」ことを指針としながら、「生きづらさ」解消へのアプローチをこれからも継続していく。

正しい情報が周囲にないことで偏見を持つようになる。私たちが社会に対してできることとして、性が多様であること、差別すべきものではないことを一人でも多くの人に伝えることである。性をタブー視せず、少数者の人たちも尊重される社会になれば、Ａ氏の「生きづらさ」の解消につながるのではないかと考える。

＜質疑応答＞

Ｑ：職員の方が理解を深めていくことについて、一緒にいる利用者さんに対してどういうアプローチをしていますか。

Ａ：施設長が、今後Ａさんが愛称を使っていくことを利用者と家族に伝えました。しかし、本人も名前を本名で名乗ったり、配布物での記載については毎回どちらの名前を使うのかを相談して決めていることもあり、利用者にはまだ理解を得られていないのが現状です。

＜助言者コメント＞

・なかなか出合うことのない事例に、正面から取り組んでいることに対して、すごいことであると思いました。

教室型発表　第５分科会　進行役・助言者

後藤　広史（日本大学文理学部社会福祉学科准教授）

田邉　仁重（世田谷区社会福祉協議会権利擁護支援課長）

教室型発表　第６分科会

認知症とともに豊かに生きる/一人ひとりに向き合った実践

進行役・助言者
荻野　太司（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）
中原　ひとみ（特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長）

	発表者	所属	テーマ
1	川田　麻衣 芦澤　優子	世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム上北沢	身だしなみプログラムでいきいきと
2	高柳　杏里 新谷　枝美子	優っくりグループホーム池尻	社会と繋がる ～認知症入居者と地域住民との関係作りの為の取り組み～
3	岡崎　一也 松山　友香	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 芦花ホーム	主役になり自分らしくいる。 ”今”の気持ちを大切にする認知症ケアの実践
4	枝　　孝治 加藤　貞行	世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム 上北沢ホーム	いらっしゃいませ！お子様たち！ ～世代間交流を活用した生きる力の支援～
5	掛野　祥子 中野　剛	特別養護老人ホーム 等々力の家	骨折ゼロに向けた原因分析に基づく取り組み
6	土田　悠	グループホームかたらい	慢性腎不全を抱えるＡさんのグループホームの生活について
7	岩渕　光代 武者　卓也 阿南　雄 酒巻　洋佑 小澤　誉志子	介護老人保健施設うなね杏霞苑	みんなで一緒にエイエイオー！ ～すべてがリハビリ～

身だしなみプログラムでいきいきと

発表者　デイ・ホーム上北沢　川田　麻衣、芦澤　優子
共同研究者　デイ・ホーム上北沢　石水　優子、山本　清恵

【目的】
デイ・ホーム上北沢は「認知症対応型通所介護」で今年７月から整容プログラムを実施している。整容プログラムの取り組み内容や課題について報告する。
【実施内容】
デイ・ホーム上北沢は、定員４５名の一般型と定員１２名の認知症対応型通所介護を実施している事業所である。
今回、認知症対応型通所介護での新しいプログラムとして「整容プログラム」を実施した。午前中のプログラムとして行い、手洗いから始まり、ホットパック、化粧水・乳液を塗布。肩の体操などを行って、髪をとかしたり、男性においては、電気カミソリで髭を剃るといった、身だしなみを整える行為を出来るだけ自分で行っていただく活動を実施した。開始にあたり、利用者を褒める・楽しませる、そして、職員が楽しむ事を心掛けるようプログラムを提供した。
【結果】
プログラムを受けている利用者の変化
最初は、戸惑いながらも職員の手を借りてホットパックを行ったり、化粧水を塗布したりしていた方が、職員を見ながら真似をして、行えるようになった。また、自分から手を動かして参加されるようになった方もいた。
プログラムを提供していく介護職員の変化
介護職員の不安（本人・家族は、どのように感じているのだろう？）
新しいプログラムを行い、利用者が楽しんで参加している事で不安が解消された。
利用者を褒める事で、新たな利用者の表情を見る事が出来た。
【考察】
落ち着かずにすぐに立ち上がってしまう方が、鏡で自分の顔をしっかり見て化粧水や乳液をつけていた。利用者自身が持っている社会性（自分の姿を見て、周りから見られている事を意識する）と機能（化粧水等を自分の手で顔に付ける・腕を顔まで上げる）という力を引き出す事が出来たのではないかと考えた。本当は、出来るのだけれども行わなくなってしまった事で埋もれてしまった能力なのではないかと考えた。
【課題】
今後、プログラムの効果を評価できるように検討していく必要がある。

＜質疑応答＞
Ｑ：自宅での整容プログラムの方が良いのではないでしょうか。
Ａ：ご家族の手がまわらなかったりすることもあり、デイサービスでのお昼前の口腔運動の一環として取り入れています。

Ｑ：男性の通所介護の利用者は少ない中で、このプログラムへの男性の参加者は多いですか。
Ａ：毎日は行っていませんが、ほぼ参加されています。

Ｑ：認知症が重い方へのリスクはありますか。
Ａ：その時に利用するものだけを目の前に置くようにして、余計な物などは使用しないようにしました。

＜助言者コメント＞
・利用者のことも考えたプログラムで、どの様な効果があったのかわかりやすかったです。男性も女性も“綺麗にする”という意識は良いことです。“美しくする”ということをプログラムに取り込んでいて、素晴らしい取り組みだと思いました。

社会と繋がる～認知症入居者と地域住民との関係作りの為の取り組み

優っくりグループホーム池尻　高柳　杏里、新谷　枝美子

認知症という言葉が世の中に定着して久しいですが、認知症を正しく理解している人は少なく、認知症のイメージも決して良いものとは言えません。
社会と繋がっているということは私たちが生活していく上で当たり前の事ですが、認知症者は「認知症であること」や「施設に入居していること」で、社会との関わりを持つ機会を失ってしまっています。
私達の施設では、「入居者様に沢山の関わりを持ってほしい」・「地域の方々に認知症の方と接していただくことによって、認知症をもっと知ってもらいたい」等の思いから、入居者様と地域の皆様が交流できる機会と場所の提供、入居者様が社会との関わりを楽しめる環境作りに取り組んでいます。
「カラオケ喫茶」は地域の方向けに。カラオケを通し気軽に集える場として施設を開放しています。
年に二回、地域の皆様や入居者ご家族様の協力により集まった品物をバザー品として「ゆっくりマーケット」を開催。ご利用者様に準備から当日のお手伝いまで、役割を持っていただいています。
また、月に一度の喫茶店「カフェ・テイルームばぁば」を展開。グループホームのご利用者様にお茶菓子作りから当日の給仕役まで担っていただき、「認知症カフェ」として、入居者様と家族様・地域の方々が集える場となるよう開催しています。
他にもお祭り等地域の行事に参加したりと、認知症であっても・グループホームに入居していても、社会と繋がりを持った豊かな生活が送れるような環境作り、地域交流の機会を通し、地域の方々と認知症の方々が関わっていくことで、顔の見える関係作りを目指し活動してきました。
回を重ねる毎に地域の方々の参加も増え取り組みも定着してきましたが、参加する地域住民の年齢層の偏りなど様々な課題も見えてきました。
その課題を解決するために立てた新たな企画なども併せて発表したいと思います。

＜助言者コメント＞

・認知症の方が抱える問題を探りながら、利用者の方の時代背景を考えてケアをしていて、しっかり裏付けがある支援を行っている、とてもわかりやすい発表でした。課題も考えられていて良かったと思います。

・自分が運営している施設でも、認知症カフェの取り組みを行ってみたいと思いました。

主役になり自分らしくいる。“今”の気持ちを大切にする認知症ケアの実践

世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム
岡崎　一也、松山　友香

1. 目的

特別養護老人ホームにおける入居者への関わりとして主役体験（演出性集団精神療法）・音楽プログラム・認知症あるある（掲示・職員向け）・認知症ケア対応計画書（職員向け目標）の実践を通して“今”の気持ちに寄り添い自分らしく生活していただける事、ケアの質の向上を図る事を目的とした。

2. 実践内容

(1) 主役体験：月に１回、参加２名、時間 16 時～17 時（平成 25 年度から）
平成 27 年７月芦花高校にて高校生との体験交流として２名参加
(2) 音楽プログラム：月に 10 回位、参加１回あたり２名、時間 14 時～14 時半
(3) 認知症あるある：（職員向け啓発ポスター、２カ月おきに掲示）
(4) 認知症ケア大目標：「芦花ホームの主役はあなたです。」を 27 年度目標とした。
また月間目標を設定。

3. 結果

主役になり体験する事で適度な緊張感と演出によって参加された方は、物忘れがあっても楽しい生活ができることを実感し、主症状である物忘れが気にならなかった。うまく表出できなかった感情を表に出したことによって安堵感を得られるなど自信を持つことに繋がった。音楽プログラムはパーソナルソング（本人の好きな曲）を聞くことで当時の記憶が蘇り生き生きとした表情で歌うこともあり、情緒の安定化等の効果に繋がった。認知症あるある（職員向け啓発ポスター）・認知症ケア対応計画書（職員向け目標）は職員自身のケアの振り返りなど自己を振り返ることに繋がった。

4. 今後の課題と考察

主役体験、音楽プログラムにより、認知症の人を主体とした実践が行われ、参加者は普段の生活の中で笑顔や言葉が増える事、またストレスを軽減し自分らしい生活を送れる効果もあると考える。認知症あるある（職員向け啓発ポスター）、認知症ケア対応計画書（職員向け目標）を通しては職員にはいろいろな気づきが起こって、自己を振り返りができた。今後も本人の視点にたった認知症ケアができるように検討して行きたい。

＜質疑応答＞

Ｑ：主役体験について、ご利用者の中から体験していただく方を選択する時、どういった基準をとっているのですか。

Ａ:日常生活を上手く行えなかったり、不安を抱える方から選ばせてもらっています。

Ｑ：主役体験を終えてホームに戻って、変化したことはありますか。

Ａ：「良かった」と体験の話を何度も話すようになりました。

Ｑ：主役体験で得た楽しい思い出が残るのは、利用者にとって要介護状態が改善したりするなど良いことはありましたか。

Ａ：体験のことを何度も話される方、忘れてしまっている方など様々です。要介護状態が改善したような事例は見られませんでした。ただ、一瞬一瞬の気持ちを大切に関わり承認することで気持ちが穏やかになるということはありました。

＜助言者コメント＞

・介護をする中で、高校生に体験してもらうのは良かったと思います。これからは高校生や中学生、もっと幼い子どもたちも巻き込んで取り組み、交流をすることの大切さがわかる発表でした。

いらっしゃいませ！　お子様たち！
～世代間交流を活用した生きる力の支援～

発表者　世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム
枝　孝治、加藤　貞行
共同研究者　世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム
認知症ケア推進委員会

＜はじめに＞

上北沢ホームでは午後の昼下がり、定期的に子供たちの無邪気で賑やかな笑い声がフロア内に響き渡ります。昨今、幼児教育の一環として、高齢者施設での幼児との交流会や、幼稚園や保育所と高齢者施設が一体となった複合型施設も設立されていますが、上北沢ホームでも７年前から地域の子供たちとの交流を深め、施設を舞台とした定期的な利用者と子供たちとのふれあいの場を設けてきました。

この子供たちと利用者との定期的な「世代間交流」が利用者たちの生きる力を大きく支援し、そして地域文化の醸成にも大きく貢献するのではないかと考え、今まで実施してきた活動の中から感じたこと、発見したことを発表します。

＜活動内容＞

○『しゅうちゃん達と遊ぶ会』　毎月第１・３水曜日開催　14：00～15：00
近所の幼児兄弟による、体を使ったレクリエーションを中心としたふれあい

○『ランドセル隊』　毎週火曜日　15：00～16：00
近所の小学３・４年生たちの宿題見守りや折り紙作成を中心としたふれあい

○『ちびっこ５年生！』　毎週火曜日　16：00～16：30
近所の小学５年生たちによる、紙芝居の読み聞かせなどを中心としたふれあい

○『近隣の保育園との交流会』　毎月１回　10：30～11：00
近隣の２か所の保育園からの訪問による、お遊戯を中心としたふれあい

＜結果＞

単発的な「イベント」としての子供たちとの関わりだけではなく、定期的な活動の実施によって、利用者と子供たちとの間で「顔なじみ」の関係性を構築することができ、利用者にとっては笑顔溢れる穏やかな精神状況の持続が、そして子供たちにとっては「やさしさ」の芽生えや自分に自信を持つことができるようになるなど、お互いに大きな興味深い変化が生じています。

＜今後の課題＞

幼稚園や小学校の下校時間を活用して利用者たちに楽しいひと時と生きる力を与えてくれる子供たちも、成長するにつれて、お稽古事など自分たちの時間を優先していかなければならない時期がやってきます。今後も引き続き、定期的な子供たちとの交流を深めていくことができるためには、次なる代の新しい子供たちとの出会いを探して上北沢ホームにスカウトし、またホームと子供たちとの信頼関係の中で自然な訪問が継続できるよう、今以上に「開けた」施設づくりに邁進していくことが課題だと考えます。

＜質疑応答＞

Ｑ：次の世代の子どものスカウトはどうしますか。

Ａ：今活動している子どものお母さんのネットワークを利用しています。子どもの通っている小学校や幼稚園の友達に声をかけてもらいます。

Ｑ：運営の中で子どもと高齢者間でのトラブルはありますか。プロセスはスムーズにいけましたか。

Ａ：利用者の気分は変わってしまうため、近くに来た子どもをしかりつけて泣いてしまう例がありました。帰宅後になぜそうなってしまったかをお母さんが子どもに説明してくれます。お母さんの力が大きいです。

＜助言者コメント＞

・きっかけは偶然な働きかけにも関わらず、施設が受け止め、プログラムに結びつけるのが素晴らしいです。制限もありますが、それを乗り越え、また地域の方の声を取り入れていることが良いと思います。

骨折ゼロに向けた原因分析に基づく取り組み

特別養護老人ホーム等々力の家　掛野　祥子、中野　剛

等々力の家ではリスクマネジメント委員会を中心に、介護事故に対して様々な対策・是正がなされてきたが、平成２５年度においては骨折にまで至る転倒事故が増加してしまっていた。そこで高齢者にとって転倒事故による骨折は単なる怪我では済まされず、時には生命をも脅かす程の重大な事故であると考え、積極的な転倒予防対策に乗り出すこととなった。

まず初めに過去の事故の分析を行ったところ、高齢者の骨折を招く要因として、身体的要因、環境、精神的要因の３つに大きく分けられることが分かってきた。身体的要因とは、筋力やバランス能力などの運動機能だけでなく、変形性膝関節症等による関節痛や脱力感、骨粗鬆症等を指す。環境要因とは、不適切な靴の着用、段差や濡れて滑りやすい床等が考えられる。最後に精神的要因には認知症が大きく影響し、自己の能力に対する過信、不安や焦燥感による徘徊は転倒の発生リスクを高めるのではないかと考えた。これら様々な要因が重複することが骨折にまで至る重大事故を招く要因なのではないかと推測され、其々に具体的対策を講じた。

身体的要因には、各入居者の身体状況を把握する為のアセスメントシートを作成し職員間のリスクに対する情報共有を図り、さらに機能訓練内容を見直すことで、残存機能を活かすこととした。環境要因に対しては、適切な靴の着用を促し、事故の発生が多い共用スペースにおいては余計な物を置かない等、整理整頓を図った。精神的要因に対しては、各入居者の体調や行動の変化を注意深く観察し、ひとりひとりの気持ちを汲み取る見守りを心掛けることとした。

様々な取り組みの結果、転倒事故発生件数、転倒による骨折者はともに減少させることはできたが、『骨折ゼロ』の目標を達成するには至らなかった。骨折にまで至る転倒事故を分析したところ、ともにショートステイ利用者であり、本入居者では徹底されていた靴の選定・着用が不十分であったことが主な原因として挙げられた。今後の課題として、ショートステイ利用者に対する転倒予防策の検討が残された。

今回の取り組みにおいて、ケアの基本である個性を理解し寄り添うことの重要性を再認識することができた。今後とも各入居者の生活をより良いものとできるよう、さらなる取り組みを実践していきたいと考える。

＜質疑応答＞

Ｑ：アセスメントシートの更新頻度について教えてください。

Ａ：平成２６年度に作りましたが、点数が高くても転ばない、またその逆もあります。そのため現在は定期的な更新ではなく、シート自体の見直しを行っています。

Ｑ：ランク付け１位は確実ですが、１０位、１１位は大丈夫ですか。ランクによって動く職員はいないのですか。

Ａ：順位が低いから対応しないというのでなく、センサー設置者は反応があればすぐに対応しています。またセンサーが同時に鳴った際「どちらに行こうか」となる時がありますが、このランキングはそういった時の参考になればとの位置付けで考えています。

＜助言者コメント＞

・当たり前に行われている日頃のケアについて、アセスメントシート、ランキング等でまとめるということは情報の共有ができるということです。色々な職員が関わるため、情報の統一が図れて良いと思います。個別のケアも含め、情報の統一は難しいですが大切なことです。前向きにこのようなことを作るのは素晴らしいと思います。

慢性腎不全を抱えるＡさんのグループホームの生活について

発表者　グループホームかたらい　土田　悠
共同研究者　グループホームかたらい2Fスタッフ

○概要

２０１３年の１２月にグループホームに入居されたＡさんは認知症と慢性腎不全を抱えていました。認知症ケアと医療的ケアの複合的な事例であり、そのような方をグループホームで見ていくために何が必要かを今回の事例より学ばせてもらいました。その中で、特に課題と思われた職員間のケアの工夫と、他職種との連携の実践について報告します。

○Ａさんの状況、課題

８０代、男性。アルツハイマー型認知症。既往歴：慢性腎不全、尿閉、その他多数疾患あり。日常生活では特に尿閉におけるバルーンカテーテル留置があり、尿バックをカートに入れて歩行するが、歩行不安定で転倒リスクが高い。また、慢性腎不全のためカリウム、たんぱく質の食事制限があるが、認知症が影響しているのか食事に強いこだわりが見られ「もっと食べたい」「なんかちょうだい」と食に対しての訴えが強い。一方ではトイレを気にされ、頻回に行くこともあり食事に集中できない場面も見られ、安定した栄養摂取が難しい状況だった。

○実践内容

１、ケアの工夫・・・①本人をよく知り、興味のあることを生活に取り入れ、精神面の安定を図る。②食事場面での声かけや環境面での工夫

２、居宅療養管理指導の導入・・・管理栄養士による食事内容の指導

※医療面に関しては、定期的にご家族が腎内科クリニックや泌尿器科へ通院、その他日常面での変化はホーム往診内科医などを利用。

○結果

本人を知り、本人に合ったケアを取り入れることで、精神面はこだわりが少なくなり、落ち着いた時間が増えていった。それと同時に食事や水分摂取が以前よりも増えていくことにつながり生活面、健康面で向上を図ることができた。また、居宅療養管理指導により、腎臓や健康状態と照らし合わせながら食事内容を見直すことができ、一時的にではあるが食事制限を緩和することにもつながっていった。

○まとめ

グループホームで医療ニーズを抱える方を受け入れていくためには、他職種との連携、介護職員の認知症ケアのレベル向上は必要である。いつまでも同じ暮らしが出来るわけではなく、抱える病気や認知症の進行により、いつ利用者の生活が崩れていくか分からない。だからこそ、私たちはサービスの目的を忘れずに、サービスを受ける利用者が安心して暮らせる時間を大切にしていかなければならない。そのためには本人を取り巻く様々な人たちが手を取り合って考えなければならないと思われる。

＜質疑応答＞

Ｑ：グループホームでの栄養管理について具体的に教えてください。

Ａ：医師の管理に基づいています。医師と管理栄養士が連携しています。

Ｑ：グループホームにいる方は認知症の方だけですか。

Ａ：認知症対応型生活介護として、認知症の方が利用しています。料理や家事等を一緒に行っています。

Ｑ：グループホームに入った時の費用はどのくらいですか。

Ａ：施設によって違います。退居時に返金を行なうところもあります。

＜助言者コメント＞

・グループホームにも医療のニーズはあります。看護師が２４時間いらっしゃるということ、２４時間の連携ができているということは素晴らしいことです。毎日看護師がいるということは恵まれていると思います。

みんなで一緒にエイエイオー！　～すべてがリハビリ～

介護老人保健施設うなね杏霞苑　岩渕　光代、武者　卓也、阿南　雄
酒巻　洋佑、小澤　誉志子

＜はじめに＞

老健とは高齢者が在宅生活を維持出来るよう介護や看護、リハビリといった福祉・医療サービスを提供する施設です。当施設では週 2～6 回の個別訓練の時間以外に積極的にレクリエーションを実施しています。レクリエーションを余暇活動としてだけでなく、目標設定をし工夫して実施しているため、それらを紹介したいと思います。

＜レクリエーションの概要＞

・実施回数：月・火・木・金の週４回（祝日とボランティア等によるレクリエーションがある場合は未実施）　水曜日に週１回書道を実施
・時間：14 時～15 時
・実施者：リハビリスタッフ 2～3 名（保育士資格保有者やリハビリ学生も含む）
介護スタッフ１名
・参加人数：入所者約 47 名(最大 61 名)、通所者約３名(最大５名)
(H27.9.1～28 の全 14 回の平均)
・平均年齢：入所者 87.7 歳、通所者 80.5 歳（H27.9.30 時点）

＜レクリエーションの内容（基本型）＞

・日付確認：利用者と共に日付の確認をし、指折りで数える。
・準備体操：活動前に身体へ刺激を入れ、よりよい活動へと繋げる。
・身体的、精神的活動：リハビリを意識したゲームや脳トレ等を日替わりで実施。

例１「送りゲーム」

ボールや紙風船等の道具を使用。3 列（1 列：15～20 名）に分かれ、物品を送る速さを各列で競争する。当苑には片麻痺の利用者様も多く、ゲームの中で利用者様同士がサポートし合う事で、連帯感・協調性が生まれるように意識している。

例２「竹棒体操」

竹の棒を 1～2 本使用し、歌（水戸黄門や散歩等）に合わせて、上半身の体操を行う。また棒を叩き音を発生させ、リズム感を得ることで脳の活性化を図る。

※他にもお手玉や紐、鉢巻やボールなどを使用し、様々なレクリエーションを実施

・発声練習、歌唱：毎月季節に合わせた歌を選択。ただ歌うのではなく音程や声を合わせる事を意識するように声掛けをしながら発声と歌唱を実施。
・整理体操：手話を用いて声を出しながら身体を動かす。

＜まとめ＞

リハビリを「難しい」「大変」と感じている利用者が多い中、“生活すべてがリハビリ”という考えのもとレクリエーションを実施することでリハビリ等の活動に意欲的に取り組むようになったと感じております。こういった取り組みが個々のレベルアップに繋がっていると考えています。

＜助言者コメント＞

・老人ホームの施設ならではのリハビリの種類がたくさんあって、素晴らしいと思います。

・指折りを一緒にしたりして、主体的、自発的にやっていただくという姿勢など、前向きに行われていることがわかって良かったです。

教室型発表　第６分科会　進行役・助言者

荻野　太司（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科専任講師）

中原　ひとみ（特別養護老人ホーム成城アルテンハイム施設長）

教室型発表　第７分科会

最後までその人らしく生きる/その他の取り組み

進行役・助言者
長谷川　幹（三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長）
橋本　睦子（特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ施設長）

	発表者	所属	テーマ
1	武富　宏	社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園	特養久我山園における暮らしの 中での感染症予防
2	和田　拓也	社会福祉法人康和会 ろうけんくがやま	地域包括ケアシステム構築への 取り組み
3	西田　知佳子	世田谷区民	在宅で看取ることのできなかった母
4	森田　雄二	株式会社やさしい手 千歳烏山定期巡回・随時対応型訪問 介護看護事業所	定期巡回・随時対応型訪問介護看護 サービスにおける看取り事例
5	伊能　亮 山田　郁香	社会福祉法人 せたがや樫の木会用賀福祉作業所 昭和女子大学人間社会学部福祉 社会学科３年	社会福祉実習受け入れ側・実習生側 それぞれの立場から
6	泉谷　一美 水上　朽美 鬼塚　正徳	ＮＰＯ法人せたがや移動ケア	移送の安全を考える研究会の活動紹介
7	齋藤　将司 石川　紀子	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課	高齢者・介護者への情報提供、健康管理 の方法について

特養久我山園における暮らしの中での感染症予防

発表者　特別養護老人ホーム久我山園　武富　宏
共同研究者　特別養護老人ホーム久我山園　上村　美智留、市橋　奈緒美
順天堂大学医療看護学部　横山　久美

Ⅰ　はじめに

特養は、介護度が重く、病気と共存する高齢者が集団で過ごす場である。そのため、一人が感染症にかかると他の利用者にも伝播し、アウトブレイク（集団発生）がおこりやすい。当園でも、平成 21 年にノロウイルスのアウトブレイクがあった。幸い、重篤者はでなかったものの職員も感染し、体も心も疲弊してしまうという事態に陥った。それ以降、感染症蔓延防止に力を入れ、現在では単発の発生に留めている。

しかし、平成 27 年 10 月に遺伝子が変異した新型ノロウイルス感染症が他県で報告されており、油断ができない状況である。

そこで、本研究は、感染症蔓延防止に対する職員の意識や行動、態度を確認し、課題の洗い出しを行う事を目的とした。得られた知見は、教育方法やマニュアル整備に役立て、感染源の持ち込み防止と二次被害の予防策を組み立てる資料とする。

Ⅱ　研究の方法

研究方法は、世田谷保健所感染症対策課の社会福祉施設用感染症予防チェックリスト 8 大分類 37 項目（以下、チェックリストと略す）を用いて、当園職員にアンケート調査を行った。各項目は、該当するか否かで「はい」を 1 点、「いいえ」を 0 点と配点した。最高得点は 37 点で、エクセル統計を用いて分析した。倫理的配慮は、個人が特定できないよう加工すること、結果を取りまとめて学会等に発表することを紙面で説明し、アンケートを提出したことで同意を得たとした。

Ⅲ　結果

職員 42 名にチェックリストを配布した。回収率は、85.7％（36 名）だった。大分類の内、最下位は、「6.マニュアルと連絡体制」31.7 点であった。次いで、「1.利用者の健康管理と早期発見」32.7 点、「4.感染症予防のための環境整備」33.3 点であった。「2.職員の健康管理と早期発見」34.0 点、「3.手洗いと標準予防策」34.4 点、「7.嘔吐、下痢の処理について」34.6 点、「5.研修」34.7 点であった。なお、最高得点は、「8.感染拡大防止について」で、37 点と満点であった。

Ⅳ　考察

大分類においては、「6.マニュアルと連絡体制」の最下位でも 31.7 点で、全職員の内、90％近い職員が、感染症蔓延防止の戦略が身に付いていると思われた。その反面、残りの 10％近い職員の知識と行動変容について、再教育が必要と考えられるとともに、誰もが一目見ただけで理解できる現マニュアルの進化が問われた。

引用・参考文献

１）河野知帆、山崎達也、上村美智留、市橋奈緒美：ノロウイルス蔓延防止のストッパー分析　−感染性胃腸炎発生時のクリニカルパスとアクションプランの効果−、第8回高齢者福祉研究大会、東京都社会福祉協議会主催、アクティブ福祉 in 東京‘13、2013.

＜質疑応答＞
Ｑ：写真で職員が消毒していましたが、どこを消毒しているのですか。
Ａ：床、ベッド柵、テレビのリモコンなどを消毒しています。

Ｑ：今後はどのような計画をしていますか。
Ａ：他の職員と共にマニュアルの見直しをしたいと思っています。

Ｑ：「非常勤職員は、常勤職員より（世田谷保健所感染症対策課の社会福祉施設用感染症予防項目）得点が低い」、との発表でしたが、非常勤が常勤より高い得点の項目がグラフにありました。その点については、どのように考えていますか。
Ａ：おっしゃるように、非常勤職員の方が常勤職員よりも高い得点の項目はありました。しかし、エクセル統計で分析しましたが、有意差（$p<0.05$）はありませんでした。

地域包括ケアシステム構築への取り組み

社会福祉法人康和会　ろうけんくがやま　和田　拓也

【はじめに】

きたる 2025 年を見据え、地域包括ケアシステム構築に向けて法人内（病院・特養・老健・居宅支援）職員からなるプロジェクトチームを結成。その取り組み内容について報告する。

【活動の目的】

法人内の連携による地域包括ケアシステムの構築を目的とし、さらに社会福祉法人としての地域貢献活動についても視野に入れた活動ができるか検討。

【実践内容】

平成 27 年 1 月から現在（平成 27 年 10 月 31 日）までに計 6 回のプロジェクト会議を開催。

1 回目・・顔合わせとプロジェクトの趣旨・目標をコミットする

2 回目・・前回会議で各部署に宿題としていた各施設のＳＷＯT 分析の結果報告

3 回目・・各施設の収支状況。財務状況を報告

4 回目・・社会福祉法人の地域貢献活動について行政の動向を踏まえ報告、また法人内の不足サービスについても検討

5 回目・・法人内の不足サービスとして新規事業の提案と地域貢献活動の具体的な方策について検討

6 回目・・新規事業の事業性の検証と、今後の法人内組織の在り方について検討

【考察】

現段階ではまだプロジェクトの途中であり、これから形を成す予定のものもある状況ではあるが、地域包括ケアシステムについて当法人では重要な位置づけをし取り組んでいるということを地域の方々に理解してもらうことと、さらには地域の方々にも参加していただき一緒に作り上げたいと考える。

＜質疑応答＞

Ｑ：自発的、能動的観念が大事だと言っていますが、組織の中のものだけでなく住民にはどのようにアプローチしていますか。

Ａ：今現在はしていませんが、ケアマネジャーの情報だけでなく自分で調べることも大切です。介護予防教室を提供しているので、身近なものになれば考えやすくなると思います。

Ｑ：包括ケアシステムは地域の方々の参加がないと成り立たないと思いますが、今はまだ参加できていないと思います。どのようなニーズがあるかなど、観察の中だとわからないと思います。

Ａ：民生委員の方と情報共有をしながら検討しています。

Ｑ：民生委員と行なっても個人の偏りが出るのではないでしょうか。

Ａ：まずは入口として民生委員さんと取り組みたいと思っています。

＜助言者コメント＞

・法人の中で３つが合体したプロジェクトが増えてきて頼もしいです。プロジェクトの中に住民の方に入っていただけたら、よりよいと思います。

在宅で看取ることのできなかった母

世田谷区民　西田　知佳子

【目的】

2014 年度のこの大会で私は母を在宅で看取りつつあるという発表をした。母は自然死ではあったが在宅で看取ることが出来なかった。なぜ在宅で看取れなかったかを振り返る。

【経過】

前回の発表後 102 歳の母は、小規模ディサービスを利用しながら生活していた。3月の初めにケア会議が開催され看取りの体制である旨往診医から説明があった。その頃から次第に足に力が入らなくなり、歩行器での移動にも介助が必要となった。そして食欲が無くなり食事に 1 時間以上かかり量も減った。昼間も寝ていることが多くなった。時々38 度ぐらいの熱も出た。そのような状態だったためゴールデンウィークは私が介護に専念することにした。母は食事のとき以外寝ていて、目が覚めるとお手洗いに行きたがった。ディサービスにいけなくなった分、ベテランの男性ヘルパーが新たに加わった。しかしヘルパーが来てくれても、母はぐっすり寝ていることが多く、起こすと機嫌が悪くなった。私は母の死を予測し怖くなり気が滅入った。自宅での介護に限界を感じ、時々ショートスティを利用していた有料の施設の相談員に電話をすると、明日からでも預かりますと言ってくれ、翌日迎えに来てくれた。施設で母はいったん元気を取戻した。それまでと違い「家に帰りたい」という言葉は口にしなかった。ケアマネジャーから施設の方がいいかもしれないと言われ、また姉と私も施設での母の様子を見て、家から近く看取りもでき何度か利用したことのあるその施設への入所を決心した。3 か月後の 8 月半ばから食欲が落ち一口食べると寝てしまうという日が続き、9 月に入ったある日母は昼間寝ている間に息を引き取った。

【結果】

3 年前 100 歳の母を在宅で看取りたいと、退職と同時に地域の力を借りながら介護を行った。病院の医療に比べると在宅の医療は侵襲性がなく、臨機応変で患者と家族全体を診てくれた。介護力がなく母は施設での自然死となったが、親族一同満足の行く最期であった。

【考察】

私は母の自然死に直面し、その穏やかな終焉に驚いた。在宅医療とそれに続く自然死は高齢者にとって寿命に逆らわない自然な生き死に方であると感じた。私が自宅で看取ることが出来なかったのは、次第に弱って行く母の最期がどんなになるかわからず怖かったこと、そして歩行・排泄の介助が一人でできなくなったためである。眠るように亡くなる自然死だからこそ、介護力があれば自宅で看取ることは出来る。が、介護力が低い我が家のような場合、最期だけ施設に入所できる制度があると良いと思った。介護者は自然死の流れをわかっていることが大切であると考えた。

【結語】

在宅での母の看取りを目指したが、私一人では介助が出来なくなり、同時に母の死に直面するのが怖くなり、最期は施設での看取りとなった。自然死は穏やかな死で介護力さえあれば在宅で看取ることができることがわかった。

＜質疑応答＞

Q：終末期の介護力が足りなかったとのお話でしたが、看取りのための会議が行われていますね。その時は、そのようなことが予測されていたのでしょうか。

A：その会議の時は、私は終末期の姿を予測できませんでした。また、集まった人たちからも、そのような発言はありませんでした。

＜意見・感想＞

・私の職場ではショートステイで看取りを行なっています。介護保険制度の充実が求められます。国に向けても提案していかないといけないと思います。まずは世田谷区から発信して欲しいです。

・私も介護をしていますが、介護離職は多くあります。医師に在宅で看取りたいと言ったらあまり良い反応を得られませんでした。とてもいい発表を聞くことができました。ありがとうございました。

＜助言者コメント＞

・前回に続いてのご発表で、どのような提案があるかと思っていました。終末期の具体的な提案をなさって、良かったと思います。

・小規模多機能サービスでも、看取りが始まっています。

・最期までトイレに行けるリハビリを考えています。まだ一般化されていませんが、そうできるとよいと思います。最期は食べなくなり寝ている時間が増えるが、よく観察なされました。

定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービスにおける看取り事例

株式会社やさしい手千歳烏山定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所
森田　雄二

【活動の目的】
「住み慣れた家で安心して老いる」というご利用者の想いを実現していくために定期巡回・随時対応型訪問介護看護サービス(以下、定期巡回サービス)を活用し、在宅での看取りケアの実践。
【概要】
A 氏、80 歳代、介護度 5、病名：胆嚢ガン
利用サービス:定期巡回サービス、訪問診療、訪問看護、居宅療養管理指導(薬局)、福祉用具
【経緯】
H27 年 6 月下旬に転倒され ADL 低下が顕著に見られる。病院受診をされた結果、胆嚢ガンの末期と診断される。ご本人・ご家族共に在宅での最期をご希望され、定期巡回サービスを７月より利用する。
【実践内容】
・1 日の状態変化、家族の想いを細目に医療・ケアマネージャーへ情報共有を行い、連携を図った。
・看取りケアの振り返りカンファレンス
【結果】
・日々の状態変化の情報共有を図る事でご家族の想いに応え、最期まで在宅で過ごす事が出来た。
・看取り後の振り返りカンファレンスを関係機関で行う事で、スタッフが看取りに対する心構えや次回へ活かす取組みができた。
【考察】
・定期巡回サービスを活用する事で、プラン上でも定期巡回の臨機応変さによって家族のニーズに応え、実現できたことではないのか。
・看取りの振り返りカンファレンスを行う事で、次回に活かす想いを一つにする事、また、ご家族の想いに寄り添う事の大切さ、ご家族の辛さを実感する事ができ、看取りケアの心構えを作る事ができたのではないか。
【課題】
・看取りケアでは終末期にかけて短時間サービスが増える事が予想され、それに伴う人員確保が課題。
・計画作成責任者として訪問介護や訪問看護のみのサービスに捕らわれず、ご家族やご本人の意向に沿えるよう、地域資源の活用も視野に入れた提案ができるような育成が必要。

＜質疑応答＞

Ｑ：看取りは最後のところでガクッと膝が落ちます。今回の看取りの経過はどうでしたか。

Ａ：立位ができ、食事も摂れていましたが、次第に食事、発語、トイレもできなくなり、７日ほどでお亡くなりになりました。

Ｑ：ご家族の感想はどうでしたか。看取りのカンファレンスは必要ですか。

Ａ：「心のリハビリ」も需要としてあります。家族会などでイメージをつけることも必要だと思います。

＜助言者コメント＞

・家族のケアの必要性を感じました。

社会福祉実習受け入れ側・実習生側それぞれの立場から

社会福祉法人せたがや樫の木会　用賀福祉作業所　伊能　亮
昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科３年　山田　郁香

１．はじめに

用賀福祉作業所は知的障害の生きづらさがある 18 歳以上の方が通所する就労継続支援Ｂ型の施設である。平成 27 年度、初めて相談援助実習（社会福祉実習）の学生を一名受け入れた。

２．目的

社会福祉士を目指す学生は皆、福祉に対する関心、思いは大変強い。しかし実際福祉の現場を体験するのは社会福祉実習が初めてという学生も多い。

実習生が利用者支援の実践の場で、多くの悩み、気づき、喜びを感じながら学び、社会福祉実習を達成感のある充実したものとして終わらせることが実習受け入れ施設の大きな役割である。

そのために実習生が利用者との関係を通して、福祉への関わりを目指す者として正しい視点を持ち自信と意欲を持てるようスーパービジョンを行う事を目的とした。

その結果を実習指導者、実習生双方の視点から発表する。

３．実践内容

受け入れ施設としてまだ指導計画が確立されてない中で、大学、実習生と連携をとり大学の実習計画に沿い、利用者支援における基本視点を繰り返し伝え、利用者との関わりを通して実習生に何を伝えられるのか、何を感じてもらえるのかを重要視した。

実習生に緊張感を持って実習に向き合ってほしいという思いから、実習前のオリエンテーションで用賀での実習のまとめを「せたがや福祉区民学会」で発表する事を提案しところ、実習生が快諾し、実習指導者と実習生が共同で発表する事となった。

毎日、利用者の帰宅後 30 分程度の反省会を行い、その日の実践の振り返りを行った。

日々の実習記録を確認し、朱筆でのアドバイスを行った。

４．結果

実習生が得たものとは

①用賀福祉作業所の印象　・・・・・・・個々の利用者との関係づくりの重要性
②実習で印象に残ったエピソード・・・・お互いがプラスを認め合える仲間関係
③実習を終えて感じたこと・・・・・・・利用者の心情理解の難しさ・大切さ

５．考察

毎日の反省会ではその日感じた疑問や不安をその日のうちに確認することができ、また今日の結果を踏まえた目標を持って翌日の実践に向かうことができた。

実習記録を確認することで、文章を通して指導者と学生の認識のずれや、学生の悩みや戸惑い、気づきや喜びを知る機会となった。

利用者の行動は受け入れられない事でも、心情は受け止められる。その難しさを感じながらも、今年度の実習生は期待以上の成果を挙げてくれた。今後も実習生、利用者、指導者それぞれが主体となった実習体験を通して、試行錯誤を重ねていきたい。

＜質疑応答＞
Ｑ：実習生として作業所で感じたことはありますか。
Ａ：個人の能力の差もあるので工賃を設定するのが難しく、課題だと感じました。

Ｑ：普段の姿が想像できないというギャップはどのようなものでしたか。
Ａ：普段は会話も出来ない方ですが、作業には集中していました。自閉症の方は気分やコンディションによって違います。実習生によってスイッチが入ったと思います。

Ｑ：行動を受け止めないと心情は受け止められません。不適応行動は受け入れられませんでしたか。
Ａ：命にかかわるような不適応行動自体を許容できなくても、そうしたかったという心情を受け止め、その人の辛さに共感することはできます。一番辛いのはご本人という視点で、その行動の原因を考えることが大切だと思います。

＜助言者コメント＞
・初めての相談援助実習生受け入れについて、指導者が実習生とともに発表をしようというのがすごいと感じました。
・利用者理解の実習では、先輩のアドバイスや実習後のフォローが役立っていると思います。

移送の安全を考える研究会の活動紹介

ＮＰＯ法人せたがや移動ケア　泉谷　一美、水上　朽美、鬼塚　正徳

１．はじめに

世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）には、おでかけに困難を抱える方々から様々なケースの福祉輸送（移動サービス）の配車依頼があり、また外出相談や、介護タクシー等利用時の苦情が寄せられます。また、担い手の介護タクシーなどの事業者からも様々な相談が持ち込まれます。そとでるスタッフが記録したこれらの内容をみんなで考える場として。隔月で「移送の安全を考える研究会」を開催していますので、その活動内容を紹介いたします。

２．「移送の安全を考える研究会」の目的と経過

平成 24 年９月に第１回の集まりを持ち、「そとでる」に寄せられる外出に関する相談や苦情について、そとでる登録事業者やケアマネージャー、サービス利用当事者のみなさんからご意見をいただき、問題を考える（公開の）場としてスタートしました。

３．活動内容

（１）そとでるへの相談内容の対応

- 利用者からの苦情（個別ケース）の対応→水平展開
- 事業者からの検討依頼→そとでるの業務改善
- キャンセルの件
- 介助料金の件

（２）安全やサービスの向上

- ドライブレコーダーの利用
- 事業者のサービス、マナーなど　→事業者研修
- 事業者アンケートの回答内容の検討、等

（３）災害時の支援

- せたがや防災ＮＰＯアクションと意見交換と活動参加、等

４．今後の課題

・事業者以外の参加者が少なくなり､活動のＰＲが不足していると認識している。今後、おでかけ支援の問題を多くの方々と話し合う場にしていきたい。

誰もが自由に外出し移動できる
世田谷にするために

そとでる
世田谷区福祉移動支援センター

〒156-0056　世田谷区八幡山 1-7-6
TEL:03-5316-6621
FAX:03-3329-8311
info@setagaya-ido.or.jp
http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/

＜質疑応答＞
Ｑ：「そとでる」の月１回の会議はどのような内容ですか。
Ａ：外出に困難を抱える利用者から「そとでる」に寄せられる相談や、それに対するスタッフの回答について、その内容をオープンな場で話し合い適切な対応を考えることで、対応するスタッフのスキルアップにつながり、やるべきことが明確になります。相談内容は全てが苦情ではなく、利用して良かったとか助かったという話もいただき、スタッフや事業者のモチベーションアップにもつながります。またそのことを、情報として関係団体や事業者にもつなげています。

＜助言者コメント＞
・横につながる支援やマンパワーは、非常に大切だと思います。

高齢者・介護者への情報提供、健康管理の方法について

世田谷区高齢福祉部高齢福祉課　齋藤　将司、石川　紀子

＜はじめに＞

世田谷区では、冊子「シルバー情報」や区ホームページで介護情報等の周知に努めているが、情報量が膨大で緊急時になかなか必要な情報にたどりつけないという指摘がある。特に、介護はある日突然必要となることもあり、支援の遅れは適切なサービスを利用できない事態につながる可能性がある。

こうしたことから、介護者や家族、高齢者を主な対象者として、介護保険制度や利用者の属性に適した区のサービス情報が容易に入手できる環境を整備するため、スマートフォン・タブレット端末用アプリの構築・運用事業への取組みを開始した。

＜開発のコンセプト＞

介護者向けの情報提供にとどまらず、高齢者自身の利用も想定した地域情報の配信や、認知症の気づきチェック等による健康管理機能も盛り込み、普段からの利用を促している。

＜取組み経過＞

H27.2～4　庁内検討会（全４回、庁内関係所管）
H27.5～8　構築検討会（全３回、庁内関係所管、開発事業者、家族介護者、訪問介護事業所、通所介護事業所、民生委員、ＮＰＯ、ケアマネジャー、社会福祉協議会、あんしんすこやかセンター等）
H27.6　区民意識調査（区政モニター制度を活用）
H27.5～9　アプリ構築
H27.10.1　アプリ配信開始

＜アプリデザインと主な機能＞

デザイン

・文字やボタンを大きくし、目的の情報にたどり着くまでの操作が少ない構成。

主な機能

・情報提供
　１．利用者の状況に適したサービス検索（年齢・介護度・世帯の状況で絞込み）
　２．利用者の属性に応じた情報提供（年齢・居住区域毎にお知らせを配信）
・健康管理
　１．認知症の気づきチェック（東京都福祉保健局作成のチェックリスト）
　２．健康に関する基本チェック（２５項目の基本チェックリスト）
　※結果の点数により相談窓口を案内。また、チェック結果（直近５回分）がアプリ内に保存されるため、過去の履歴と比較することが可能。

＜課題と今後の方向性＞

区の広報媒体だけでなく地域のイベント等とも連携し、ＰＲ活動の強化に努める。また、利用者からの意見を収集・分析し、定期的に機能改善を行うことで、より使い易く便利なアプリへと改善し利便性の向上を図る。

＜質疑応答＞

Ｑ：高齢者でも、こういった機器を使いますか。

Ａ：もっと多くの人にアプリを使っていただけるようしていきたいと思っています。

Ｑ：６５歳でもそのような状況でしたら説明したほうが良いです。高齢者自身も情報を収集することは大切です。

Ｑ：区民向けにパソコンの使い方の説明会はしていますか。

Ａ：高齢者用に操作講習をやっているところもあります。

＜助言者コメント＞

・コンシェルジュのような「しゃべる」機能があるといいと思います。また、アプリ機能で認知症のチェックがあると自主的にチェックできて良いです。馴染みのあるものにしていけるといいと思います。

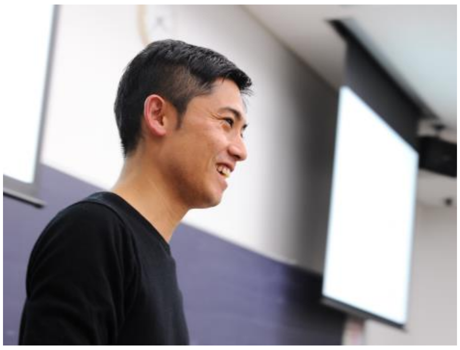
教室型発表　第７分科会　進行役・助言者

長谷川　幹（三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長）

橋本　睦子（特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ施設長）

ワークショップ

テーマ：『何が必要？未来のせたがや福祉のシティ』



＊助言者　辻本　きく夫
（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

＊全体進行　中浜　崇之
（介護ラボしゅう代表）

＊運　営　「介護ラボしゅう」　５人
＊参加者　２４人（区民６人、大学生２人、福祉サービス従事者１５人、
　　　　　他領域事業者１人）
＊内　容　ワールドカフェ方式によるワークショップ
「お互いの知識や経験、発想から、世田谷の未来のシティを考えてみましょう」
・生活のしにくさを共有してみましょう
・未来の世田谷に向けて、自分たちのできることを見出してみましょう

ワークの流れ

第１ラウンド
テーマについて探求する
テーマについて対話開始。

第２ラウンド
第３ラウンド
アイディアを他花受粉する
各テーブルに１名残り（ホスト）、他のメンバーは別のテーブルへ移動する。改めて自己紹介。
ホストはこれまでの話題を新メンバーと共有。更に話を発展させるなど、テーマについて対話を進める。

振り返り
気づきや発見を統合する
初めに集まったグループに戻り、本日始まる前と今について印象を話す。

全体シェア
集合的な気づきを共有する
振り返りで上がってきたものを発表し共有する。

＊各グループの意見から…

・地域を IT で支える。遠隔の見守り。
・気づける力。築ける力。
・人の生活の見える化。
・高齢者のこと、見てても見ていなかった。アンテナを持つことが大切。
・地域住民と大学生がもっと混じる。
・地域と大学がもっと関わりを持つ。
・交流のきっかけはいろいろ。私は「焼き芋好き」で交流しました。
・ロボットのある生活はどう変わる？

・人とつながることが大事。
・子どもの頃からのふれあいが必要。
・情報を通してつながることもある。
・「助けて」といえる関係づくり。
・健康で自分のことは自分で。
・情報は、それを行っているところから発信する。
・地域のバリアフリー。
・全員を知らなくてもいい。左と右を知っていればみんな知り合い。

『何が必要？未来のせたがや福祉のシティ』

・仕事の顔と自宅の顔。
・地域の活動を長く続けたが、引き継ぐ人がいない。
・ゆるくつながることも大切
・地域の安心は「つながり」。
・声を掛け合える関係づくり。
・病気をして、どのように最期を迎えるか考えた。
・人間一人では生きられない。
・会話は大切。

・空き家が多い。学童や保育に活かしたり、地域に開放できたらいい。
・本当の予防とは。学生ならすぐにできる。一緒にやるよ。手伝うよ。誰もが関われる場所。
・働く女性の負担が大きい。
・安心して仕事ができる。
・地域に大学がある意味は。
・暮らしに余裕がないね。
・ゆるやかな人の輪。

ファシリテーター

奥平　幹也

久保　恭子

斎藤　博子

加藤　信一

全体会Ⅱ

大会総括

司会／皆さま、お疲れさまでした。これから全体会の締めをさせていただきます。全体会Ｉに続き司会を務めます日本大学文理学部の諏訪です。
さっそく今日を振り返ってみます。
最初は、長谷川先生からのインパクトある基調講演でした。
それから１３のパネル型発表、４５の教室型発表、そしてワークショップによる実践研究発表が行われました。
また、区内障害者施設の手作り品展示販売や、学生交流会「せたがやＬｉｎｋ！」による「ほっとスペース」という喫茶コーナーも開かれました。
さて、第７回大会の締めくくりとして、これら様々な本日の会場の様子を、参加者の皆さんとシェアしたいと思います。会場の皆様からのご発言をお願いします。

【特別養護老人ホーム久我山園施設長の市橋様】
「第７分科会を聞きました。最初、私どもの施設から感染症の発表をして、次に同じ法人から地域包括ケアについての発表がありました。その後、区民の方や事業所の方の話を聞くことができました。何年か単発で話を伺っていましたが、今回は、前回の発表につなげて発表されたり、その方が私どもの施設で看取りのシンポジウムを行った時に参加された方だったりしました。
　施設内で行う看取りと、在宅の方が抱えているお悩み、在宅での看取り、いろいろなことが繋がっています。縦にも横にもつながっています。そんな感想を今日は抱かせていただき、大変よい分科会だったと、私は感じております。ありがとうございました」

司会／ありがとうございました。
いろんな立場の方が来ていらっしゃるのが、この学会の魅力ですし、積み重ねになっているということですね。回数を重ね、深まりが出てきたのでしょうか。ありがとうございます。

【株式会社すずらん代表取締役の今井様】
「私は、第４分科会の進行役をしました。今日はいろんな発表の方が来られて、会場でもいろんな方が手を挙げて質問などをされ、すごくいい雰囲気だと感じました。その中でも、一つ僕が頼もしいと思ったことがあります。隣に座っていたタイムキーパー役の学生さんがチーンとベルを鳴らした後で、私が『質問ありますか』と聞くと、『私

に質問させてください』と、その学生さんがおっしゃったのです。僕はそれを見てとても頼もしいと思いました。運営側の人も参加できるのだと。そこからすごく勇気をもらいました。そのことをお伝えしたいと思いました」

司会／ありがとうございます。
プロの方と学生が肩を並べて発表し合う場なんて、普通はないですね。すごく面白い場所だと思います。

【せたがや福祉区民学会学生交流会「せたがや Link!」駒澤大学学生の牧田様】
「今日は『ほっとスペース』で活動しました。また、パネル型発表では、１年間の活動を紹介しました。それに対していろんな方のご意見をいただいて、来年できたらよいなと思うこともたくさんありました。ぜひ来年の活動に生かしたいと思いました。『ほっとスペース』も、メニューの一部は途中で品切れになってしまったのがあったので、こちらも考えていきたいと思います」

【日本大学文理学部社会福祉学科学生の安藤様】
「休憩の時間に、１つの分科会の発表に行きました。そこで、せたがやゼミナール、せたゼミというボランティア活動について、自分が当事者として関わっているところの発表が聞けて、非常に嬉しく思いました。こうした場があるのは学生にも勉強になるので、また来年も出たいと思います。ありがとうございました」

司会／学生にとっても、発表は学びの場になっていると思います。

【世田谷区老人問題研究会理事の加藤様】
「第２分科会でした。その中で学生さんが、日大サロン「さくら」の発表をされました。大学がサロンを開いて地域の方々を呼び込む初めてのケースだという話に、まず感心しました。また、それにも増して、ゼミナールをやったということです。その題材が障害者施設を建設することについて、どう思うかというテーマだったということです。そういう難しいテーマを、学生さんたちだけで、ゼミナールで、地域の方と話し合ったということは、学生さんたちも勉強になったと言っていたし、地域で参加された方も、障害者施設を知るきっかけとなったのではと思い、印象的な報告でした」

司会／サロンの話が出たところで、学生さんからの発言はありますか。

【日大「さくらサロン」の日本大学文理学部社会福祉コース４年の宮嶋様】

「今、お話しいただきました、日大『さくらサロン』の宮嶋です。このサロンは、立ち上げから学生が主体で行ったので、振り返りをして感慨深い思いに浸りました。また、『さくらサロン』を開くにあたり地域の方から助言をいただき、今日も感想をいただけました。これからの活動は、後輩たちが引き継いでくれると思います。学生生活は４年しかないので、引き継いでいくこと自体大切なことです。引き継いでどうなったかは、来年、ぜひ後輩が発表してくれると嬉しいと思います」

司会／今回、新しい試みとして、ワークショップをやりました。それを企画された、介護ラボしゅうの皆さん、いらっしゃいますか。学生も地域の人もプロの人たちも一緒のテーブルを囲んで、素敵な風景だなと、会場を覗いた時に思いました。

【「介護ラボしゅう」代表の中浜様】

「初めまして！中浜です。今回ワークショップをして一番良かったのは、いろんな世代の人が同じテーマでコミュニケーションがとれたということです。学生から、おじいちゃんの世代まで、同じ事について一緒に話す場を、大学というところで持てたことが面白かったと思います。何かゴールを決めて話し合うというのではなく、同じ視点で同じ立場で考えていく場が必要だと、お一人お一人の気づきにあったこと、それから、日頃思っていることはあるけど、それを発信する場がないねという発言が多かったと思います。専門職だけ、地域だけで何かを考えるだけでなく、そこをミックスすることで面白いことができるし、福祉、介護、医療とは関係ない人も参加することが大事だと、改めて実感しました。今回は３０人くらいでやりましたが、来年は５０人くらい入れる教室で行うことができたら、もっと面白いと思います。そういう体験を大学生に体感していただきつつ、自分たちの人生の先輩に知恵をいただくことが、すごく学生にとっても地域にとっても重要だと思います。ぜひ体感していただきたい。自分で感じることが大事だと思います。来年、よろしくお願いします」

司会／来年へのリクエストをいただきました。ぜひ引き継いでいただきたいし、ワー

クショップがもういくつかあってもいいなというのは、司会者の勝手な思いです。持ち込みで皆が議論できる場があると、深まりが出てきます。その場を共有させていただいて思いました。

【世田谷区職員の瓜生様】
「第２会場のパネルの発表で助言者をやらせていただきました。７つのテーマで発表があり、その中で、元気な高齢者の方々からは、自分たちのモットーは『きょういく（今日行く）』と『きょうよう（今日用）』だと話されていました。今日行くところがある、今日用事があるというのは大事なことだというお話です。また、最初は家族会をやっていたが、今は自分たちの介護予防の取組みになっているというお話をいただきました。それから、子ども子育て会議という区の計画について、自ら子育て中の皆さんがつながっていこうと提案をされた取組みについて発表がありました。本日は、つながるというテーマもありました。その、つながるというのが、子育て中の、区では妊娠期から切れ目のない支援で取り組んでいますが、今日の発表では妊娠よりもっと前、青年期からの切れ目のない支援が大事だという話を聞きながら、『今日行く、今日用』の部分、介護予防まで、地域皆でつながり、よりよい地域づくりができればと、気持ちを新たにしたところです。
区の宣伝をさせていただくと、本日の資料の中に緑のチラシが入っています。世田谷高齢介護･応援アプリを公開しました。ダウンロードしていただければと思います」

【特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ施設長の橋本様】
「長谷川先生と一緒に第７分科会を担当しました。こちらの会は、看取りをメインにしながら、その他いろいろということで、７つの発表がありました。１つ感じたのは、一法人さんが地域包括ケアを始めるのに、法人内連携で介護プロジェクトを作ったという報告がありましたが、区民からは区民の意見を聞かずにどうする、という意見がありました。それはごもっとも。区民学会らしく、区民が参加して地域福祉をつくるというエネルギーを感じました。また、区民の方が自分で看取りの計画を立てながら苦労されたというお話がありました。区民が福祉を自分で創っていくところが続いて、福祉区民学会の意義がリアルに感じられたところがありました。これでますます、皆でつくる福祉、福祉が文化になるという世田谷のキャッチフレーズのようになっていければと思いました。今日はありがとうございました」

【三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長の長谷川様】
「僕も、橋本さんが今おっしゃった、区民の参画、区民学会という、区民が改めてクローズアップされたという感じが本当にしました。もう１つは、学生さんが実習に行って、その実習発表に、この場をうまく活用されたということがありました。それも、実習先と学生さんの２人での発表で、こっちはこうでこうだという、それも印象深かったです。学生の皆さん、来年ぜひ、実習に行ったら発表されるといいなという気がしました。このような福祉区民学会の活用が、医療、保健、福祉だけではなく、区民

を意識した学会へと、着実に歩んでいるという印象を強くしました」

司会／ありがとうございます。実習の発表をしてほしいし、サークル活動にも使ってほしいです。
このようにいろんな人から意見を聞ける場所はありませんからね。

【砧地域ご近所フォーラム２０１６実行委員会の安藤様】
「私も、今日は学生さんの素晴らしい発表に感動しました。私たちおじさん、おばさんは若い方が大好きです。どんどん参画していただきたいと思います。私が聞いたところでは、日本大学商学部の学生さん方による国際ボランティア学生協会「IVUSA」の皆さんが、大蔵住宅の１軒ずつを回ってインタビューの答えをもらったという、感動する発表がありました。直接訪問して聞き取りをしての結果を発表しているのが素晴らしいと思いました。アンケートを送って回答を解説する医師会の先生の発表とは違います。
自分で行ってみると、空き家がいっぱいあると気づいたり、この人は１人では生活できない、という気づきがあります。現場を知らない主治医の先生にも教えてあげてほしいです。ぜひ自分たちがやっていることをどんどん発信していただき、一番知らなそうなお医者さんにも教えてあげてほしいと思います」

【東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科助手の吉村様】
「私どもの大学からは、今回は、野菜の摂取量増加を目的とした地域の方と協力した活動と、インターナショナルスクールの食育の活動、スーパーマーケットにおけるカルシウム摂取量増加の活動の３つの報告をしました。私はカルシウムについての発表でしたが、今回こういう発表をして、地域の方の協力があって、こうした活動ができるのだと思いました。ぜひこれからも、地域と連携した活動を続けていきたいですので、またご協力いただけると幸いです」

司会／ありがとうございます。学生の発表の場であり、区民の方の発表の場であると同時に、仕事をされている事業者の方も、この場を発表の場として使われています。すごくいいことだと思います。

【世田谷区介護サービスネットワーク代表の辻本様】
「準備会の段階から、我々事業者の中から、かなりの数の発表をさせていただいています。最初のうちは、私が声をかけて発表を頼んだものもたくさんあったのですが、最近はそういうことが全く必要なくて、ここで発表するのを目標として、いろんな研修や研究をやっていると思います。今後も一緒にやっていけたらいいなと思っています。ありがとうございました」

司会／日頃の実践をとりまとめて発表するのは、誰にとってもすごく意味のあること

で、それがすごく身近な場であって、しかも交流になりますよね。また積み重ねもできます。そういう深まりも見えてきました。ありがとうございます。

【日本体育大学の学生】
「大人に一言、言いたいのですが。学生です。子ども、学生を好きと言うのですが、ほんまに好きやったら、僕らが出てくる芽を引き上げてほしいなと思う。発表者と、もっとそのことについて、本気で言い合ったりできたと思うし、質問がないまま終わった発表とかもあったから、そういうのでは、到底良くはなっていかないと思う。もっと点と点がつながって、面白いと言い合える話ができたら、更に良くなると思って。偉そうなことを言いましたが、一言言いました」

司会／大人代表、誰かいませんか。そうですね、別に学生も褒められたいばかりじゃなくて、本気で議論ができるまでできればいいなと思います。学生にとっても、大人が本気でかかってくる場所になると面白いかなと思います。どうもありがとうございました。
ここでいろんな活動の積み重ねの深まりが見えてきたと思うので、これが次にうまくつながっていけばと思います。

区内障害者施設手作り品販売

休憩・交流スペース「ほっとスペース」

　ｂｙせたがや福祉区民学会学生交流会「せたがやＬｉｎｋ！」

次回開催校挨拶

東京都市大学人間科学部部長　井戸　ゆかり

皆さん、こんにちは。

ご紹介にあずかりました次回開催校であります、東京都市大学人間科学部部長の井戸です。
隣にいるのは、次年度の実行委員長の園田です。
その隣が副委員長の予定の伊藤です。その隣が委員の倉田です。

次年度第８回大会は、１１月２６日土曜日の開催を予定しています。

私どものキャンパスは、世田谷区に等々力と世田谷の２ヶ所ございます。私たちが所属しているのは等々力キャンパスにあります。以前、そこでこの大会を受けたことがあります。バリアフリーの関係で、今回は、世田谷キャンパスのほうを確保しております。

世田谷キャンパスは、東急大井町線の尾山台駅が最寄りとなります。今、いろいろな方から申し渡しをしていますが、次年度の引き継ぎをして準備をさせていただきます。

また来年、私どもの大学でお会いできるのを心待ちにしています。

今後とも、よろしくお願いします。

第７回大会実行委員長挨拶

せたがや福祉区民学会第７回大会実行委員長
上之園　佳子

実行委員長の上之園（あげのその）です。
本日は晴天にも恵まれ、この大学の３号館の５階から、素敵な風景を見ていただけたと思います。５年前にこの会場で開催したときも、終わりはこういうふうに黄昏れていました。東京タワーもスカイツリーも見えます。終わった後、ちょっとお疲れを癒すべく、見て帰っていただければと思います。
本日、この良い天気の日に、これだけの多くの方にお集まりいただき、本当にありがとうございました。

本日の報告をいたします。
およそ５３０人の方が、本日の学会に参加してくださいました。
内容については、ただいま諏訪先生が、司会のフリートークで総括させていただきましたが、私からは、本日の大会の運営に関わった方たちの紹介をしたいと思います。
まず、スタッフとして、本日は、ボランティア学生が７６名です。日大文理学部だけではなく、昭和女子大学、東京都市大学、駒澤大学、日本体育大学、東京医療保健大学の学生たちが参加してくれています。（会場から拍手）ありがとうございます。大学を超えて、世田谷の中で、福祉に関することを学んでいる学生たちが、お互いに自己紹介をし、それぞれの担当で力を合わせる姿を見て、本当にありがたい輪だと思いました。
それから、スタッフとしては９２名です。社会福祉事業団、区の職員の方、実行委員。実行委員の中には、公募で一般の区民、事業者も参加していただいています。そして、ボランティア区民、カメラマンなど、いろいろな形で参加してくださっています。
それらの方たち、お立ちいただけますか。
（会場から拍手）
それら多くの方たち、何よりも参加してくださった方たちのおかげをもちまして、今日、本当に無事に大会を終えることができました。

この大会は、日本大学文理学部が開催校として行うということで、新たなチャレンジを３つほどしました。
１つが、先ほどの全体会Ⅱで行う大会統括のスタイルです。
総括は、今まで各分科会の報告の形でしたが、フリートークという形で、皆さんのご意見

があって初めて大会の様子が見えてくるという形にさせていただいたのが１点目です。成功だったのではと感じています。
それから、もう１点は、分科会のテーマに関してです。
この学会で発表するというときに、今までは分科会は主催者側で決めていました。
それを、各テーマをつくり、自分が発表したいテーマの中で、グルーピングをして分科会を開設しています。もちろん数にばらつきがあったので、１つについて１つずつの分科会とはいかなかったのですが、そのおかげで、今日、久我山園の方が報告してくださったように、同じ関心のある方たちが集まっているので、分科会の中に流れができたとか、或いは、あちこち移動しなければいけなかったのが、ここで２つ聞いていくというように、自分の関心の分科会のところに参加できるという意見もありました。私のところに届いたのは、良い意見ばかりだと思いますので、忌憚なく、新しい試みに対して、決して成功だけではないと思いますので、ご意見をいただけたらと思います。
３つ目の試みが、ワークショップです。
先程の総括でご意見をいただいたように、発表し相互で質疑応答する形を更に深めて５０分間、いろんな年代の方の話に耳を傾け、自分の思いを発信しました。そこで、いろいろな価値観が行き交い、共有できたり、もしくは違うと理解できたり、知るということも大事だと思います。こういう相互の関係のワークショップも、ちょっと成功だったかなと思っています。
これらの３点を実施するにあたっては、いくつか心配事もあって、例えばワークショップをすると分科会の人数が少なくなるんじゃないかなど、いろいろありました。しかし、先ほど少しずつ区民の方も加わり、この学会が進歩しているのではというお話もありました。そういう学会にするためにも、一歩ずつ進めていきたいと思います。

それは、今日、基調講演をしてくださった長谷川先生も、今までは、高齢者、福祉、介護といった事業は、支える役割でありましたが、そうではなく、５０、６０、７０歳以上はもはや余生ではなく、本生だということです。
その言葉を聞いて思い出したのですが、７４歳で大学を退職される先生が、「これまでは

人生の序章。これからやりたいことができる」と。その言葉は、アメリカのワシントンの公文書館の入口に書いてあるそうです。それをもって、いくつになっても自分のやりたいこと、自己実現に向かっていく。それをするためには、やはり社会と関わり、地域で自分の力を発揮できる場所、あるいは自己実現できることが必要です。

それはたぶん、そういう年代を問わず、ライフコースというものが、いくつの年代であっても必要で、そういう意味ではこの学会は、さまざまな年代の人たち、あるいは区民の方、あるいは専門職で、それぞれ頑張っている日々の実践等、それを報告できるということで、とてもいい場所です。

これから国は地域包括ケアと言っていますが、このように、地域から、包括ケアの方へ発信したり提言したり、また見えてくる場になっていくと思います。
そういう感想を持つ素晴らしい学会だというのは、自画自賛でしょうか。

皆様のおかげです。ありがとうございました。
それでは、以上をもちまして、せたがや福祉区民学会第７回大会を終了します。

資　料　編

- せたがや福祉区民学会　役員名簿
- 第７回大会実行委員名簿
- 第７回大会実績
- 団体会員名簿
- 設立趣旨

【順不同】　　　　　　せたがや福祉区民学会役員名簿

役職	氏　　名	所　属／職　名
会長	永山（ながやま）　誠（まこと）	昭和女子大学大学院特任教授
理事	上之園（あげのその）　佳子（よしこ）	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	今泉（いまいずみ）　礼右（れいすけ）	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	井戸（いど）　ゆかり	東京都市大学人間科学部児童学科教授
理事	佐藤（さとう）　光正（こうせい）	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
理事	森本（もりもと）　修三（しゅうぞう）	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
理事	横山（よこやま）　順一（じゅんいち）	日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻准教授
理事	竹内（たけうち）　孝仁（たかひと）	国際医療福祉大学大学院教授
理事	大熊（おおくま）　由紀子（ゆきこ）	国際医療福祉大学大学院教授
理事	長谷川（はせがわ）　幹（みき）	三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
理事	加藤（かとう）　美枝（よしえ）	世田谷区老人問題研究会理事
理事	村田（むらた）　幸子（さちこ）	福祉ジャーナリスト
理事	山﨑（やまざき）　順子（じゅんこ）	東京都発達障害者支援センター長
理事	植田（うえだ）　祐二（ゆうじ）	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
理事	辻本（つじもと）　きく夫（お）	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	中原（なかはら）　ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
理事	田中（たなか）　文子（あやこ）	世田谷区高齢福祉部長
理事	福田（ふくだ）　督男（とくお）	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	佐藤（さとう）　健二（けんじ）	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	阿竹（あたけ）　恵（めぐみ）	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	河合（かわい）　岳夫（たけお）	世田谷区会計管理者
監事	牧野（まきの）　まゆみ	日本放送協会学園高等学校教諭

第４期（H27.4.1～H29.3.31）

せたがや福祉区民学会　第７回大会実行委員名簿

		氏　　名	所　属／職　名
◆◎	委員長	上之園　佳子	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆	副委員長	諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆		今泉　礼右	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆		川村　宣輝	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆		井上　仁	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆		山田　祐子	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆		金子　絵里乃	日本大学文理学部社会福祉学科准教授
◆		後藤　広史	日本大学文理学部社会福祉学科准教授
◎		永山　誠	昭和女子大学大学院特任教授
◎		佐藤　光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◎		井戸　ゆかり	東京都市大学人間科学部児童学科教授
◎		横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科准教授
◎		森本　修三	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科教授
◎		長谷川　幹	三軒茶屋リハビリテーションクリニック院長
◎		加藤　美枝	世田谷区老人問題研究会理事
◎		村田　幸子	福祉ジャーナリスト
◎		山崎　順子	東京都発達障害者支援センター長
◎		植田　祐二	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
◎		中原　ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
◎		阿竹　恵	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
		鬼塚　正徳	特定非営利活動法人せたがや移動ケア
		園原　一代	特定非営利活動法人ハートウォーミング・ハウス
		上原　美江子	砧地域ご近所フォーラム2016実行委員会
		山口　公司	社会福祉法人友愛十字会砧ホーム
		大野　和啓	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係
		八木　早知子	世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課障害者就労支援担当
		石塚　典子	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団総務課

◆印は、開催校の委員　　◎印は、学会運営委員

事務局

	浅羽　祐子	日本大学文理学部社会福祉学科事務室
	舘坂　綾乃	日本大学文理学部社会福祉学科事務室
	森川　敦子	世田谷区福祉人材育成・研修センター次長
	増田　明子	世田谷区福祉人材育成・研修センター
	冨樫　恵	世田谷区福祉人材育成・研修センター

第７回大会実績

参加者数 528 人

内訳）来場者 360 人
当日スタッフ、ボランティア、理事等役員 168 人（うち学生ボランティア 76 人）

分科会参加者（各発表終了時の人数：単位　人）

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
パネル型第１会場	4	6	10	11	7	5	
パネル型第２会場	11	3	5	3	6	5	8
第１分科会	23	28	22	25	18	16	
第２分科会	36	48	30	35	38	34	48
第３分科会	30	27	18	16	14	22	
第４分科会	15	19	21	33	38	15	
第５分科会	7	8	12	12	15	18	
第６分科会	40	41	61	59	27	34	30
第７分科会	15	11	25	18	11	6	20

その他
＊パソコン文字通訳（総会、全体会）及び手話通訳（総会、分科会、全体会）をお願いしました。
＊当日は、日本大学はじめ会員大学の学生を含む計 83 人のボランティアの方々に、設営・会場案内・記録・写真撮影・休憩コーナー運営等の大会運営にご協力いただきました。
＊区内７ケ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。

団体会員名簿

（平成27年12月末現在）

	団体名
1	社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷
2	東京都市大学人間科学部児童学科
3	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホームさつき荘
4	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園
5	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家
6	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
7	社会福祉法人　日本フレンズ奉仕団　フレンズホーム
8	特定非営利活動法人　語らいの家　グループホームかたらい
9	社会福祉法人友愛十字会　砧ホーム
10	医療法人社団慈泉会　介護老人保健施設　うなね杏霞苑
11	世田谷福祉専門学校
12	特定非営利活動法人　NPOはぁと世田谷
13	有限会社　ヘルパーサービス和知
14	世田谷区立きたざわ苑
15	社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
16	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（特養）
17	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（短期入所）
18	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（特養）
19	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（短期入所）
20	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム世田谷
21	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム太子堂
22	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム弦巻
23	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム松原
24	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム芦花
25	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム上北沢
26	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷一丁目介護保険サービス
27	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢介護保険サービス
28	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花介護保険サービス
29	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂介護保険サービス
30	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上町地域包括支援センター
31	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂地域包括支援センター
32	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢地域包括支援センター
33	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢地域包括支援センター
34	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上祖師谷地域包括支援センター
35	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷ホームヘルプサービス

	団体名
36	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　烏山ホームヘルプサービス
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションけやき
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション北沢
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション芦花
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションさぎそう
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　パルメゾン上北沢
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　総務課
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷区福祉人材育成・研修センター
45	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
46	社会福祉法人康和会　久我山園
47	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所　すこやか園
48	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
49	社会福祉法人嬉泉 こどもの生活研究所　おおらか学園
50	世田谷区発達障害相談・療育センター
51	社会福祉法人古木会　成城アルテンハイム
52	社会福祉法人世田谷ボランティア協会福祉事業部
53	世田谷区介護サービスネットワーク
54	日本大学文理学部社会福祉学科
55	世田谷区
56	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
57	社会福祉法人　福音寮
58	株式会社桜丘在宅サービスセンター赤とんぼ
59	ハブネットせたがや
60	世田谷区立千歳台福祉園
61	日本体育大学体育学部健康学科福祉支援専攻
62	社会福祉法人大三島育徳会　世田谷区立玉川福祉作業所
63	砧地域ご近所フォーラム2016実行委員会
64	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立駒沢生活実習所
65	グループホームももちゃん
66	トラストガーデン桜新町
67	世田谷区老人問題研究会
68	セントケアリフォーム等々力
69	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所
70	学校法人青葉学園　東京医療保健大学

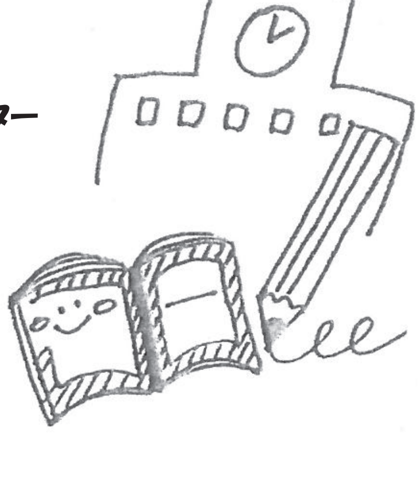
	団体名
71	社会福祉法人奉優会　等々力の家　居宅介護支援事業所
72	社会福祉法人奉優会　深沢あんしんすこやかセンター
73	社会福祉法人奉優会　奥沢あんしんすこやかセンター
74	社会福祉法人奉優会　通所介護　等々力の家デイホーム
75	社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
76	社会福祉法人奉優会　優っくりデイサービス喜多見
77	ベネッセスタイルケア　成城歐林邸
78	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム鎌田
79	老人給食協力会 ふきのとう
80	社会福祉法人奉優会　優っくり小規模多機能介護喜多見
81	社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻
82	社会福祉法人せたがや樫の木会　上町工房
83	社会福祉法人老後をしあわせにする会　 グループホーム奥沢・共愛
84	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立九品仏生活実習所
85	社会福祉法人せたがや樫の木会　用賀福祉作業所
86	社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房
87	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム喜多見
88	社会福祉法人奉優会　奥沢居宅介護支援事業所
89	社会福祉法人奉優会　代沢あんしんすこやかセンター
90	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム池尻
91	社会福祉法人せたがや樫の木会　わくわく祖師谷
92	NPO法人　国際ボランティア学生協会（IVUSA）
93	在宅介護家族の会「フェロー会」
94	社会福祉法人奉優会　デイホーム野沢
95	世田谷デイハウス　イデア北烏山
96	株式会社サンケイビルウェルケア・ウェルケアガーデン馬事公苑
97	株式会社やさしい手　千歳烏山定期巡回・随時対応訪問介護看護事業所
98	株式会社やさしい手　おまかせ事業部 地域交流レストラン事業課
99	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬

せたがや福祉区民学会設立趣旨

福祉活動は、何よりも実践を基本とします。と同時に、その実践の質を高め、内容が広く地域の人々に共有されることが望まれます。世田谷の福祉活動は、地域の中で行われている実際の日常的実践について互いに発表し合い、認識し合うことによって、さらに高まっていくことでしょう。また、自分たちの実践が、地域全体から眺めれば、どのように位置づけられるのか、実践している人々が再発見することも大切です。

せたがや福祉区民学会は、世田谷区の福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に対等平等な立場で、福祉実践活動の工夫や抱える課題についての研究の成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成２１年１２月に設立されました。

せたがや福祉区民学会

発 行　せたがや福祉区民学会
発効日　平成28年3月

＜事務局＞
世田谷区社会福祉事業団　世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒157－0066
世田谷区成城6－3－10　成城6丁目事務所棟1階
TEL　5429－3100　FAX　5429－3101
E－mail fukushijinzai@setagayaj.or.jp
URL　https://www.setagaya-jinzai.jp